

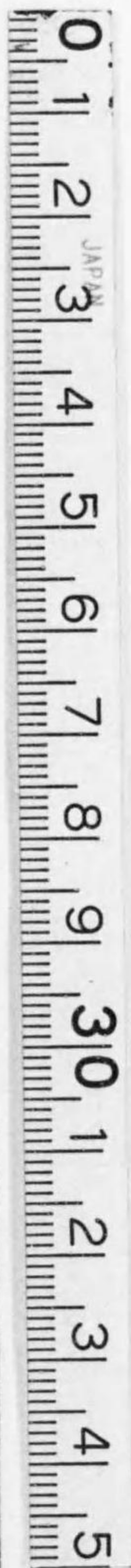
53-334



1200501265784

53

4



始



醫學博士 栗原清一著

古文献に據る日本に於ける精神病の特質及標型の樹立



序

世ニ學問ニハ國境無シト謂ヒテ、ソノ共通性ヲ説ク人多キモ、學術ニモ亦各國獨自ノ領域ノ存スルコトヲ知ル人ハ案外ニモ少シ。而モ地理、歴史、人文學、人類學、心理學ハ勿論、精神病學ニ於テモ亦然リト言ハザルヲ得ズ。即チ精神病學ニアリテハ、各國國民間ニ於ケル思想、情操、習癖上ノ特異性ヨリ、諸種ノ病的症狀ニ差ヲ示スハ勿論、其ノ症狀ノ多寡ニ於テモ亦異ナルトコロアリ。之レガタメ、夙ニ、人類精神病學、精神發達病理學等ノ勃興トナリシモノナリ。

本邦精神病學者中ニアリテ、斯カル着眼ノ下ニ行ハレタル研究ノ甚ダ乏キハ、余ノ多年窃ニ物足ラズ、且、憾ミ多シトセシトコロナリキ。然ルニ栗原清一氏ハ、我國古來ノ文献ニ現ハレタル精神病ニ關スル事蹟ヲ蒐集スルコト茲ニ年アリ。之ニ蒼古學の思索上ノ考察ヲ遂ゲ、名ヅクルニ日本精神病ノ特質ト題シ、ソノ特質ヲ貫ヌク標型ヲモ完成セラレタリトキク。

斯カル企テハ、余ノ上記年來ノ宿望ヲ滿タセルモノナルハ謂フニ及ハズ、又由來、本邦學者ノ弊トシテ、歐米諸國ノ事蹟ニノミ精シク、自國ノ事象ニハ案外疎ナル處アルノ憾ミヲモ一掃セラレシモノトシテ余ハ欣ビニ堪ヘザルトコロナリ。而モ本邦ノ事蹟ハ之レヲ知ルニ甚ダ窘シク、是レニ關スル索引等ノ皆無ナルヲ以テ、其ノ研究ノ至難ナル、實ニ豫想外ノコトニ屬スベシ。然ルニ栗原氏ハ、篤學ヨク其ノ困難ヲ凌ギ、此ノ事業ヲ完成セラル。

コレ余等同僚ノ大イニ誇トスル所ニシテ、又氏ノ其ノ矜勞ヲ思ヘバ、ソハ、動物實驗、組織學上ノ研鑽ニ比シテ
敢テ遜色ナキヲ信ズルモノナリ。

聞説、吳秀三先生ハ夙ニ栗原氏ノコノ擧ヲ聞カレ、ソノ完成ヲ鶴首セラレタリキト。吳先生ノ御性格御趣味ト
シテハ當ニ然ルベキコトナリシト惟ハル。

曩日、栗原氏本書ヲ携ヘラレテ余ニ序文ヲ需メラル。余ハ淺學菲才、到底ソノ任ニアラザルベキヲ知ルモ、請
ハル、マ、ニ敢テ所感ヲ叙ベ、殊ニ、吳先生御在世中此ノ書ノ世ニ出デザリシコトノ甚ダ遺憾トスル旨ヲ併セ記
シテ以テ序トナス。

昭和八年七月

三 宅 鑽 一

古文献に據る日本に於ける精神病の特質及標型の樹立

目 次

緒言

日本精神病特質に関する通論.....一

汎論

一、東洋に發生せる醫學、本邦に渡來せる東洋醫學及其發達.....二五

二、陰陽說概論、醫語三陰三陽.....

三、精神病に關する東洋の文書概觀論.....

四、日本に發達せる精神病理論の特質.....

東洋に普及せられたる固有の醫術語及び其概念的解釋.....三四

精神病理論の發生學的觀察.....

一、精神病の基本的論理.....

二、精神病の醫學的觀察.....

三、精神病の特質及標型.....

一、發病標型、經過標型、治不治標型.....

二、汎貫標型.....

三、現象統轄標型

精神病に關する名目の傳統に就て……………八九

一、醫書の鑿刻及集成の一斑

二、精神疾患の名目

三、精神病理論の集成

精神病實證論としての文獻の價值……………一八一

一、特質集約の經驗論

イ、追歴反搖證狀の實際、其病的現狀

ロ、激倒後變證狀

ハ、奔騰躁驚證狀

二、癲狂病發展の基礎論

三、原病異論の一系體

四、精神的治療の一實證

精神病者の素質に於ける一特色……………三八五

日本文獻を基礎としたる本邦精神病の特質及標型の樹立並に其史的實例

一、天狗被誦症の特質……………三九五

一、天狗憑依症

二、天狗誘引病

三、天狗癡登症

四、天狗癡亂症
五、天狗悶惱症

二、狐患症の特質……………五六三

一、患 惑 症

二、憑 依 症

三、化 現 症

四、交 婚 症

五、酬 慮 症

三、人狐憑依症……………七三三

四、蠱 惑 症……………七七〇

五、狸猪化現症……………七七六

六、猫、馬、蛇化現症……………七九七

七、馬憑依症……………八一五

八、外道(大神)憑依症……………八一七

九、蝦蟇化現症……………八二八

十、水 虎 狂……………八三六

十一、鬼覺症の特質……………八五八

一、癡亂恐脫症

二、鬼化噉體症

三、一般鬼驚症 八八九

十二、疫邪憑依症 九三二

一、突然變化症 九三二

二、疫神變化症 九三二

三、痘鬼現化症 九三二

四、邪神感得症 九三二

五、異形入浸症 九三二

十三、餓鬼憑依症 九三一

十四、器物降幻症 九四五

十五、幻響症 九五二

十六、光燄幻覺症 九五九

十七、外法通浸症 九七四

十八、冥府往還症 九八〇

十九、離魂經驗症 一〇一三

二〇、崇畏期待症 一〇三〇

二一、樹精被襲症 一〇八二

結論 一〇九六

日本精神病特質論の根本に就て 一〇九六

緒言

日本精神病特質に關する通論

一、日本に於ける精神病の發病、經過、結果に關して特質を考究し、而して其特質を汎貫して上下縦横に共通する據るべき標型を樹立せんとするに當り、主として明治維新前に殘存する文献を基として、其記述記録を證憑となしたるは、從來、本邦にありては特殊なる考量に資せんが爲に摘出する事ある以外、未だ會て古今を通覽して、最もよく顯彰せられたる文献舉陳の業なかりしを以て、茲に特質に關する記述文書の重要性を示し、即ち本邦明治維新前に至る迄の間、精神疾患が如何なる觀念を以て相對せられしやを知り、併せて明治年代以後、特殊に發達し來りし本病經過及び社會的救解の研究に資し、亞て日本國民性の特殊性をば、精神病理論上より明白ならしめんとせしものに外ならざればなり。

一、精神の語、既に微妙なる作用の容易に窺知すべからざる神秘性あることを表象し、而して其動作の機朕に至りては、寔に古今を通じて醫人の間に難事とせられしもの、是獨り醫人のみならず、所謂平常と超常との差、係はる處一紙の差に存す。爲政家が世相をして超常ならしめずとせし苦衷の結果

は、即ち本邦に於ける精神衛生運動の歴史といふべき事象を齎したるもの多し。本邦の文献は、事精神に關するもの極めて多きが如しと雖も、精神病、及び精神病理に關しては必ずしも夥多といへ難し。故に

一、醫人の精神病理論及治病論

二、醫人の本業外に屬する著書

の如き、主として心疾を擧げたる文献以外は、多く

一、隨感錄、隨筆類中、精神病發作其他の證候を記述したるもの

二、不用意なる間に於て語一たび精神病に及び、而も是を獨解せる議論を有せるもの

三、精神病と斷定せずして種々の證候と見るべき記述を有し、他の目的を達成せんとして著述せられたるもの、中、歴然たる關係ありと認定せらるべきもの

等の中より、其特質論の資材たるべきものを列擧したり。茲に於て事實の證候を知るべきものあれども、觀察の結果に於て記述を有せざるあり、所謂狂奔の行動仔細に報せられしものあれども、發作の原因に就ては記述なきあり、怪奇を語りて怪奇に終始し、妖變を謂ひて妖變に没頭し、表現語的の中せず、又、見聞を重誤して顛倒せるあり、紛糾錯綜、纏絡せる縷の如し。これ實に容易ならざる業績なりしかども、但之を採て徐に考量する時は、殘存文献を汎貫して一定の精神病理の特質を發見するを得たり。即ち單なる語類の解剖分析、類別を試みて之に充當する事業以外、日本國民性を基礎とし

たる證迹の久しきに亘りて累積せられたるものあるを以て、遂に此擧に出でたるものなり。

一、既に醫人の醫論に於てすら、語感の輕重、語義の傳統に對する異義論あり。況んや通常、所謂常識の時代的產物たる各文献に至りては、語義の的中せざる、事象の重復せる、經過の稀薄なる、蓋し當然の結果と謂ふべきならん。醫論にありては、心疾患に關する著述、必ずしも豐潤ならず、悉く茲に列擧して提示せんは難事たらずといへども、公行板彫の書、何ぞ再び全部を羅織するの煩勞を致さんや。只、止むを得ずして正に當應し、該切なるべき文書を、立論の主題の命ずるが儘に次の項條を填當し、以て史的經過を示して以て其傳統の證迹を瞭かならしめしのみ。

一、本邦に於ける醫學の發生及發達は、須らく正に之を醫學史の任として解説せしむべきなり。故に本論にありては、時代を逐うて仔細に日本醫學の發達を叙述する事なし。只精神病に關する傳統的語彙、及び證候發顯の順序論に就きては、既に周知たる如く主として東洋に發生し、經過し、而して固着せられたるもの多きを以て、本邦發生史に關する瞥見を必要となし、而して其必要なる部分のみ些しく解説したるに過ぎず。傳統語の形成は、本邦に渡來したる漢土の醫語を、更に日本化して其特殊なる證候に充當したるもの尠ならず、故を以て東洋醫學の固有語と、遡て支那に於ては此固有語の中、精神に關する語を奈何に解釋せりしやを稽考して、以て其後世に及ぼす因原を、探究せんとしたるものに外ならず、本論の初端、陰陽宇宙論的觀測、洪範の哲理、及び五行論等に觸目せる、洵に茲に出づ。

一、本論中に稍言ひるが如く、支那に於ける醫論の大成は、張仲景の傷寒論以後と見るべし。後世の醫家、悉く先づ此醫論を知識し考察するを以て學科第一の條件となすに至れり。癘疾、熱病、溫病、天行、溫疫、時病、時氣、疾疫、時疫、語異なるが如しと雖も、皆悉く古へ稱して傷寒中に挿入し以て考覈せりしが如し。是れ何れも人身に災異を附與するものにして、經史の記載する處、所謂天時之災害、人事之幽變に接觸して大災となると言ひ、公羊傳に大災を疫と爲せるは、即ち生民を害殞し、萬物を沮害し、政事の藏否に關するよりして特に標して疫と曰ひしものなり。果して天時の變轉より生ずる疫疾を、傷寒中に措置すべきや否は姑く議せずとするも、寒暑濕風、素より天時の行動、之に觸して人の變氣を感じる時は、氣の生命を脅威せしむる場合に於て正しく傷寒と謂ふべく、素問に熱病は皆傷寒の類也といひ、難經に傷寒五あり、仲景風、寒、暑、濕、癘疫、溫病等の治病法を鳩めて論據の根本となしたる事を指す等、天行癘疫なるもの、素質を観るべし。邪熱熾盛にして人身の之を蒙る事多きに、其最も酷しき影響を享くるを、人の精神とす。即ち先づ頭痛、汗出、心煩、體倦、煩渴、嘔語、妄覺等、頻出する處の證候は、輕重の差こそあれ一切の關涉を感覺に有すとなすべし。然して其心疾の一證化、寔に例せば斯くの如き微妙なる概念のありて、又別途の心疾因由となしたる歴史の傳統をも看過すべからざるなり。

一、所謂、三陰三陽の議論は、人身を小なる宇宙と視て、其陰陽の變化より來り、而も人身中、精神病理に關はる處多しとせられたるを以て、後世の精神病理を考察する者、此陰陽の概念より將來する

變異を説かざるはなし。實にこれ一方にありては、東洋の分化哲學の主題たると同時に、一方に於ては本邦に發達したる精神病理論の根底となりたる智識の一に弱す。是を以て、精神病理論の發生學的觀察を試むる以前及び以後に於て、少しく之を考究したり。陰陽に關する論辨は、己に支那哲學史、支那儒學史、支那文學史等の書、何れも最初に擧げて論明する者多く、敢て茲に説述するの要無きが如しといへども、本論の要旨は、支那哲學の瞥見に非ず、實に醫論發生の資材とせし觀念論の膠着を見んとしたるものなり。故に周知の事實は説きて詳かならず、只其人身に於ける變異の享受、就中精神疾患に須要なる根本觀念を、附與し汎衍せんとする一證左として茲に掲げたるものなり。

一、陰陽の實在的證明として、古今の醫人、指示する處決して單一ならず。即ちこれ人身に影響する處の多端多岐なるを指すものたればなり。所謂、人身に於ける陰陽を指して、表裏内外とする者あり、或は血氣、或は寒熱、或は血氣内外を兼ねて言ふ者、邪正を指すあり、三陰三陽を單に陽氣と云ひ邪熱と火邪を指し、又は津液を指し、元氣正氣を指す者あり、議論の區々たる其何れにも理由の存するありて、人をして頗る迷惑せしむるものあるが如し。然れども證する處は三陰三陽は即寒熱の大綱にして、其表裏に浸犯する點に於て漸く證候多岐となり、從て論理の複雑となるものと見るべし。陰陽虧損盈實が、主として人身の血氣を左右し、而して狂癩疔等の心疾を醸生するに至るとの發生論に對する觀察に於て、少しく之を説述する處ありたり。之を要するに、用語の齟らされし根本、及び廣汎なる概念の史的傾向と其現今に及びたる趨勢とを知らんと試みたるのみなり。

一、精神病理の發生學的觀察の條下に、基本的論理、醫學的觀察、特質と標型とに關して概ね看るべきは見、執るべきは採り、互に一般論理の趣向を具現したり。本條下に於ける特質及標型の樹立は、以上の論理より來れる汎貫的質量を、稍明詳ならしめ、以後に説述する處の本邦心疾の取扱方を、茲に暗示せんとしたるものにして、漢土傳來の醫書中、主として精神病に關する文献のみを列擧し、中に就て最も必要なりと思惟せらるゝ個條のみを摘要したり。素より此以外の文献たりとも、採て以て此に挿入添加すべきは言を俟たずとなす。汎貫せる特質を統轄して、本邦醫人の間に固着したる醫論の本據を、明白ならしめんとしたるものなり。

一、精神病の名目は、醫人の間に智識せられし語彙の、漸次に世俗に浸潤したるに由るもの極めて多し。元より漢土に於ける病狀の形容語は、豐潤多岐にして病名沿革考の如き、よく此間の消長を物語るものと言ふを得べきか。茲に於て少しく餘儀に屬するが如しと雖も、版刻の醫書如何に繁衍せられしかを知らんとして、先づ倭版書籍考を擧げたり。これ他にも求むべき一條なるも、單なる概念上の一齣に過ぎず、而も前後引用するところの醫書が、多く此翻刻より一般化せられたる事實を思へば、議論集成の立證上、必ずしも無用の業と難ずべからざる事とせん。即ち次に來る、實證論としての文献の價值を、主として本邦にのみ結成せられしものを引用したる前驅とも稱するを得べし。

一、特質集約の經驗論に於て、一本堂行餘醫言を掲げて、茲に本論中始めての證狀表現の造語を試みしなり。或は語、生硬の嫌を免れずといへども、本邦語音上の感覺、文字面の考究よりして、姑くは

此新語に據りて考究を繼續せんことを要すべし。個々の語彙に關する略註は、悉く本論中に在り。經驗論、基礎論、實證論、各個の證憑として僅少なる文献のみを列擧したりしかども、是れ徒らに老大に流るゝを厭ひ、以て其代表的文献に止めしが故なり、然れども亦引用記述の大意が、茲に言はんとする本邦心疾關係の特質を觀察するに際し、悉く盡したるが如き景觀を呈し、而して本邦に於ける諸多の系統を、別個に歴然たらしめしは、應に注目に價すべし。

一、如上の觀念に據出して亞て本邦民俗間に發生したる精神病に及び、茲に以下雜多の病的證候を文献に證せしめ、以て個々の病狀に於ける特質と標型とを施設したり。各個病狀を表現する語に就ては、從來用ひ來りしものを參酌し、次に適當なる組織なりと信ずる處をば之に挿加し、是を個々の性能、發作、經過を識別する必要上、別途に項條を設立して能ふべき限りに於て、説述を吝まざる覺悟を以てしたり。然して此説述を特質論的の證として立憑せしむる爲には、縦し重疊の嫌ありと思惟せられしものといへども、悉く文献を掲げて、其故人の意在る點を知らしめんと努力したり。但し文献の數量に於ては、事無限に屬すべく一々同種同文を引用するは、業に於て徒勞たると同時に、又殆ど長年月の捜査を要すべし。これ相俱に爲さんには他に人あり、茲には單に各個病症の異變、性能の特殊性を提示せんとして、努めて刮目して看るべき記述文書を列措したるのみ。故に著名なる一書を貽して無名の隨筆を擧げたるあり。一を重ねて他を略し、的應の文品を後にして、病名考究の如き内相貧弱なるを先にしたる如きもの、往々にして之有り、即ちこれ編述の前後に應じてなしたる業績のみ。

一、本邦に於ける妖怪變化の普遍化したる名目は、擧げて結語中にあり、稽照すべし。名目の得て想像になれるもの夥しきが如きも、其根本の成因にありては、漢土の文明が渡來し、印度の思想の來りて併合するあり、佛典の語辭より一般化したるあり、又漢籍の熟昵より人耳口吻に馴染したるあり、一々是れを剖判する事、今にして容易ならずとなす。然れども原始的宗教に於ては、天然現象の一切をば神秘的なる宿命の存在するとなし、神經が心理的に累積して、遂に一種の交渉關係を認容したるは、改めて言を俟たず。されば天地間の形蹟、何れか妖怪變化ならざる、即ち之が人間に苦悩を附與するといふに至りて、始めて我が言ふ處の精神疾患の要素たる現象論の成立を見るべきものなり。之を例せば、醫學正傳に曰く

或問山居野處之地、云有狸魅之患、誠有此歟否歟、曰妖崇爲患自古有之、非獨老狐成精、至於人家貓犬亦有善爲妖者、大抵披其患者、皆性淫而氣血虛者也、故邪乘虛而入耳、未有正人君子血氣充實者而被其惑焉、治法必滋補其眞陰、以壯其正氣、安養其心神、以禦其淫邪房憚之內、罅隙不通邪何由以入焉、若以師巫降童等邪術治之、則神愈不安、決無可瘳之理、過斯疾者可不謹歟。云々。

妖崇といへる現象は、即ち血氣の虛陰なる人によりて發するとせらるゝ正論ながら、又山居野處には是等の妖魅の存せるを信じて以て屢々自他感覺の戰慄を來したるは疑ふ可らず、周禮註疏に、魅者人而鬼神、四足好惑人、山林異記所生也と見ゆ。山林の異氣なる語に注意すべし。家語に、木石之怪、夔、蜺、蝮、木石謂山也、夔豆人面、蜺身能言、蝮蝮山精也、水之怪、龍、罔象、罔象一名土之怪、積羊也、積羊堆雜云々。淮南子に、魍魎狀

如三歲小兒、赤黑色赤目長眉美髮云々。左傳に、魍魎山林異氣所生爲人害也。說文に魅老精物也。西京賦に、山神虎形爲魑、宅神猪形爲魅。云々。

又、抱朴子に、山之精形如小兒獨足、足向後、喜來犯人、其名蚊知而呼之即當自却。更に神異經に、西方深山人焉、其丈尺餘袒身捕蝦蟹、性不畏人見人止宿喜依其火以炙蝦蟹、伺人不在而盜人鹽以食蟹、名曰山獐、其音自叫、人常以竹著火中噉爆而山獐皆驚、犯之令人寒熱、此雖人形亦鬼魅類耳、所在山中皆有之云々。

述異記に、宋元嘉初富陽人姓王於窮濱中作蟹斷、且往視之、一材長二尺許在斷中而斷裂開蟹出都盡乃修治斷出材岸上、明往看之見材復在斷中、斷敗如前、王又治斷出材、明晨所見如始、王疑此材妖異、乃取內蟹籠中攀頭擔歸云至家、當斧以破然之、未至家三里、籠中倅々動轉、顧見向材頭變成一物、人面猴身一手一足、語王曰我性嗜蟹、頃日實入水破君蟹斷入斷食蟹相負已爾、望君見恕開籠出材、我是山神、當相祐助、并令斷大得蟹、王曰汝犯暴人前後非一、罪自應死、此物種類專請乞放王迴頭不應、物曰君何姓何名我欲知之頻問不已、王遂不答去家轉近、物曰既不放我、又不告我姓名、當復何計、但應就死耳、王至家熾火焚之、後寂然無復異、土俗謂之山獐、亦知人姓名、則能傷人所以勤々問王欲害、人自免云々。

以上は支那に於ける周知の文書なれども、見るべし所謂山林の異氣が漸を遂うて一種の山童的妖異に形成せられたりしことを。山獐が一手一足といへるは、恰も本邦山中に一本だたらなる妖怪ありて、

雪上多く飛躍の痕を一足に印すてふ諸國の口碑と近似せるは、此傳譚の影響全く之無しとせざるべきものなり、擬人の手法が往々にして人間生活と相似性を帯びしめ、且山男山姥の類をも明白に作出して、悉く變化世界を成就せしめたりしは、山林の異氣が畢竟、人を犯暴して寒熱往來の激しき肉身的變調を附與するより、大なる恐怖感を懷抱せしめしことが最も顯著なる根本原因となりしは、又疑ふ可らざる事とせん。

一、天狗に關する本邦の民間信仰が、遂に一種の特殊的精神病と化したりし經過は、本論中、憑依、誘引、攀登、嬈亂、悶惱の五症に分別して、仔細に其史的經過を力説することありたり。天狗は其思想の推移に於て、佛典の影響と支那思想の攝取とを俱に受けしは争ひ難き事實なれども、此時代的信仰が民俗の間に浸潤して、遂に以上五症に記述するが如き病的症狀を具現したりしは、亦本邦精神病上に於ける特質の一に屬す。但し憑依症の現象中に、誘引あり攀登あり、實は細緻なる判別をなし難きが如き觀あれども、其證據にありては、幻覺、傾向、結果に於て頗る判然たる原因と經過と存するものあり。故に是を採りて以て五症に分類し、各個證據に於ける標型を抽象したるものなり。天狗は、現代にありては己に信仰の希薄になりしと同時に、五症の顯現極めて微弱となれども、殘滓尙未だ絶無なりとはせず、而も往々にして天狗つきなる語彙の下に、狂病發作の現象を見る事あり。即ちこれ本邦心疾史上の一特長として其首頭に措く所以なりとす。五雜俎に曰く、周書言、天狗所止地盡頭、餘光燭天爲流星、長數十丈、其疾如風、其聲如雷、其光如電、吳楚七國反時伏過梁者是也、俗云天狗

所止、輒夜食人家小兒、婦女嬰兒多忌之云々。

支那にありても婦女小兒の天狗を驚愕畏せしてふ俚俗の存したりしを知るべく、天狗の形態の最初いかなるものなりしやは姑く考量の外に措き、最も天變と齊しく之を恐れたりしは、本朝月令に、黃帝伐蚩尤之時以正月十五日伐斬之、其首上而爲天狗、其身伏而成地靈。云々。といへれば、天狗地靈ともに人をして妖崇を覺えしめ、依て之を祭りて逆に其效用を利用して健祥保持に専念する俗慣をも出現せしむるに至れり。即ち裏面に於て、天狗恐懼の次第に累重するを察すべきなり。公事根源に世風記を引て、正月十五日亥時煮小豆粥、爲天狗祭庭中案上、則其粥凝時向東方再拜長跪服之、終年無疫氣。といへるは、之を證するの一文獻といふべし。本論中、天狗被謫症の名目を措置したるは、即ち天狗なるものを一個の邪氣と見做せし史的事實に則し、浸襲する状態を總括してこれが爲に欺誦せらるゝの形容を表はすべく、茲に新たになる醫語を考案したるものなり。憑依の語は從來多く動物憑依、靈魂憑依等に用ひられ、狭小なる範疇を出でざりしものなれども、天狗憑依の語を直ちに症狀の一に命名せしは、是を以て最初とす。而も他の用語悉く亦別途諸書に散見する處なれども、證據表現語となしたるは同じく最初の事となすべし。縦へ生硬の感なきに非ずといへども、之を以て部屬類別の正當なる用語となして可なるべきを信ずるものなり。

一、動物憑依の浸潤して傳統久しきに及べるは、亦以て本邦精神病界に於ける最大なる特質の一となすべく、其名目の豊富なる、其事實の頻繁なる、枚舉に遑あらざらんとす。本邦殘存の文書が、一見好

んで此種の記述を試みたるが如き形蹟あるは、側近の事例常に類々として憑依の現象を證するものあり。又是に附隨して一種の咒法禁厭の發達せるありて屢々有驗の策を弄するを見聞すること多きに依るもの、蓋し偶然の累出に外ならずといふべし。動物憑依の最大なる感覺は、經驗にありて存す。未だ曾て知識せざる動物の浸犯なきを以ても立證するに足るべし。自他共に肉體の變異に伴ふところの精神的變化を知り、嗟嗟久しうする點に於て即ち社會的共同經驗の數量を増殖するものといふべく、人間に據依する動物の名目には、狐、狸、貉、猫、馬、蛇あり、稀に鳥類中の烏、鷄あり、所謂人間の日常と親昵なる位置を有する家畜、及び側近に存する動物といふを得べし。犬、猿の如きは、同じき憑依現象中にありても、別格の傳説化を有し、今昔物語以來の文書が、犬、猿の智慧をば人に近似して勝れたるものとなし、而も中には人間と交婚して別種の患惑を與ふることを記述せるもの多く、俚傳小説類極めて夥しき作爲を致したれども、姑く之を病患以外に放てり。精神病の現象は、主として無意識的經過中に發作あり而して漸次推移と編成とを實現する處に、經驗感覺、連關觀念の生成復起を見、動物の幻怪をして、偏執性的靈威あるものとの見地を他に明白ならしむる點にあり。即ち病的證候の有無に由りて之を取捨したる所以なりとす。狐患症の一條中、發作、經過を色別して、患惑、憑依、化現、交婚、酬慮の五症を設け、各々其特質を説きたれども、微妙なる經過を仔細に看る時は、患惑せらるゝ事が既に他の諸症をも包藏すといふべく、然しながら唯、輕微なる發作状態が、心理的對象を狐に置く時は、これ單純なる患惑症にして、憑依にも至らず交婚にも至らざるもの、化

現症の如きは、狐、人間に化現し亞で交婚に推移すべく、又反對に人、狐に化現せしが如き心理状態を以て、酬慮症に向ふこと有るが如し。事實かくの如き證據文献乏しきにあらざるべし。識神を使役する行法に近似せる狐使ひと稱する者は、即ち狐怪をなすこと人の狐化現と均しかるべく、妖巫が靈を轉行せしめて肝心を噉食せしてふ恐怖は、既に文德實録に出づ。狐媚の妖は狐眉記に詳かに、高天加持の狐の事は、康富記に出でたり。狐信仰の問題を史的に觀察したるの條、共に本論中に詳論したり。引用文献と同時に宜しく考究して可ならんか。蝦蟇は其の吸引力の實驗より恐るべき物に算へられ、時に人物に化現して生血を吮搾するの性ありと考へられたり。怪談一にして盡きず、此氣に撲たれて影響する處に病證を出すべしとなす。これ他の猿神などに比して頗る顯明なるものに思惟せられたり。

一、以上の動物以外、悉く地方的生物たるの觀ありて人を患煩せしむるものに、犬神、とうべうなるものあり。是亦本邦に存せる特質として擧ぐべきもの、犬神の四國に於ける、石見のとうべうの如き、外道憑依の患惑は、所謂邪術として久しく畏懼せられ、其土地にありては婚を絶ち交を結ばざる事、本文引用の文書に記載せるが如し。雲伯の人狐に至りては、名目上一種の妖狐に屬するが如く、猶狐患の症状を呈するを知らずとも、屬從の分別に於て又純乎たる狐憑依ともいひがたく、即ち茲に人狐憑依症を別に設けたる所以なり。人狐辨惑談一本、仔細に其證候及び一切の俚傳經過を記述して餘蘊なしと云ふべし。同じ生物ながら他邦の曾て感覺せしことなき異物にして、茲に稽考の由來を掲げたる

ものなり。

一、水虎は即ち川童、河童の漢名にして、是河伯思想の類廢によりて生ぜる幻怪的生物とする者あり。論の當否は暫く措くとするも、河童が時に人間に憑きて、人をして寒熱往來、幻視苦悶の實狀を齎らしむることは、亦本邦後代に生ぜし實證の一と謂ふべく、其病的狀態が往々本症水虎狂患者の部門に該當すべき形究を露呈するは、全く不可思議なる事實とも稱すべきなり。水虎狂患者の素質に於て、之を享受すべき信仰傾向を有し、然も此思想が奈邊より來りしやを考覈する時、茲に本邦に於ける狂病史の前提ともいふべき資材を發見するに至るべし、即ち特に本症を獨立せしめたる因縁なりとす。

一、信仰に於て天狗よりも狭少なれども地に着して別種の恐怖を附與せしものに鬼あり。鬼の語義は古今學者の論究する結果、區々たるものとなれども、後世擬人的手法によりて形成せる鬼形觀念以前にありては、所謂氣の陰慘なる形容なりしは之を疑ふの餘地なく、此思想の轉向中に支那及び印度の概念所生の鬼神あり、本邦にては奈良平安兩朝を経て鎌倉時代に入り、全く進化したる語感上の鬼形を生成したるもの、如し。されば觀念復起の對象物としての鬼を摘發せりしより此方、鬼に關する精神變化の證狀、亦以て本邦特質の一に挿入するを得べし。茲に鬼魔症の名目を措置し、媯亂恐呢、鬼化噉體、一般鬼魔の三症を列陳したり。鬼魔の文字、おそはれ、又はおにおそはれと訓じ、突然變化の結果として顯著なる精神的苦痛を將來し、之が即ち人眼に見えざる鬼氣の襲來するに據るとせらる

を第一になしたる後、此鬼氣が一般常識化したるが故に、甚しき狂病發作ありて、人間を咬傷殺生する證狀の激發をば、噉體症の文字を以て充當せんと試みたり。媯亂症は、今昔物語に、天狗媯亂の語あれども、其始終を見るに悉くこれ鬼化して後なり。天狗といへども結局天狗の如き恐るべき性能を有するに至れる鬼化といへるに過ぎず、而も心理の經過中、共同的幻視の生起して鬼形を見るや、即ち本症患者は、悉く此鬼形の媯亂を期待するの事實ありたり。幻覺より生ずる期待にして、一に色情的亢奮を伴ひることを意味し、時間的經過の表面に於ては、屢々媯亂を悅樂する證候あり。此期待は苦悶と悅樂とを帶同するを以て茲に恐呢症の新語を試みたるものなり。恐呢は換言すれば、酷しき畏怖中に悅樂を期待する心理の發動を示す。蓋し本症の如きは、平安朝以後、本邦心疾史上の特質なる一條と謂ふべし。

一、鬼魔症の稀なる歴史に對して、極めて浸潤の度の濃厚なるものを、疫邪の襲來となす。疫邪とは即ち疫疾を總稱するものにして、時疫流行時に於ける普通の語義を應用したるものなり。維新直前にありては、時疫に對する一般處置法も大に進展せりしかど、疫神が擬人的風貌を有し、而も屢々之に遭遇せし者の時疫を煩ふ端緒となり、世俗の恐れを繋ぎしは、其奈何に憑依思想の深刻なりしかを洞察するに足るものあり。疫邪が人間に憑據する前提、其發作、其經過に鑑み、突然變化、疫神襲化、痘鬼現化、邪神感得、異形入浸の五症を分別して各其證候を詳論したり。痘瘡が必ず人間近似か、又は甚しき異形を以て人に逼迫する事實は、主として社會的風潮所産の幻覺に由るものにして、或は別

に夢中の感覺が共同幻覺を知るべき經驗となりしもあり。疫神と痘鬼の區別等は、要するに病狀經過の差別に過ぎず、俱に突然か若しくは漸次かの進展を以て入浸の形式を執るの根本は、相齊しと言ふべきなり。文献比較的豊富にして、又此證據を示せるもの多し。一種思想の滋蔓せる形狀に至りては、又以て本邦特質の一と目するを得べし。

一、餓鬼憑依症に至りては、其本來の名目が佛教の民間浸潤を來してより此方、非常なる煩渴欲求を起して所謂食物偏執の狀況を呼稱するの名と化し、即ち現在世に於ては正しく此痛苦を人に憑依しつゝも經驗せしめんとするものと確信せらるゝに至れり。餓鬼の意義は素より瞭かなるも、一旦憑依するや、激しき飢餓及虚脱の感覺を與ふるものとなし、往々其解説に伴ひて諸國に於ける實證を掲げ、必ず魂靈、精神の宇宙に在るを語らんとする傾向を有したりしものなり。動物憑依にありては時として食物偏執性を具現することありて、恰も此症と脈絡を有するが如く思惟せらる。是亦一種の穢靈に屬し、而して猶動物と均して其靈轉行する性能ありとせられしを見るべきなり。

一、心理の動態の微妙なる無限の變化を示して一の據基する所を知らざらしめんとする事は、他よりの浸入憑依に徴しても之を洞察するに足る。假令古今の事例を擷集して論ずる者ありとしても、恐らく本然の性能に至りては遑焉として長嘆に終るなきを保せざるなり。況んや加ふるに人自らの病態時に於ける特質あり、茲に一證據を擧げて、冥府往還症と名くるもの、即ち此間の機朕を示さんとする一所業に過ぎざるものなり。古來輪廻の思想の深く民庶の間に信仰せられ、後世轉生の事例を常に幻

覺的體得に知識する者多くなりて、頗る怪異を傳播し流布するものありたり。一方佛教徒が好んで之を考量に入れ、以て信仰鼓吹の方便を作り、殷んに四方の傳譚を宣傳するあり、又一方にありては、小野篁の如き人物の屢々冥府黄泉に赴きて、現世と離脱せる世界との聯關に出動せることありて、世俗の妖異を促したりしが、後世再生談の流行を見るに至るや、殘存の文献時として此幻覺症狀を記述する事極めて詳密なるものあり、支那及印度に於ても素より甚しき輪廻の事實ありとせられしは、言を須ひずと雖も、此思想の渡來し混淆せられてより、本邦特殊なる古來の神秘的感覺を添加して、斯くばかりなる特質を形成したりしは、寔に注目に價す、茲に本條を措置して、時に現今往々目撃し又經驗するといふ假死的心理、甦生者の心理を考査する上に於ける參考ともなしたり。事例はともかく是は要素を検討する點に、本邦精神病史の重要な一齣を想見するを得べし。而も綿々として盡きざるは逸興禁じがたきものにして史的傳承の久しき、寧ろ驚嘆に價せんか。

一、崇畏の語は、或は廣範に失する憾なきに非ず。然れども人既に冥府に往還する能力ありと信ぜらる、狐患症に於ける酬慮症證狀の如く、天地自然の酬報なるものありとし、更に山林野居の間にも妖崇あれば、主として精靈の宇宙に懸りて猶多くの所爲の人間に波及すべしとなせるは、蓋し當然の思惟となすべく、即ち一症を總括して崇畏期待症と名け、茲に是を擧げし所以なりとす。本邦文獻の崇畏を語れるもの、恐らく他邦の文書と比して最も著明なるありと斷すべきか。世の惡靈、邪靈と稱せらるゝもの、悉く日常生活の上に非常なる接觸を有し、且其證據を示せる事は寧ろ嗟嘆に近きほどの

累出を見たるものなり。生靈、死靈は素より差別あらんも、物の怪といへる概念が、一切の人間精靈に根本を置きて、其現象を之に由て解釋せんとし、一方に於ては必ず暗に轉行の性質ありとし、時に恐畏すべき形體を示して、其期待に副ひしと臆斷したる心理は、特殊なる國民性の結果を最も明白に呈露したるものと言ふべし。單なる輪廻思想を超越して、爰に畏怖を齎すべき幻覺あり、其記述に至りては悉く精神病的狀景の範疇に入るべきもの多く、而も曾て之を驅逐して以て晏如たりしもの殆ど無きが如かりしは、又特質檢索上、看過すべからざる史的現象たり。崇畏は、過去の精靈が、忿恨遺る方なくして現世の人間に酬慮被襲せんとする點に重きを置く。即ち、過去の經驗が潜在的に存したりしより別途に於て期待心理を編成したりしもの、茲に本症の重要なる素因あるを觀測して可なり。

一、光燄の幻覺は、輕微なるものありては時として傳承ある感覺より生起する事、假令ば狐火、一般の怪火、即ち燐質の燃焼と齊しき光、もしくは不知火の光燄に過ぎずして、世舉て之有るを以て更に一段の不可思議を力説するもの、如けれど、激甚なるものに至りては、一直死に面する事あり。即ち眼精映寫の激越なる生理變化ありともせられ、又は、精神的變化を來すの結果、光閃幻覺を生ずるものとも思惟せられたり。此現象の主要なる一條は、單なる光燄のみならず、中に巨大なる變化妖怪なるもの、形貌を添加するにあり。即ち是れ普通の光燄以外、一種の病的症狀を具象するの機縁たるべきものと云ふを得べし。又別に先天的に光明赫耀するを忌嫌するものあり、闇所を好愛して必ず模索を専らとなすなり、多く狂的發作中に見る事あれども、本邦の傳承にありては、之を以て先天の據

つて來る處に亦變怪なる物語を附與し、其人物の日常に於ける所業を、精神疾患以外に説かんとする傾向を生じ、遂に化身説話、即ち別途の化現症を考ふるに至りしが如し。何れにしても所作發現の結果を見ては、亦同じく光燄に對する心疾的幻覺に終始せるを觀察すべきものならん。

一、崇畏期待症は、人間の精靈、動物中の親近なるものを重なる對象となしたりしかど、之を更に樹木に關涉するものを採りて別に、樹精被襲症になる一條を設けたり。巨樹崇拜の思想に至りては、東西諸民族の間に共通せる信仰經緯を有する事、其史的證迹の存するありて明詳となすべし。但、本邦にありては、極めて古き時代より樹精、即ち木魅、こだまと稱せられし精靈あり、屢々人間の所作に反應して酬ゆる處ありとせられ、而も往々患煩の結果、死に至るの事實あり。大なる期待心理が無意識的に動向して遂に煩惱するの一點は、正しく心疾史上の一特質たるものに屬すべし。神罰なる語義も此より發す。神罰といへるは巨樹及草木の精靈が、人間に對して發現すべき酬慮を、人の斟酌して命名したるものにして、常に恐怖を帯びて之を取扱ふに至りし事、一種の傳統的心理の所産とも言ふべく、時として別種の幻覺生起に因りて此現象を認容しつゝありしは注目し價すべし。崇畏期待症以外に此一疾を措置せし所以、寔に此に在るなり。

一、外法逼浸症なる一條を提出したるは、元來、憑依現象を起す原因に就ては、自ら憑依する者あり、又使役せられて憑依する物との差別あり、飛彈の午夢種と稱せらるゝ如きは人其物の直ちに來りて憑依すると信ぜられ、他の使役系統とは趣を異にするもの、かゝる相異を明白ならしむべき必要上、外

法が人に通浸するてふ信仰が、奈何なる所作に據りて結果を出現するや、及び使役靈物の根元が何物の性能に俟つ事多かりしやを示さんが爲に、稍々其史的傳承を本條に見んとしたるに過ぎざるものなり。犬神使、狐持、外道持等の所謂物持筋が、大に其使役する處の邪靈を以て災禍疾病を現はさんとせし歴史は、既に本論中各條項下に詳しく論述したり。即ち、陰陽筋、神子筋、禰宜筋といへる者の如きは、靈能を限られて固着したる處に「物持筋」なる系統の存立を信ぜらるゝに至る根本ありて、これ元來卜筮、祈禱の所業より多くは浮浪性を有し、靈物の世俗に接觸する機會の多かりし結果として、一般社會上の恐怖を助成して、遂に憑依系統に變革を生ずるに至るものと謂ふべし。術道の世襲はかくして久しきに亘れり、一方憑物系統の家が靈物を使役して人を患煩せしむるに、一方に於ては之を祓穰せんとする祈禱禁厭を業とす。動物憑依もさることながら、此點最も奇怪なるは、ものゝけに關する古今の記述なりとすべし。前述の如くものゝけなる語は極めて漠然たる表現語なれども、種々の妖異を指すを得べく、就中生靈、死靈を以て顯著なるものとし、若し生靈に惑ひつゝある者が其生靈の本據人を語るに、其本據人たる者は毫も他に對して憑依感念を有せざることありて、而も憑依當該者が頻りに之を詈罵する如きことありとせんには、生靈、即ちイキスタマなるもの、觀念に於ては、死靈とは別種の性能あるを信ぜしをば考へざるを得ず、即ち思ふに爰に第三者の筋系統の者あり、最初より憑依當該者に對しての所爲を見るべき必要生ずるなるべし。これ不審とせられたる歴史の一と云ふを得べし。嬉遊笑覽、方術の條に諸書を引きて曰く、いにしへ疾病産育など薬を用ふるこ

とは次にして、むねと祈禱すること、見ゆ、そはこゝのみにあらぬにや、僧株宏が直道録云、内經以信巫不信醫、列於五不治、而杭人尙巫、鄉村爲尤甚云々といへり、石原正明、南留別志の説を駁したる内に、南留別志云源氏物語を見れば、病に薬用することはすくなく大形は祈禱のみしたるやうなり、今は田舎の者はかくの如し、鬼を尙べる風俗の弊なるべしと有り、延喜式、政事要略などを見るに昔とても病には必醫薬をもはらにせし事なり、源氏物語をふとうちよみて薬を用る事なしとはいひ難し、葵卷に御ゆまめれとさへあつかひ聞え給ふを、柏木の卷に御ゆなどもきこしめさず、身の心うき事を云々ある、御ゆは薬なり、卷々に多かり、そのかみは驗者のいのりにて病の癒しことなれば呪を尙べる弊風俗とも云がたし、畢竟は醫といふもまじなひなり、豎といふ字の巫にしたがへるはまじないなる故なり、丹波康世の醫鍼方をみるに多く千金方によりて方ごとに呪文有、令も典藥寮に呪禁博士、呪禁生有てまじなひて病を療す、此呪禁は、唐書百官志にも有り、皇國のみ鬼を尙ぶ弊風俗なるにはあらずなどいへり、これらは南留別志の説難あるにもあらず云々。又、榮花物語後梅大將かみのまことそらごとをも聞むとて、さこんのめのと御くちよせにいでたつ、中略、このかうなきたゞなきになきて云々、紫式部日記、中宮御産條、御ものゝけうつりたる人々御屏風ひとよろひをひき、つぼねつぼね口には木丁をたてつゝげんさあづかりあづかりのゝしりゐたり、壺井氏が標注に、御物怪の事或は御産の時或は御重病の時寄物怪問之義也立物如只女房立之號物付是也とは、物といふを降童のこととせり、さにはあらず、物怪といふこと注をまたずして明かなり、そのより人に物怪つきぬれ

は是物怪なり、平家物語、ゆるし文の事、こはき御物怪ともあまたとり入奉る、神子明王のばくにかけてれいあらはれたり云々、清少納言にもものけにいたうなやむ人にやうつすべき人とおほきやかなるわらはの云々、うつすべき人は神子なり。云々。

建保職人歌合に巫女盲目と番ひてあり、戀歌君と我口をよせてぞねまほしきつとみもはらも打たきつ。甘露寺の職人盡なるは、かんなき禰宜とつがひ出せり、こは鈴を振て舞さまなり、西土にて男曰親女曰巫と見えたり。謠曲葵上、より人は今ぞより來る長濱のあしげの駒に手綱ゆりかけ云々、こは口寄るわざの詞と見えて。鴉鷲合戰物語に、みこを請じてあづさにかく、かのかんなき梅ぞめの小袖かいとりさしきになをり弓うちたいて、天清淨池清淨云々 只今よせ來る所の亡者のよみちの語りまさしくきかせ給へ、より人は今ぞよりくる長濱や葦毛の駒に手綱ゆりかけありがたのたゞ今のしやうやあなありがたの請用やな、世の中はともかくもありぬべし云々とあり。謠曲拾葉抄に云、寄人は寄神共降童ともいふ、或は生靈死靈を祈る時彼靈の代りに童子をそなへ置て祈つけ降参さする事なり、或は靈を人形に作りわらにて馬などこしらへかの人形をのせて祈り終りて後川に流す事も有、この歌もこれらの事をよめる事と見えたり、今口よせする者は縣巫女にて神家はなれたるものなりとぞ、これをいちこといふ、いちことは賤しき名にはあらず神前に神樂をするをいちこと稱す、いつきの義にや。されど和名抄などにも觀を乞盜類におさめたるはもとより賤きものとしらる。東鑑二、一古娘依召参上とあり。又、義殘後覺に太閤伏見御功の宮にて市は當社の神主なるか、さん候

と申 下文にみめもよ
き女房とあり 然らば縣神子などの名には潜上のことならん。元隣が誰が身の上四、御子やらん

云ものを呼よせて云々、みるよりはやそどかみもたつ計なるはしたなき女來りて、ことごとくしく弓の弦うちそ、のかし、かけまくもかたじけなき神佛のおほん名のみ多く片言まじりにいひちらし、其亡者のことづつとてさまぐ、のうそがましき事ともを、まことしくもあはれげにいひ聞ゆれば云々。以上引用せし文書よりしても巫女輩の社會的待遇の如何なりしかを知るに足るべく、外法持の如きは、即ち外法頭を用ひて靈能を使役したりし事本論に明かに述ぶる所ありたり。知るべし使役神なるものといへども、畢竟、靈物をして一旦我が潜在的意識中に於て一種の信仰對象となし、更に他の人間に向うて之を幫助強制せんとしたる事なりしを。換言すれば、是等の靈物は、信仰の衰退と時代の傾向に伴ひて、漸時に性能の衰弱を來すべき運命にありしを考量すべきなり。

一、本論主題の一たる標型なる語義に就て言はんに、之を既存文献中に例證を採らんか、

今泉玄祐の療治夜話（本論引用）中、

○心氣病ノ證候ヲ略左ニ列ス。といひて

面貌如癡、心氣不足、怔忡驚悸、心淪欲陷、肉膈頓振、不眠夢驚、上盛下虛

等の語を列記して之を其心氣病なるもの、主證とし、而して細注を施して各證候下に該當する處の狀態を懇に記述したり。標型とは以上の熟字を以て表現せしが如き主題語を指示するものなり。即ち各個の病的證候をば、最も主證的に抽象して、以て夥しき特質を要約して簡明ならしめ、後來之に充當

すべき證候ある時は、直ちに此標型より逆に特質を検索し、之に由りて本邦精神病分類上に於ける歸結方則を企策し、而して更に時代の趨勢に基くところの個條を殖加せしめんとする方法を樹立せんとしたるものなり。標型は主として特質抽出の後に措置したり。參照吟味せられんことを希む。

一、石の療治夜話、及び其他の諸書、多くは本論に附して所謂、治驗、經驗なる一條を挿入して己が實驗報告を羅列す。此治驗を見るに中に顯はす所のものは

一、時代的信仰思想

二、精神病に對する一般社會人の心理

三、精神病に對する時代的治療方法

四、是等を汎貫して存在する日本の特色

の四ヶ條を主として着目せしめらるべし。即ちこれ茲に力説せんとする日本精神病的特質及標型の樹立を、時代的側面より證する文献の一といふべく、中に就て仔細に検討する時は、皆悉く發作、經過、結果に關する心理過程の記述ならざるはなし。故に残存文献の重要な價值を知るは、先づ本論検索に便する以外、別途の考究に對する資材となるべきを、忘却すべからずと言はんと欲するものなり。

汎論

一、東洋に發生せる醫學、本邦に渡來せる東洋醫學及其發達

東西醫學の發達に關する年序的比較研究は、是を醫學史に譲りて茲には言はず。東洋に於ける醫論及び治術の發生は、頗る遼遠なる太古に存し、脈絡傳統幾多の年月と研擧とを重ねして今に及ぶは、東洋醫學に關心する者の齊しく驚歎するところなり。支那の所謂原始時代に於て、伏羲氏文字を創り、易の方則を考へ、黃帝有熊氏、易の太極説を作り、又、醫聖岐伯と謀りて醫經を作ると傳説するもの、これ姑く措くとするも、支那醫學が、東洋的特質を有せる醫論を高調して、明白に時代的區劃を示したるは、張仲景の出現を以て第一となすべきや異論なかるべし。

張仲景は、後漢の建安十年、長沙の太守たりしに、宗族二百餘族の十年を経過する間に非命の死を遂げしもの其三分二の多きに達し、就中傷寒病、其十中七に居る。横天救ふ無きを憂傷し、茲に傷寒論、金匱要略等の大着成れり。これ本邦神功皇后攝政五年の事に屬す。

これより八百餘年を経て、晋の王叔和之に註釋し、傷寒論の名始めて世に行はる。而て六朝隋唐を経て、宋の英宗帝治平二年、勅命に依りて儒臣高保衡、孫奇、林億等、醫籍中力を

此傷寒論に注ぎ以て校輯したり。

林億等の遺文、傷寒論の世に存続せしは、偏に晋の王叔和の校正増補に據ると其徳を頌す。而して此林億等校正本が、即ち宋版と稱して本邦醫人の尊重したりしものなり。仲景の時代を距る實に一千年後の事に屬す。

宋の神宗帝元豐元年、朝廷に於ては社會政策の一業として、廣く民間傳唱するところの藥治秘傳等を申報せしめ、中央なる大醫院が仔細に之を驗案して、以て處方を撰拔し、徽宗帝大觀四年、官版に鏤刻して汎く民間に頒布したり。即ち

和劑局方

と名くるもの是也。これ我鳥羽天皇の天永元年に中れり。爾後三百餘年間、専ら此文献を基としたりしかば、後人稱して局方時代となせり。

本朝にありては、飛鳥朝時代、既に藥園の施設ありし事、歴史上の明徴あり。即ち佛教の齋らされしと同時に、佛教の藥師門と、及び漢醫法の渡來と、相前後して旺盛となり、一方本邦固有の醫方を整へんとし、更に一方將來典藥寮設置の素地を形成したり。

皇極帝以來、多く隋唐の文物制度を模し、大寶二年醫師の試験項目を定めしが如き、元明桓武の朝に及ぶ時代に於て、醫術の駸々たる進展を觀、平城天皇の大同三年、前代より勅命を以て阿部貞負、阿部慶貞等に命ぜられし

大同類聚方 百卷

漸く成れり。即ち往古より傳へられし遺方を蒐集せしものなれども、今や散佚して討ぬるに由なく、僅に天明七年刻存せられし

大同類聚方 拔萃 一册

を觀るべきのみ

仁明天皇の承和二年、大村直福吉勅を奉じて

治瘡記

を編む。後世

神遺方

なるもの、殘存するあり。これ俱に往古傳統の病理論に關する片鱗を見るに足れり。

支那が局方時代となりて、次第に醫術の衰退を示す時に、本邦にありては、鎌倉時代、僧醫淨心誠觀の

萬安方

の版行を見る。以て本邦に於ける獨立醫學の趨勢を察すべし。

貞觀七年、藤原峯嗣、勅命を以て

金蘭方

を著はし、又、典藥頭丹波康賴の著

醫心方

出づ。更に世下りて正平十四年、安藝守定の

福田方

公にせらるゝに及びて、本邦醫方に關する素地、完く成りしを認めずんばならず。これ即ち、後の享保年間、官醫林良適、丹羽正伯等をして

官版普救類方（即ち太平和劑局方）七卷を編纂せしめし先駆となりしものなり。

二、陰陽說概論、醫語三陰三陽

漢書藝文志に、醫經七家、經方十一家を載せて以來、晋唐この方歴代の簿録、收むる所の醫籍、夥しくして指を樓するの煩に堪へざらしめんとす。而し其間亡佚するもの亦頗る多しと傳へられ、殘存の文書、内經及び傷寒論の汎廣なる註釋に過ぎざらんとし、經義を闡明し、病狀を叙し、湯方を定め、詮注を新にするを以て業とせしより、臚列星煥、規矩千差、人をして思はず垂論の根源を把握せしむるに苦ましむる者、多からずとなさず。而も、陰陽五行の理を以て之を五臟に配し、六府を充て、十二經水に原いて十二經脈を定め、疾病の變態、脈絡の浮動、氣血の虛實、神明の去執、五行相剋の義、寸關尺說の論、自ら昏迷に陥入せしむるものあり。

然れども東洋の醫論は、其基據とする處、太極にあり、命門にあり、生血にあり、先天後天の氣を陳並して、爰に陰陽虧損の實證を見んとするもの、即ち前後の進開、明炳なるあり。東洋の醫書、毎に頻りに陰陽、及三陰三陽を説く。陰陽は廣大測り難きの意を伏藏するものとなし、指す所極めて多端なるものとなす。大にしては天地日月より、小にしては君臣夫婦、而して又天地の間、含む所の氣に陰陽あらざる莫しといふ。三陰三陽は人身に於ては寒熱の大綱を語るものとす。太陽と少陰とは、陰陽の基本なり。而して其の表裏を指すとなせり。

内經に、三陰三陽を經脈、流注、升降、廻環に隨つて其病狀を異にし、人をして病の淺深、輕重、緩急を識らしめんとするの標準となせり。三陽は熱を主り、三陰は寒を主る。太陽は表面の名にして少陽は半表裏の稱とす。今これを表として擧げんに

三陰、太陰 少陰 厥陰（虛脫）

三陽、太陽 少陽 陽明

となる。即ち、傷寒論の如きは、之を基根として疾病を説述したるも、暫に傷寒に止まらず、他病にありても、輕重部位を發見するに、三陰三陽の何れに存するやを候診するを要したり。邪の人を冒犯するや、先づ其表にて疾病を爲す、之を太陽病といふ。更に邪の一層を深くして内に入り、半表半裏の分に至るや、之を少陽病といふ。次で漸く胃に及ぶ、之を陽明

病といふ。傷寒論の如き、主として陽明を先とし、少陽を後にするをば、即ち易經の天地創造論に據るとし、天地有て後萬物存すと云ひ、列子の三才論を擧げ、更に太陽陽明を以て其表裏を示し、然る後中位の少陽に及ぶの古義を強調したるが如し。

表裏とは内外の分を謂ふなり。表證と云ふは、肌膚病を受くるの證、即ち太陽病なり。太陽病の主證は、頭項強痛、惡寒發熱、脈浮緊浮緩となす。裏證とは、胃中病を受くるの證、岐れて寒熱の二症となる、即ち陽明病、少陰病是なり。陽明病の證たる、腹滿、不大便、身熱、汗自出、惡寒反熱證、即ちこれを胃の實するものに起すとす。少陰病の證、脈沈微にして寢んと欲し、吐と利あり、手足の寒これ也。これ寒と熱とあれども齊しく胃中に統せらるゝを以て、俱に之を裏證といへしものなり。表裏症の解註、古今極めて多くして、樓指却て及ばざるものとす。

太陽病を現今の實驗醫學の思想より觀る時は、即ちこれ皮膚表面の感疾にして、全身の皮膚灼熱を感じるを太陽病と稱せしなり。表とは表皮の總稱、胎生學上動物性管を形成する細胞集落、即ち角板、又は外板といふものゝ、外胚葉系統をも包括す。成人の神經中樞、及び皮膚系統にも關涉する處ありとしたり。これ感冒の如きを太陽病の標本として説述したる所以なりとす。

小陽病とは、熱、表裏の間にあるものを指して云ふ。即ち皮膚系統たる外胚葉と内胚葉と

の中間なる中胚葉に形成せらるゝ漿液膜系統、胸、肋、心、腹諸膜の疾患が此の少陽に屬すとせり。中胚葉は外胚葉より侵潤せる神經纖維をば、更に内胚葉内に導入する中間部位にある中間部系統に屬し、胃部痞滿、胸脇苦痛等の症狀を訴へ、呼吸器、血行器及胃の症狀となせるものなり。

陽明病は、熱の裏に在るを稱す。内胚葉、即ち胃腸、就中其内面、腸腺葉に於ける症狀をいひ、主として腸胃の症狀に屬す。脹滿、不大便、其他一切の所謂胃腸病、腸窒扶斯、赤痢病も此陽明病に屬すとせり。

太陰症とは、熱の反對、即ち陰寒をいへるもの、寒、内臓に入るを指すなり、脹滿、嘔吐、下痢、皆太陰に屬すべし。

少陰は、寒、表裏に感ずるを其徵候とす。故に裏寒にして下痢し、表寒にして倦怠し眠臥を欲す。

厥陰の症は、三陰の主寒にして陰の極を云ふ。外熱にして内寒あり、表寒にして裏熱あり、かくて陰陽錯雜し、寒熱混淆するの形をいふ。四肢厥冷、飢て食を欲せず、煩渴して引飲せんとす。或は心中疼熱して氣上、撞心すれば神をして舍を守らざらしむるに至る。氣上、撞心は即ち呼吸の促進、心悸の亢進を意味す。病症の淺深、形態の微激を察智して以て治則を設くべしとなせるは、醫家の文献、悉く經驗的複雑を示せる根本の一因にして、三陰三陽の

略解、以上を指示して、東洋文献を讀むに際する用意の一端となすべき也。

三、精神病に關する東洋の文書概観論

精神病に關する東洋の文献は、所謂、靈樞、素問等を始めとして、諸書これが疾患を認めざるものなし。神、舍を守らず、外に逸出して未智未識の事象を體得するを、殊の外なる不可測として、是が原據を討究せんと試み、毎に神明の府と魂魄の行とに關心する處多かりしを以て、遂に老大錯綜せる文書の堆積を見るに至りしものとす。支那文献の本邦に渡來する事類々たりしより此方、就中、狂、顛、癩等に關する名目の沿革、及び主として名目名義に據る證候の差違異同、其原因、及治療法等、仔細に考覈せられ、本邦古來よりの精神論に加へて茲に日本の精神病理の特質を明詳ならしめんとする第一歩を建設したり。本論、特質及標型を樹立するに際し、参考文献を挙げ、以て病名の沿革及び上述の史的經過を明白ならしめし所以は、洵に此機運と研究との奈何なる状態に在りしやを、指示したるものに過ぎず。而も精神病に關する治療方則の如き、若し言はざる可らざる項目在る時は、本論各項の末尾に、参考として更に該當すべき文献を例證列挙したり。

四、日本に發達せる精神理論の特質

精神病理に關する日本の特質は、各項目の最初に於て、文献注解と俱に、其史的經過を説述したり。而も語彙の意義、變化、傳統、其他に至りては、世人稍もすれば之を逸し去る事多きを以て、一語の裡に東洋の特質を表現するを更に指摘するの煩勞は、勿慮に堪へずとすも努めて其必要なる條項に於て、是を略述したり。憑依症の特質及標型の説述は、殊に此困難に遭遇したるものとす。所謂、精神折法の範疇に入らざる經過、極めて多かりしが如きを以て、別途の史的經過を考究せざるを得ざりしものなり。茲に於て、即ち特質と標型とを樹立せざる可らざるを自覺せしものなり。

日本精神病の特質を知らば、即ち日本の國民性より齎らされし疾患の證候を知るを得べし。時代精神の側面より疾病に系繋せし歴史は、世未だ明瞭ならしめしものを見聞せず、微妙なる心疾の發作、經過、結局には、伏藏傳統したる日本の思想のありて存するは、火を啗るより明かなる事なれども、現今の病理論及治疾論には、何等の特質を國民性に據りて區別せしものなく、單に定型を名目に藉りて、複雑多岐の分類に推測するに過ぎざるのみ。狂、癩、癩の疾患に於ける候證は、各々定型ありて、これを左右する目標たるは論なき處とするも、疾患中に日本特質を傳統して、而も遂に此史的繼承の經過より一步も出でざる標型あるを知らざらんとす。日本特質の標型あれば、同じく特質の治癒標型あり。採て茲に至れるの論據を識る時は、始めて是を左右せんとする意途を、新たならしむることを獲べきなり。即ち、子が新たに日本の標型を樹立せし一理由に屬す。

東洋に普及せられたる

固有の醫術語及び其の概念的解釋

東洋固有の醫術は、其の根基を東洋固有の哲學的觀念に措く、即ち醫學の法語、術語は、據て來る處淵叢深く、源流遠しきなす。支那の醫書と法術とが日本に渡來し、從て醫術語が遍滿するに至りて尙特殊なる概念を與へつゝあるは頗る注目し價すべし。今茲に、就中、數種の精神病理に關する東洋殘存の文獻、及び是れが註解、考覈を施設したる文書を擧げんとするに際し、其の内容を検討するに先ち、内に盛られたる東洋固有の醫術語が、奈何にして由來せるやを、概観せんことを。畢竟、事の東洋思想、儒教哲學に及び、繁簡、遂に錯綜して造語作言の極めで深遠なりしを觀察するに熄まんのみ。他の附載の如きは、多くは之を明證すべき傍系文書たるものに屬す。

醫經素問に、治病必ず本を求む。又曰、治一に極る。又曰、其要を知る者一言にして終ふ。其要を知らざる者は流散して窮り無し。云々、

一は即ち物數の終始なり。度三百六十を有して圓相となす。是れ素問に謂ふ極一の思想にして、又周易の太極に中當す。又、醫經、一を守て失ふこと勿れば萬物畢る、と。易哲學の進化の法則既に此に照應するを見るべし。

太極なるもの兩儀を生じ、兩儀四象を生じ、四象八卦を生じ、八卦積累して六十四卦と成り、萬有

を總括す。これ易進化の規格なり。故に萬有約括せられて太極の一元に歸す。

太極の一元微動して陽、陰の二と成り

陰陽の二爻は、自乘して四象となる。此の四個の重爻に更に陽爻を添ひ、

乾 艮 離 巽

の四卦を得べく、又、陰爻を添ふる時は

兌 坤 震 坎

の四卦を得べし。以上の四卦二を併せて八卦と名く。而して各卦に各一爻を添へしは天地の二に人を加へて天地人三才に表象したる所以なり。八卦自乘して六十四卦となる。各名稱を有すれども今略す。

易の一理萬象論は、遂に天人感應の思想を生じたり。即ち天地萬有の法則は、人間生活の規矩と一致すに至れり。自然的法則に準據して是を觀察する時は、以て人間心身の變易正歪を識るべしと言ふに出づ。

茲に於て、天道人道の理、系統亦錯亂すること莫しと信ぜらるゝに至りしなり。

易經、上繫辭に曰く

成象之謂乾、效法之謂坤。又、

知崇禮卑、崇效天、卑法地。又、

聖人有以見天下之賾、而擬諸其形容、象其物宜、是故謂之象、聖人有以見天下之動、而觀其會通、以行其典禮、繫辭焉以斷其吉凶、是故謂之爻、擬之而後言、議之而後動、疑義以成其變化。又、法象莫大乎天地、變通莫大乎四時、懸象著明莫大乎日月。又、天地變化、聖人效之、天垂象見吉凶、聖人象之、河出圖、洛出書、聖人則之、易有四象、所以示也。云々

又、同書、下繫辭に云ふ

夫乾、確然示人易矣、夫坤、隤然示人簡矣、爻也者、效之者也、像此者也。又、是故易者、象也、象也者、像也、象者材也、爻也者、效天下之動者也。又、

古者包犧氏之王天下也、仰則觀象於天、俯則觀法於地、觀鳥獸之文、與地之宜、近取諸身、遠取諸物、於是始作八卦、以通神明之德、以類萬物之情。云々

易は本體的及び現象的に考量するを要すべし。本體的考察をなさば、全宇宙を一元的に觀ず、これ即ち太極也。繫辭傳が更に、一闔一關之を變じいふ、往來窮まらざる之を通じいふ、見はるれば之を象じいふ、形あれば乃ち之を器じいふ、制して之を用ふる之を法じいふ。此故に易に太極あり、兩儀、八卦を生ずる根源となり、八卦吉凶を定む云々、結局するに陰陽二元の活動は、即ち太極一元の兩側面に過ぎず、太極は一氣なり、天地未だ剖判せざる以前、元氣混じて一なる、一氣の分別する處即ち之を兩儀じいふと、これ太極を説述せんとする易數的隱圖の議なり。太極に關する諸家の論議、古

往より屢々行はるれど、要するに太極の一元、是を捕捉するに患はずと言ふべし。王氏易學に、太極は象なし、象は方にあらず、圓にあらず、得て而して形容すべからず、強ひて之を名づけて極と云ふのみと、又、朱子語類に、太極は只これ天地萬物の理、天地にありて云へば、則ち天地の中太極あり、萬物にありて云へば、即ち萬物の中太極ありと云々。以て其一證と爲すべし。

更に、是れを現象的に觀る時は、正に二元論に屬すべし。易稗傳に、太極は萬化の本なり、陰陽動靜の理、其中に見るに雖も、而も其肇未だ形はれず、故に曰く、易に太極ありと。

又太極發展の理を述べて、太極動きて陽を生ず、靜にして陰を生ず、分陰分陽兩儀立てり、即ち奇耦の畫自ら形する所なり、故に曰く太極兩儀を生ずと。太極一變して之を得と云々。

太易輯說に云ふ、理氣象數の全體渾然己に具はりて未だ分れざるものは太極なり、其全體既に具備す。即ち動かざる能はず、纔に動けば便ちこれ陽なり、一動一靜互に根となり、二氣交感萬物と化生す。

要するに太極は渾然極致の理を形容すに雖も、其全を説示する能はず、單に、所謂、無狀の狀、無象の象、獨立して改めず、周行して殆すべからずと言ふ老子の解を、概念せしめしに過ぎざらんのみ。易は、即ち天地間に於ける變易を以て第一の主目標とす。繫辭傳に、形而下之を器じいふ、形而上之を道と云ふとあり。これ物體と原理の二個を觀念せしもの、道は易の道にして宇宙に洽遍する道を謂ふ、此の道の原理に二あり、陰と陽と、即ち是れなり。陰は消極に屬する原理、陽は積極に屬する

原理なり。此陰陽二氣の交はる處、起伏隱現して遂に萬物の生々を發伸を展開す。故に剛と柔と相繼りて、陰陽的變化を來すと爲せるものなり。人間發生の原理も亦實にこれより齎らされ、變易化成の理も從つてこれより將來せらるゝと確信せられたり。

繫辭傳に、陰陽を語りて曰く、乾道男を成し、坤道女を成す、乾は大始を知し、坤は物に化成す。又いふ、夫れ乾の、その靜なるや專、その動くや直、これを以て大に生ず、夫れ坤は其靜なるや翕ひ、其動くや闢く、これを以て廣く生ず、廣大天地に配し、變通四時に配し、陰陽の義日月に配し、易簡の善至徳に配す。乾坤と陰陽の性を識るゝとなすべし。

又曰く、天尊く地卑く、乾坤定まる。卑高以て陳し、貴賤位す、動靜常あり、剛柔斷まる、方類を以て聚まり、物群を以て分れ、吉凶生ず、天にありては象を成し、地にありては形をなす、變化見はるゝ。

又、序卦傳に、天地ありて然る後萬物あり、萬物ありて然る後男女あり、男女ありて然る後夫婦あり、夫婦ありて然る後父子あり、父子ありて然る後君臣あり、君臣ありて然る後上下あり、上下ありて然る後義錯く所あり。即ち陰陽交互に往來し反復するを以て、萬物變じ且つ化する。剛柔相摩し八卦相盪すといへるは所謂陰陽二天の理を推測したるを稱せるものにして、此の陰陽を最も具象化したるをば男女の二精となしたり、男女、精を構へて萬物化生すとは、即ちこれを指したるなりき。

易哲學に表はれたる宇宙觀は、先秦漢唐の時代に於て思想的發展の機なかりしかども、周子以後の

宋明學に於ては非常なる重要問題たるに屬し、宋明の儒教に關して深大なる影響を與ふるに至れり。これ延いては東洋に於ける醫學、藥學に關する一大誘導の機會たり、楔核たりしもの、決して輕々に看過すべきからずとなすべく、洪範の五行說の展進、亦後世醫學的考察に根因たる要素を附與せしこと鮮少なからず、少しく後條にこれを録して考究に備ふるゝところあるべし。

『疑問錄』 下 卷 (太田錦城)

朱子云、太極只是一箇理學。語類

又云、太極只是天地萬物之理、在天地言、則天地中有太極、在萬物言、則萬物之中、各有太極、未有天地之先、畢竟是先有此理、動而生陽、亦只是理、靜而生陰、亦只是理云々。

又云、蓋太極者本然之妙也、動靜者、所乘之機也、太極形而上之道也、陰陽形而下之器也云々。

又云、太極生陰陽、理生氣也、陰陽既生、則太極在其中、理復在氣之內也云々。

又云、太極理也、動靜氣也、氣行則理亦行、二者常相依、而未嘗相離也云々。

程子曰、係辭云、形而上者、謂之道、形而下者、謂之器、又云、係辭 一陰一陽之謂道、陰陽形而下者也。遺書

又云、離了陰陽、便无道、所以陰陽者、是道也、陰陽氣也、氣是形而下者也、道是形而上者、則是理也。同上

又曰、一陰一陽之謂道、道非陰陽也、所以一陰一陽者道也、如一闔一闢謂之變。同上
朱子云、大傳既曰、形而上者謂之道矣、又曰、一陰一陽之謂道、此豈真以陰陽爲形而上者哉、正所以見一陰一陽雖屬形器、然其所以一陰一陽者、是乃道體所爲也。朱子文集

又云、一陰一陽之謂道、則陰陽是氣、不是道、所以爲陰陽者、乃道也、若只言陰陽之謂道、陰陽是道、又曰一陰一陽、則是所以循環者、乃道也、一闔一闢謂之變亦然。

又云、天地之間、有理有氣、理也者、形而上之道也、生物之本也、氣也者、形而下之器也、生物之具也、是以人物之生、必稟此理、然後有性、必稟此氣然後有形。

又云、理與氣、決是二物、但在物上看、則二物渾論、不可分開各在一家、然不害二物之各爲一物也、若在理上看、則雖未有物、而已有物之理、然亦但有其理而已、未嘗實有是物也。語類

問、有此理然後有此氣、朱子曰、此本無先後之可言、然必推其所從來、則須說先有此理、然理又非別爲一物、即存乎是氣之中、無此氣、則是理亦無掛搭處。同上

(中略)

係辭傳云、易有太極、是生兩儀、兩儀生四象、四象生八卦、程朱太極を道とし理とし、兩儀以下を器とし氣とす、是其一證なり、然るに係辭に易と云もの多し、易有聖人之道四焉、以言者尙其辭、以動者尙其變、以制器者尙其象、以下策者尙其占と云しは、卦爻經文を併せて易と云もの也。易與天地

準と云、夫易廣矣大矣と云、子曰、易其至矣乎と云、易無思也、無爲也、夫易聖人所以極深而研幾也と云、又曰、夫易何爲者也と云、乾坤其易之緼邪と云類は、是指卦爻而言ものなり、易曰、負且乘、致寇至と云、易曰、自天祐之、吉無不利と云類は、是指經文而言ものなり、天地設位、而易行乎其中矣と云しは、造化陰陽の變易を指して云もの也、神無方而易無體と云、生生之謂易四營而謂易と云、六爻之儀、易以貢と云、上下無常、剛柔相易と云は、卦爻陰陽の交易を指して云もの也、云々、

『疑問錄』上卷

本然氣質

朱子の説に、本然氣質の二性を建つ、二程全書の性を説く所を考ふれば、曰、性相近也、此言氣質之性也、非言性之本也、若言基本、則性即此理、理無不善、孟子言性善是也、何相近之有哉と、又曰、孟子言性之善是性之本、孔子言性相近謂其稟受不相遠也とあり、張子橫渠の正蒙に、形而後、有氣質之性、善反之、則天地之性存焉、故氣質之性、君子有弗性焉とあり、朱子釋之云、天地之性指理而言、氣質之性、則以理雜氣而言、又曰、有天地之性、有氣質之性、天地之性、則太極本然之妙、萬殊之一本也、氣質之性、則二氣交運而生、一本而萬殊也と、云々。

一理萬象なる易哲學は、發展して終に天人感應の思想を許容せるは、當然の歸趨なりと言はざるを

得ず、爻卦の象を以て宇宙に瀰満する天然の方則と同視し、而して更に根本的造化の契機と合致せしめたりしものなり。繫辭傳に、易は天地と通ず、故に能く天地の道を彌綸すといひ、是故に幽明の故を知る始を原ね、終に及ぶ故に死生の説を知る、精氣物を爲し、游魂變を爲す、是故に鬼神の情状を知る、天地と相似たる故に違はず、知萬物を周して道天下を濟ふ、故に過ぎず、旁行して流れず、天を樂み命を知る故に憂へず、上を安じ仁に敦し、故に能く愛す、天地の化を範圍して過ぎず、萬物曲成して遺さず、晝夜の道を通じて知る、故に神は方なり易は體なしと云々、以て此理を明詳に察知すべし。

又、象傳に、天文を觀て以て時變を察す、人文を觀て以て天下を化成す。又曰く、天地順を以て動く、故に日月過たず、四時違はず、聖人順を以て動く、即ち形罰清くして民服す。これ即ち宇宙觀と倫理觀との合致を力説するものなり、天地萬有の法則は、人道と其軌を一にす、故を以て天と人と、密接にして離反すべからずとす。換言せば、人間生活に於ける神身（精神及び肉體）が、變易を指示する事、直に採て以て天然の變易と觀るを得べしとすものなり。爰を以て人身の變化は、自然の順逆奈何に歸す。即ち對變、對症の方術が、自然的發生に據りて爲さるべきの想像が展開し來れるは、己に疑ふべき餘地なからん。

人身は直言せば天然の縮圖にして、一呼一吸悉く天然に因縁せりといふ思想は、更に洪範の思想より、引いて五行説に到達して之が遍滿を見、重ねて五行人身窮理の方法を開暢し來れり。血液、骨髄、

經絡、有機的と無機的とに關せず、其生成と變化とは、一汎五行の生因に至大なる關涉を有すとせられたり。故に今、洪範哲學に就て瞥見せん。

洪範は、箕子が周の武王に説述せるものと傳へらる。箕子が武王に對へたる言に因るに、天下を治むるの道、九疇に過ぐるものなし。九疇は實に天より出づ、我其事を聞く、昔、唐堯の時に當り、洪水ありて天下の患を致す、堯、鯀に命じて之を治めしむ、之によりて鯀洪水を防止するに水性を逆戻するの態に出で、天が陳ずる五行の序次を洩亂せり。上帝震怒、鯀には此九疇を與へず、これ彝倫破れて敍を失ひし所以なり、鯀罪を獲て殛死せり。子、禹、乃父に亞ぎて起つ。よく水の性に順從して治むるに、地平に天成る。依りて天、書を洛水に浮べて禹に下し賜ふ。禹これを分別して洪範の九疇とす、即ち彝倫の敍づる所以なり云々。洪範哲理の由來、正に此に略敍するが如し。

今更にこれを略解せん

(一)五行にありては

一水	潤下	鹹
二火	炎上	苦
三木	曲直	酸
四金	從革	辛
五土	稼穡	甘

五行の性質を説き、其の結果を示せるもの。
(二)五事にありては

一貌	性	恭	結	肅
二言	性	從	結	入
三視	質	明	果	哲
四聽	質	聰	果	謀
五思	質	睿	果	聖

同じく性質と結果とを示す。

(三)八政にありては

- 一食 二貨 三祀 四司空 五司徒 六司寇 七賓 八師

(四)五紀

- 一歲 二月 三日 四星辰 五曆數

(五)皇極

(六)三德

- 一正直 二剛克 三柔克

(七)稽疑

- 一雨 二霽 三蒙 四驛 五克 六 七悔

(八)庶徵

一雨	二暢	三煥	四寒	五風	六時	肅時	入時	哲學	謀時	聖時	狂恒	僭恒	預恒	急恒	蒙恒
休徵						咎徵									

(九)五福、六極

- (一)一壽 二富 三康實 四攸好德 五考終命

- (二)一攸短折 二疾 三憂 四貧 五惡 六弱

以上即ち箕子哲學の機構に係るものなりとす。更に少しく解説せん、五行より五紀に至り、皇極を安行するもの、三德より五福六極に至り、皇極を輔成するものなり、皇極五に居据して主義綱維と成る、範疇九ありとも總括して皇極に極り、以て全機構の樞軸と成るものなり。

(一)五行は、大禹これを金、木、水、火、土、穀を以て六府とす。府とは聚の義にして利用厚生を云ふなり。左傳、天生五材民並用之廢一不可云々。五材と稱するものは即ち金、木、水、火、土の五行に通ずるもの、故に五行は物質に關して論じたり、貴賤瞬刻といへども五行とは離反すべからず、五行國土を形成し、五行人間に生活要素を與ふ、即ち五元素に外ならず、故に又皇極、即ち君道と關聯し、君主の治法直ちに影響すこなす。これ原始的觀念にして、五行を氣を以て配し且つ議するは後世の説にして、換言すれば原始的の意にはあらずこなすべし。

(二)五行は人間にありては五事となる。貌、言、視、聽、これらは外になりて見るを得べきも、思は内に在りて見るべからず。外、守りて忽諸ならずんば、内、操守一致して以て天君一敬こならん。

(三)八政は正政治國の範なり、天地此五行あり、聖人敬の一事を以て五行を具行す、八政は人道を以て天道を治むるもの。

(四)五紀は天道を以て人道を驗するもの、即ち天の人間に示すところなりとす。

(五)皇極を建つるは天地の中正を資つて人中を立つる所以、本基に五行を措置し、敬するに五事を以てす、且つ厚ふするに八政を以てし、協ふに五紀を以てすれば、皇極正に全組織の樞機たらんのみ。

(六)帝王、五行の理を以て人を治む、人道に三徳を宣ふる應に然り。

(七)稽疑 人を以て天を聽くなり。天道を直ちに人道に及ぼすなり、明こあるは即ち感を轉ずる所以なり。

(八)人道を以て天道を驗す。天を推して人を徵するもの、人の氣に因て天の氣變る、庶徵に念こいふもの實に省驗する所以なり。

(九)五福六極は、人、善をなせば天之に福を以て應ず、不善は極を以て應ぜらる、極は即ち禍なり、之を要するに五行より庶徵に至り、各敍を得れば民五福に歸す、之に反して序を失墜すれば民大極に陥る、人、感じて天、之に應ずるなり。

洪範の哲學は、天地の運行之、萬象曆數との理に於て人生觀を立て、而して體系的に敘述したり、天人感應、天人相關の根本原理の、茲に於て思想統覺上に組織を見るに至りしもの、上世の洪範思想が、後世に至りて不知不識の裡に、自然と人生の接觸、及び、疾病と治療の概念上、非常なる抽象觀念となり、引いては直ちに陰陽、男女、交感、順逆と諸々の錯綜、變化に對せんこせしは、殆ど挾疑の余地なからんこす。

東洋固有の醫術語として多く用ひらるゝものに「心」「性」「情」等の語あり。醫術上より看しものは、多く精神病理を檢討せし文獻中に論ぜらるゝものなれども、病狀に於ける心と性と情とは、自ら内容に關する變化を考量せざるを得ず、何こなれば疾病が是等の内容を變現せしむべければなり。精神的作用が悉く順應する時は、即ち醫術語格として特殊なる觀念を附加する要を見ず、然しながら一旦精神疾患を致して作用の奇怪なる濁濁を顯はす時は、始めて術語として別種の考證を必要と爲すべ

し。
最初に、東洋固有の所論より、以上三の精神作用を見、以て後段の變化時に對する用意なきんか。

一、心の觀念

古學に於ける解釋

人間の思慮考量をなす精神作用、これを心といふ。中庸に、心未だ發動せざる所の理體の不偏不倚なるをば天下の大本とし、其不偏不倚より心的作用を發起し、喜怒哀樂の節に中る所の和を天下の達道とす。人倫故に此の一心に歸するを以て大道とす。而して此心に近似せるものは性なり。性は生成の所を意味し、心は考思の作用より之を稱す。

宋學に於ける解釋

人間の生る、や天の理を得て之を本性とし、天の氣を得て以て其體とす。理と氣と合して心となる。故に心、一身の主宰、視聽言動の發起、皆心の命ずる處なり。心の發する所、理より發するものは悉く天理に合す、之を道心と名づく。氣より發するものは善惡交雜せり、之を人心と名づく。即ち義理よりするものは道心、人身の血氣よりするものは人心と稱すべし。然りと雖も人心道心一心に歸す。氣を離れて理なく、氣を交へざる道心を義理心といは、體用に於ても靜的狀態の心、一度發して事物に接するや始めて心の用を表はす。これ動の状態に入れるなり、未發の心、即ち靜的の心狀は氣を

交へざるが故に、本然の性にして至明なり。然れども氣交はりて發動するや、人欲交々錯綜して、混雜なる作用を來すものなり。

古學は、性は性來の全體、心は其中の思考作用なるが故に、心は内、性は外となる。宋學にありては性は心中にある理なれば、心は外、性は内なり。これ二學相反の學理となりし一點なれども、亦考量の一端、以て心の性質に關する東洋固有の思考を窺知するに足るべきなり。

二、性

古學の解釋

性は所謂性來、生れつきの素性を云ふ。古代に於ける性の研究は、性の淵源極めて遠しとなし、人性説の隨て混亂せる心理觀となり來りしは蓋し止むを得ざる一事とも謂ふべし。易の繫辭傳に、一陰一陽之を道といふ、之に繼ぐものは善なり、之を成すものは性なりといへる、すべて本原を天敘の自然に出づこなせるものなり。即ち人間の氣質種々あれども、之を要するに人性論の古來屢々反覆せらる、所以は、善惡剛柔の據つて消長する現狀に不審を挿しものと見るを得べし。

宋學の解釋

本然の性は萬人共通のものなれども、氣質の性に於ては清濁あるが故に、聖愚賢否の差を生ずる所以なり。

氣質の性とは天の陰陽五行の氣を稟受せしものにして、茲に五行各相の氣質顯はるゝに至る。陽性は剛、陰性は柔、火性は燥、水性は潤、金性は寒、木性は溫、土性は遲重す、この七相混じて氣質を成す。而して七性の調整したるを聖人となす。又、七性の調和を缺きたる時は、即ち中和を滅失し、陽氣の偏は剛にして烈、陰の偏は軟にして弱、陽の惡を稟けたるは躁くして暴、忿厲酷し、陰の惡にありては心狭く譎險なり、陰陽五行の氣、まことに清濁混交して復雜極りなき性を具象するに至るもの、以て氣質と性との相貌を窺ふべし。

三、情

古學の解釋

情は、人間生來嬉怒、一點の偽慮なき純朴なるものを云ふ。故に動きて思慮に關涉すれば、既に情ならずして心と稱すべし。性の善惡は孟子以外、諸子の論議する所たりしかども、人は本性の體、得て見る可らず、情は人心の純粹、些の偽飾なければ、性の實體を見るを得べし。

宋學の解釋

情は性の動、心の用なり。本性の理、物象に接觸して發動する状態を言ふ。喜怒の發するが如き、皆心の用となすべし。情感のよく節に中して當然の則に合せば、即ち道に合致するが故に本然の動といふ。これに反する時は情の不善なるものなり。情は善惡の二方に通ず、喜、怒、哀、樂、愛、惡、

欲、これを七情と稱す。

朱子の四端を情とせざるも、孟子は四端の心と稱して情と言はず。古學と宋學と、茲に差あり。惻隱、羞惡、辭讓、是非、即ち四端の考察に涉らずして動く時、之を情ともいへり、七情の發動がよし節に合するも合せざるも、内に發して性の姿態を縱横ならしむる、これ天の理にして明らかに又、後に擧げんとする變症の措置にも思惟を及ぼすべき術語ならん。

心理の法則に關する術語、多しとするも、以上の三語を列記して以て東洋に於ける固有の解註を髣髴ならしむるに止めたり。他は悉く之を略し、更に一轉して精神病理に關する文獻擧揚に際し、廣汎なる東洋固有思想に就て、顧みんと欲す。

陰陽の交替消長より、人間乃ち自然、自然即ち人間、所謂天人感應の極端なる機朕を醸せしことは既に述べたり、爰を以て東洋に於ては、活生命の機微を直ちに陰陽の所爲となしたるにて、「軒岐救正論」に

造化の機は水火而已。人身の要は毒血而已。氣血の本は元氣而已。陽に在りては天を爲り日を爲り火を爲り熱を爲り神と爲る（已上火）

陰に在りては地を爲り月を爲り水を爲り寒を爲り血を爲り精を爲る（已上水）

陽は陰を以て體を爲し、陰は陽を以て用を爲す、故に陽無れば陰以て生ずること無く、陰無れば陽以て化すること無し、陰陽の交濟は天人一理なり、周子の所謂、太極にして陰陽水火皆其中に寓す。

乃ち渾沌の一氣なり。而して人身の太極は命門也。命門なるものは精神の舍る所にして、丹田、關元、氣海の際に在り。水火焉に宅す。故に精は水にして陰に屬し、左腎之を司る。神は陽に屬し右腎之を司る、右腎は全身に於る陽の根と爲り、左腎は全身に於る陰の主と爲り、皆命門に歸す云々。以上所論の大綱を説示せしものなるも、以て命門なるものが、即ち精神の舍る所に屬し、而して、精の水陰、神の陽根たり、合して精神なる造語の由來を識るべく、又同時に、左右の腎臟に於て、生命、乃ち命門の主動作を司掌することなすの議論を知るに足るべし。茲に於て先づ、文献載する所の、「命門」なるものをば略解し得たり。

更に「類經附翼」にこれが解註を掲げたれば、茲にその大綱を採録して固有の傳統を瞭かならしめん乎。

命門なる者は腎臟にして精を藏する府庫也。腎なる者は先天眞一の氣にして、北門の鎖鑰を主とる。而して其鎖鑰を爲す所以の者は、命門の閉固に賴つて水中の眞陽を蓄へ、以て一身生化の源と爲すなり。腎二つあり、右腎を火と爲し、左腎を水と爲す、皆命門に屬す、命門は水火の府と爲し、陰陽の宅と爲し、精氣の海と爲し、死生の門と爲す。命門若し虧損すれば、五臟六腑皆其恃む所を失うて病變至らずと云ふこと無し。何となれば天地發生の道は下に終始し。萬物盛衰の理は盈虛根に在るを以て也。故に許學士腎を補ふを貴び、薛立齋、毎に命門を重んず。二腎の高見迥に常人を出づ。是れ誠に性命の大本也。

又曰、命門の水火は即ち十二臟の化源也。故に心臓之に賴れば君主以て明也（心を君と爲す）肺臟之に賴れば治節以て行る（肺を宰相と爲す）脾胃之に賴れば倉廩以て富む（脾胃を倉官と爲す）肝膽之に賴れば謀慮出づ（肝は將軍膽は決斷を司る）膀胱之に賴れば三焦の氣、化す（三焦は氣道也）大小腸之に賴れば傳道自ら分る（大小便能く分利す）

又曰、凡そ病は由て生ずる所あり。故に病を治むる必ず其本を求む。而して五臟の本は命門に在り。故に王太僕云ふ、水の主（左腎の水）を壯にして以て陽光（右腎の火）を制し（平均せしむ）火の元（右腎の火）を益して以て陰翳（左腎の水）を消す（過盛を制す）正に之を謂ふ也。許學士云ふ。脾を補ふは腎を補ふに如かずと云々。

命門の中節、これを以て極めて明詳なりといふべし。

「附翼」に水衰れば陰虛の病を生ず、面赤く朱の如く、或は口渴し咽焦れて水を好み、或は躁擾狂越して泥水中に臥せんことを欲し、或は五心（五臟の心）煩熱し、消渴骨蒸す、或は大小便秘結し、尿汁の如く、或は吐血、衄血（眼耳鼻口皆衄す）或は咳嗽、遺精を爲し、或は身に斑黃を生じて汗無く、或は中風、瘕瘕（筋、伸縮）此等の類は水の不足するより、生ずるの病（意譯）と謂へるが如き、腎水の虧損して奈何に病變するやを提示する一證、他は推して知るべきならん。

尙「醫通」二卷、虛損の章、

「赤水玄珠」三十六卷 便毒條 參照。
之を要するに命門の盛衰が、直ちに陰陽虛實の變化變徵を來し、所謂病氣と成るの根據たるを語れ
るものにして、

命門の火衰へて脾胃虛寒し

飲食不振、下痢、小便自遺、虛淋、寒疝、浮腫、神疲氣怯、四肢不收、痰上湧、

等の變化を示し、即ち眞陽不足症狀を顯現すこなす。

故に

陽虛の症となるや、火、下に虧損するを以て陽氣上に衰へ、遂に、神氣昏沈を來し、步行困倦とな
る。この變症の現象としては前述のもの以外に、

頭目眩暈、眼耳鼻口偏癢、咽喉哽咽、嘔寒苦患、吞酸反胃、(吞酸は脾胃の間に伏して酸味心を衝刺
し、反胃は、食化せずして出るをいふ)痞滿隔塞して水浮び痰を生成す。

以上は中部の陽虛也。

大小便不分離、腸鳴滑泄、陽痿精冷、臍腹多痛、

以上は下部の陽虛也。

寒を畏る、は心臟の陽虛

肌肉鼓脹は 脾臟の陽虛

拘攣痺痺は 肝臟の陽虛

自汗身涼は 肺臟の陽虛

精遺(夢に精逸出する之を遺精といひ、夢に非ずして出るを精遺と云ふ)血泄、使失禁、腰背骨痛
は腎臟の陽虛

これみな元氣、即ち腎火の敗傷に因る。

人身は氣血を根と爲す。(其本腎に在り)

若し酒色に耽り元氣耗散して精液を虛敗すれば、眞陰虧損し、虛火熾んにして痰火の症となり、潮
熱、吐血、唾血、咳嗽、盜汗、自汗、男子は遺精、自濁、女子は崩漏、帶下となる。又上盛にして
下虛する時は、手足の心熱し皮焦れ、午後怕寒、夜間發熱、面白く唇赤く、頭目眩暈、腰脊酸痛、
胸腹脹悶、口燥咽乾、飲食甚少。かくして時を經るや、虛火上攻して面紅く喘を發し、臨臥枯腦、
精神困憊、手足無力、肢肉消瘦、小便赤澀、大便濇瀉、是れ皆陰虛火動してなすところの症狀なり。
これを虚損、虚勞、勞瘵と名るは、症狀の輕重に依りしもの、勞瘵就中最も重し、即ち勞の極にし
て肺の重症なれば也。

東洋に傳統せられたる文獻の大略を措撫して活生命の根源たる命門の略解を施すこと爾り。これを以

て陰陽虛實の變化が人身諸般の構成に影響を與ふる所以なりとする一汎的考察の状態を、稍解し得たりとすべし。かくの如き命門説を先づ概念し、而して後、廣汎なる意味に於ける精神病理の文獻に臨まざるべからざるなり。これ、予の特に人身窮理上頭腦的病症に關する古人の考覈、東洋固有の比較研究上に於ける語義的概念を必要なりとす所以にして、重ねて更に議する時あらんことを、曩に東洋の思想、及びこれを傳稱して一段の研覈を遂行せしめたる日本の文獻に對する唯一の方途なるべきを信じたるに外ならざるなり。

精神病理論の發生學的觀察

一、精神病の基本的論理

東洋に於ける陰陽盛衰の發生的理論、及び天人照應の思想に關しては、前掲の一小齣を以て、略々明白となりしを信ず。陰陽何れか、虧損する時は、所謂不和不運にして疾病の現象を生ぜざるを得ず。これ至て容易なる發生的思推の段階順序なり。

内經に

一陰一陽是を道と云ふ、偏陰偏陽是を疾と云、

とあるは、即ちこの思想を括約して醫學的見地より顯はせるものに屬す。又、内經に

兩者和せざるは、春にして秋なく、冬にして夏なき如し、因て是を和する聖度と云、聖人和合の道

但閑密を貴て以て天真を寄す云々

偏陰も偏陽も既に陰陽の平運和融ならざるを示し、又

陰の生ずる所本五味にあり、陰の五宮傷る事五味にあり云々

とて、榮衛循環の義、陰陽相和の根本たる食制に存し、而も得て傷破せられ易きを以て、疾病の第一眼目と爲したり。故にこれ、後に精神疾患を言はんとする時、主として胸膈の痰飲、並に氣血の虛實

を提供するの因となせしもの、更に、氣血の虛實を、命門に於ける先天後天の元氣の虛實に纏絡して、相互に聯關を試み、遂に端なからしむるの陰陽論に終始せるものとも謂ふべし。

先天の氣を腎と命門との間にありとなし、後天の氣をば、脾胃の間に存すとなせり。故に李東垣が、脾胃虛すれば、五藏六府十二經十五絡四肢百骸、皆榮運の氣を得ずして百病生ず。

といひるは、實にこゝに發端する所以なりとす。

精神疾患は、一に心疾として是を認めしが如しと雖も、心疾の外面に顯はるゝ形容に至ては、洵に千差萬別を極め、外面現象より推して内面の因據を、虧損現象として觀察せざるを得ず、茲に於て始めて精神病理に關する發生學的研究の次第に旺盛になりしを見たるは、蓋し當然の事象といふを得べし。

心を病むは、心、既に平常の位置に在らざるを以てなりとす。心とは何ぞ。曰く、心は君主の官、神明の出る所、故に是を攻衝する時は神氣昏絶す。神氣昏絶すれば血脈流行を止む、かくして終に卒に死すとなせり。これが最も端的に表はるゝを目して、癩、癩、狂の三種に大別したり。

癩と狂と兼ね、癩癩と兼ね、又、三者兼病すとなして俗に癩狂、癩癩、その他の文字を案出舉用せしことは、後に説述するものゝ如し。癩狂とは即ち狂氣なり、亂心なり。この症の發現に關する因縁は、又種々の議論あること、後出文献に明白なるが如きも、元來生質の癡魯にして而も狂躁なる者、愚鈍を増長して遂に氣質の變調を來すものあり、病症の因は、即ち病因なり、病因に關しては、古往

今來、議多くして一括すべからざるも、古人の説に曰く、癩狂の病は、總て心、火の爲に乗ぜられ、神、舍を守らざるの致す所とす。是、一言以て盡せるものとなせり。或は婦人、産後、血暈して心血を亂し、又は瘀血心に乘じて此症をなすといふ。癩狂は、只心血の亂違、これに依りて神氣昏朦となり、不正の形容を示し、所謂、心疾證狀のあらゆる形態を來すとなせり。内經にいふ、陽盡上に在て陰氣下に從、下、虛し、上實す。故に癩狂疾をなすと云々。即ち下虛上實は、陽の氣を上騰して實滿せしむるものから、心火猛動し、從て心血違亂して敗亂の極こゝに到るといふ。

儒門事親に、酒を嗜、發狂して鬼を見て死す云々の例を擧ぐ。又、邪崇の症といふものを説く。邪、惡の氣、人を崇犯すとなす症狀をいふ。一に、癩狂の作動と異らず。これを朱丹溪説て曰く、身惡鬼崇は、氣血、先虧に依て爲す所なり、神、衰ふれば邪入て、因て鬼崇の狀をなす事、理あらん、血氣兩ながら虚し、痰、心胸に塞がり、十二官、各、其職を失ひ、視聽言動皆虛妄す、邪となして是を治すれば其人必死すといへり。徐東臯、正氣弱疴なれば心邪なり。心、邪なれば、見聞する所悉く邪にあらざる事なし、故に邪は、邪を見る。正人病なき者は皆見る事を得ず、此心一に正ければ百邪とも避るなり、何の邪崇か、是を疑はむ。云々。

癩狂の疾患に關する基本的思想は、これを要するに、精神の本據を失ひ、依て以て複雑多岐なる外的表現を見て、これに一々醫學的註解を施さんとする點に、其發生を視るべきものにして、即ち得て卒倒仆擊するの狀を見て愕き、顔面、肢體等に於ける種々なる變化、倒せば涎沫を吐き、手足を拮据

し、眼目を斜喙する等、遂に頃刻にして常態に復し、或は暴瘖、蒙昧、喞僻、言語澁塞、その他の證狀を目睹して、悉く根本的考覈を加へんとしたり。後條更に是を細述せんとす。

癩、癩、狂の字義、斯くして古來、多種多様な意義を添附せられ、今人の容易に窺知すべからざる歴史と化し去らんとす。心恙と狂疾とは、同一とせられながら、其間尙、大なる差異ありとするは、要するに、外に發顯する證狀の一ならざるを認めしに外ならず、即先天元氣衰亡して、一切の機關が瘦羸するの極、上下の氣血、順ならず和ならず、精神の勞倦、諸虛百損を致す。陽氣上に實して頭顛の疾到る。かくして癩狂兼病の學證、充棟も曾ならずとなせるものなり。

二、精神病の醫學的觀察

癩、癩、狂の三大別となしたる病證に關しては、最初の見解にありては、明白に是を區別して考覈を試み、進んで其因原を検討せんとするや、症狀の多岐多種なる、よく類型し充斂せざること多きを以て、兼病兼症の考量となり、延いては、古來規範とせし病源論に對する疑義を抱き、終に紛雜極りなき經過を指示して、今に及びしもの、殘存する文献の、よし饒多ならずとするも、精神病理論の自家撞着と、新學說の瀾漫とは、吾人をして應接するに遑なからしめんとす。

東洋に於ける醫家の往昔より模範準繩とせる靈樞難經、素問、金匱等の如き醫書は、癩と狂とを判

然と分別したり。癩は約して眩仆するものをいひ、狂は失心するものを稱すとなす。難經には、重陰者癩、重陽者狂と斷じて、陰の陽に附すや則ち狂となり、陽の陰に附せば則ち癩と成るといへり。

脈經を見るに

凡脈大爲陽、浮爲陽、數爲陽。

といひ、又

關前爲陽、關後爲陰。

といへり。然らば陰の陽に附し、陽の陰に附すとは何ぞ。

陰の陽に附するは、關前陰脈を見るを指し、又陽の陰に附すとは、關後陽脈を見るを謂ふとなせり。即ち陰の陽を犯すものを狂、陽の陰を犯すものを癩となすの理、茲に發す。

先づ再び命門生氣の奈何にして疾患を生ずるやの論義を聽くべし。腎、志を藏し、肝、魂を藏する思想は、曩に述べたり。

證治準繩

腎藏志、志不足則神躁擾、所以靈樞云其先不樂也。所謂腎間者、以腎居兩傍、各有腎膽一穴、離背中三寸、又有志室二穴。楊上善謂七節之傍、中有小心者指此也。越人分之。左屬腎、右爲命門者、

精神之所舍、原氣之所擊、及論右腎之氣與左腎相通。則謂之兩腎間動氣、是入生命也。係於生氣之原、五藏六腑十二經脈之根本、呼吸之門也。夫如是者、即內經所謂腎治於裏者是也。所謂生氣者、陽從陰極而生、即蒼天之氣、所自起之分也。故經曰、蒼天之氣、清淨則志意治、順之則陽氣固、雖有賊邪、弗能害也。云々

同書に曰く

或經脈引入、外感内傷、深入於根本、傷其生氣之原、邪正混亂、天樞不發、衛氣因留於陰而不行、不行則陰氣蓄滿、鬱極乃發、發則命門相火、自下焦逆上、棹塞其音聲、惟迫出其羊鳴者、一二聲而已。偏身之脂液、脾之涎沫、皆迫而上胸臆、流出於口、五藏六腑十二經、脈筋骨肉、皆不勝其衝逆、故卒倒而不知也。云々

即ち疾病者が、仆運するの所以、實に斯くの如き論理に據るとなしたり。

然らば、癩と狂との分別せらるべき症状如何。

景岳全書

癩狂之病、病本不同、而狂病之來、狂妄以漸、而經久難已。

癩病之至、忽然僵仆、而時作時止。

狂病常醒、多怒、而暴。

癩病常昏、多倦、而靜。

由此觀之、則其陰陽寒熱、自有冰炭之異。故難經曰、重陽者狂、重陰者癩、義可知也。後世諸家、有謂癩狂之病、大槩是熱、此則未必然也。此其形氣脈氣、自亦有倨、不可不辨察陰陽分而治之。云々

針灸資生經

癩病發即僵仆倒地、故有癩蹶之言、陰氣太盛、故不得行立而倒也。今世以爲癩病者誤也。

即ち、此二病が、形氣脈氣各々差異あるを説述せるものにて、陰陽の由據するところを察智すべしと力説す。

さらば癩の因原及び症態を何と見るや。

景岳全書

癩病多由痰氣、凡氣有所逆、皆能壅閉經絡、格塞心竅、故發則旋暈僵仆、口眼相引、目睛上視、手

足搖擗、腰背強直。食頃乃甦、此其條病條已者、正由氣之條逆順也。云々

赤水玄珠緒餘

孫一奎曰、諸書有言癲狂者、有言癲癇者、有言風癇者、有言驚癇者。有分癲狂爲二門者、略無定論、究其獨言癲者、祖內經也。言癲癇言癲狂者、祖靈樞也。要之、癲癇狂大相逕庭、非名殊而實一之謂也。靈樞雖編癲狂爲一門、而形症兩具、取治異途。較之干癇、又不相侔矣。諸書有云、大人爲癲、小兒爲癇。此又大不然也。素問謂癲爲胎病、自母腹中受驚所致、今乃曰小兒無癲可乎。癇者大人歷々有之、婦人尤多、予故據經文、分爲三日、庶治者有所辨別云。

醫學綱目

凡癲癇及中風、中寒、中暑、中濕、氣厥、尸厥者、而昏眩倒仆、不省人事者、皆由邪氣逆上、陽分而亂於頭中也。

癲癇者、痰邪逆上也。

中風、中寒、暑、濕及氣厥、尸厥者、亦風寒暑濕等邪氣逆上也。

邪氣逆上、則頭中氣亂、頭中氣亂則脈道閉塞、孔竅不通、故不聞聲、目不識人、而昏眩無知、仆

倒於地也。以其病在頭癲、故曰癲疾。

多く痰の經絡を壅閉するに據るといへるもの、古來、議、頗る夥し。醫書、常に痰飲の熟字を用ふ。痰飲は即ち痰症を指すもの、粘稠するものを痰といひ、稀薄なるものを飲といふ。痰の症に

濕痰、燥痰、熱痰、寒痰、風痰、氣痰、鬱痰、虛痰、食痰、酒痰、

等の名目を列擧す、痰症激甚にして往々哮喘の症を發す。哮喘とは今の所謂喘息なり。痰、如何にして生じ、且つ疾患誘導の因となるや、濕熱薰蒸して津液化せば、即ち痰と成るとせられたり。酒を嗜みて後、水を飲用せば、脾胃に鬱滯して痰となるともいへり。儒門事親に、飲酒過多ければ腸胃已滿、滲泄することを得ず、久しくして留飲と爲る云々といひ、玉機微義亦痰の酒飲に因て得る者有るを説けり。風眩の疾、亦此痰の胸膈を壅閉するに由るとなせる、注目しに價すべし。

癇の發作を痰を主とすといへるの論あり。

「醫學綱目」「醫學綱目」 同論。

狂爲痰火實盛。

癲爲心血不足。

癇病獨主乎痰。疾在膈間、則眩微不仆、痰溢于上、則眩甚、仆于地而不知人、名之曰癲癇。徐嗣伯云、大人曰癲、

小兒曰癇、其實一疾也。

太平聖惠方

其候口鼻乾燥、大小便不利、眼視不明、耳後青色、眠臥不安、腰直目眇、青筋生、頭髮豎、時々作聲、口不噤、吐白沫、渾身煩熱、頭上汗出、恒多驚愕、手足顛掉、夢中叫喚、目瞳子大、是發癇之狀也。

聖濟總錄

其候多驚、目瞳子大、手足顛掉、夢中叫呼、身熱癩癘、搖頭口噤、多味涎沫、無所覺知也。

醫方考

癇沈癇也。一月數發者易治、云々
癇疾者、風痰之故也。風陽氣也。內經曰、陽之氣以天地之疾風名之、故其發也。暴然所以令仆地者、厥氣併于上、上實下虛、清濁倒置、故令人仆、悶亂無知者、濁邪干乎天君、而神明壅閉也。
舌者心之苗、而脾之經絡連于舌本、陽明之經絡、入上下齒縫中、故風邪實于心脾、則舌自挺、風邪實于陽明、則口自噤、一挺一噤故、令嚼舌、吐沫者、風熱盛于內也。此風來潮洶之象、背反張、目

上視者、風在太陽經也。足太陽之經、起于睛明挾背而下。風邪干之。則實而勁急、故目上視而背反張也。手足搖擗者、風屬肝木、肝木主筋、風熱盛于肝、則一身之筋牽掣、故令手足搖擗也。搖擗四肢屈曲之名、擗者十指開握之義也。或作六畜聲者、風痰鼓其氣竅而聲自變也。云々

大人の癇、小兒の癇、實は一疾の異稱に屬すとすもの、もとより他にも多きも、痰が癇を誘ふが如く、心血不足を以て癇の主因、痰火實盛を狂の主動因となせるは、一段の注目を要すべし。狂が痰火の實盛を以て原據となさば、即ち既に顛狂二病が明かに兼同せられ得べきを説かんとするものにして、單なる痰に、加ふるに火を以てす。初期的觀察に於ける飛躍を期待すべきものなりしならん。

古今醫統

癇狂癇證、主於火熾、風痰之盛而寢涎及於心、屬實者多心風、則由七情五志、久逆不遂。戴人所謂肝屢謀、膽屢不決、屈無所申、怒無所洩、心之官則思、甚則心血日涸、脾液不行、痰迷心竅、則成心風、屬虛者多治法、須以七情相勝五志遂心養血豁痰、引神歸舍、標本兼治、此疾可愈矣。致若混同癇癇攻治、是謂虛々而速其死也、噫。

風邪の陰に入れば癇、陽に入れば狂となすものあり。從て陰陽の虛實に過ぎず、癇狂二病を明白に

區別せずして邪の虚實に入る一刹那、即ち癡狂たる症状の發端たるべき現象を惹起すと考量せしものなり。

婦人良方

風邪入並於陰、則爲顛。入並於陽則爲狂。陰之與陽、有虛有實、隨其虛時、爲邪所並、則發也。顛者卒發、意不樂、直視仆地、吐涎沫、口喎目急、手足撩戾、無所覺知。良久乃甦。狂者少臥不饑、自高賢也。自辨智也。自貴倨也。妄笑好歌樂、妄行不休、故曰顛狂也。

病源候論

狂病者、由風邪入並於陽所爲也。

風邪入血使人陰陽二氣虚實不調。若一實一虚、則令血氣相並、氣並於陽則爲狂。

發或欲走、或自高賢、稱神聖、是也。

又肝藏魂、悲哀動中則傷魂、魂傷則狂忘。(靈樞作妄)不精明、不敢正、云々

皆由血氣虚受風邪、致令陰陽氣相並所致。故名風狂。云々。

癡狂の病たる、又、別に心火暴熾に由るとなす説あり。神の舍を守らず、神明の亂るゝや、自ら違亂の症状を表顯せざる得ず。陽火頻りに上炎すれば、炎熾に堪へずして、狂の如きは露裸奔走を欲す

といふ。即ち

古今醫統

徐春甫曰、癡狂之病、總爲心火所乘、神不守舍、一言盡矣。癡者至高也。火性炎上、正如經云。陽氣太上、則狂癡。云々

靈樞經曰、狂病始發、少臥。不饑。自高賢也。自辨智也。自尊貴也。故曰、狂者進取志大而大言者也。前謂狂言如有所見、斯得之矣。

蓋心火暴熾、言語善惡不避親疎、此神明之亂也。此之所謂癡狂也。蓋謂火熾之甚、陽氣太上、則病人亦乘陽火之上炎、故棄衣而登高。由狂而又癡。云々

傷寒原病式

經注曰、多喜爲癡、多怒爲狂。

然喜爲心志、故心熱甚、則多喜而爲癡也。怒、爲肝志、火實制金、不能平水、故肝實則多怒、而爲狂也。

經曰、陽明之厥、則癡疾、欲走、腹滿、不得臥、面赤而熱、妄言。又曰、陽明病、洒々振寒、善伸數欠、或惡人與火。聞水音、則惕々然而驚、心欲動、獨閉戶牖而處、欲上高而歌、棄衣而走、黃響

腹脹、罵詈不避親疎。

三因方

夫三陽並三陰、則陽虛而陰實、故癩。

三陰並三陽、則陰虛而陽實、故狂。

論曰、陽入陰、其病靜、陰入陽、其病怒、怒則狂矣。病者發狂、不食、棄衣奔走、或自稱神聖、登高笑歌、踰垣上屋、所至之處非人所能、罵詈妄言不避親疎、病名狂。

多因陽氣暴折、蓄怒不決之所致。

故經曰、陽明常動、太陽少陽不動、不動而動、爲大疾、此其候也。

癩癩の名義を明かならしめ、又、病の邪、陰經に入り、又蓄痰及び痰邪上逆、及び熱火を伴うて終始するものなるを言はんとせる用意、極めて密昵なるを看取するに足るべし。癩癩以外の風癩、風癩、其他の名、指す所一ならずとするも、徒滋惑亂の間を透徹して、發作、病狀、區分的觀察を考究し得べきは、史的經過の上より見るも、洵に逸興禁すべからざる一事に屬すべし。而も狂にして顛を引くものあり、顛の狂となるものあり、即ち狂顛兼病の症、歴々察すべきあるを觀て、これを更に區別以外に區別せんとしたるは、次第に考察の推移に、進展の跡を示すといふべきならん乎。

醫學綱目

狂。

謂妄言妄走也。

癩。

謂僵仆不省也。

各自一症。然經有言、狂癩疾者、有言狂互引顛者、又有言顛疾爲狂者、此則又皆狂顛兼病。

今病有妄言妄走、頃時前後僵仆之類。有僵仆後妄見鬼神半日方已之類、是以顛狂兼病者也云々

大人曰癩、小兒曰癩云々。大人と小兒と、癩癩發作及び證狀に於て、差異あることを指示せんとしたるものにして、此思想の長く脈絡を引いて後世之を識別せんとするもの、一大苦慮を來したるは、尙以て省顧すべき一事たらん。何となれば、大人發病に關する證狀は、世醫擧げてこれを説明するも、小兒の病態に至ては、別種の特異なる徵候を示す事多きを以て、遂に母胎中の心理影響に遡源せざるを得ず、所謂胎中に於ける然るべき現象を考へしが故なり。これ後に、小兒病として、體軟、癡騃等の名目を案出せしむるに至れるの一根因となれり。

病源候論

癇者、小兒病也。十歳已上爲癲、十歳已下爲癇。云々

然しながら、癲も癇も要するに同病たるを免れずとして、實驗的論理に到達していへるあり。

醫學綱目

徐嗣伯云、大人曰癲、小人曰癇、是亦不知癲、癇一病也。故王肯堂曰、素問、謂癲爲母腹中受驚所致。今乃曰小兒無癇可乎。癇病、大人每々有之、婦人尤多。

癲、即ち癲の證としては、小兒の穎悟なる性氣たりしものが、一たび癇を發してより後、よく成るとなし、驚癇の激甚なる發作に依りて、神識頓に脱亡するに出づとなしたり。即ち飲食及二便等常人と異ならずといへども、面貌魯鈍の相を具し、多笑して羞惡を知らず、死證にあらずとするも獸物たるに終ると決す。但し生來の癲兒もありて存す。これは天然の出生に屬し、人力の能く及ぶべからざるものとなしたるが如し。

景岳全書

癲證、凡平素無痰、而或以鬱結、或以不遂、或以思慮、或以疑貳、或以驚恐、而漸致癲。

言辭顛倒、舉動不經、或多汗、或善愁。其證千奇萬怪、無所不至。

脈必或弦或數、或大或小、變易不常、此其逆氣在心云々

右を以て觀察の一斑を窺ふに足るべし。

體軟の觀察に就ては、別掲資料、一本堂行餘醫言（卷之五）體軟の條に詳かなり。軟に五ありとなす。

錦囊秘録には

五軟者、手、脚、腰、背、頸軟、是也。

と見え、

證治準繩

五軟者、頭軟、項軟、手軟、脚軟、肌肉軟、口軟是也。

とありて、而も各病の因據、證狀を具備して、記述したり。就て見るべし。（一本堂行餘醫言該條にも引用せらる）

古今醫統

五軼證、名曰胎怯。

而してこれ父の精不足、母の血衰弱、此時に孕ありしもの疾多しといひ、又、他の原據も列擧したり。要するに降生しての後、精氣充たず、筋骨痿弱、肌肉虛瘦、神色昏慢、手足頭項悉く軟軟なるを稱ふとなせり。王肯堂の如きは、小兒の久しく疳疾を患ひ、體虛にして久しく飲食進まずんば、遂に天柱骨倒して即ち五軼候を現はすともいへり。

大人と小兒との癩癇症に關する古來の觀察以上を概約して茲に陳ずるのみ。

三、精神病の特質及標型

癩は、病の漸く進むに従ひ、人、顛倒昏塞して人事を知らず、即ち癩と稱すといひ、又總じて病、頭顛に在るを以て顛病と名義とするに至るとす。癩は、間字に従ふ。即ち病、間斷して發するが故なりとし、又は病、簡慢なる性質たるを云ふともなす。

狂は驚と同じく、驚恐、狂躁の發狀、總て急劇なる發作及經過を示すを以て名くとす。癩の、沈痾たるに反して、狂は悉く浮痾となせり。是れ實に、初期的實驗記載を括するもの三者の甚しき證候とし、狂に癩あり痾あり、癩に痾あり狂あり。癩あり、痾に狂、癩あり、而してともに、驚、悸、恐、畏、不食、不大便、不寢、等の特色ある形態を伴ふものとなし、遂に、沈痾たる癩病が、驚、癩、狂病の一切を總括するの病名たることを、力説するに至りしものゝ如し。例せば日本、香川修徳の「一



本堂行餘醫言」の如きは、此の一例に屬す。

證治百問

或曰、癩之發也。徒然而發、發時四肢搐搦、聲音變亂、頭搖目竄、角弓反張、口吐涎沫、而加五色、肢溫多汗、少刻即甦、毫不知發病之形狀、唯覺體倦、而神色萎頓。目無神色、若非痰火、如何有此怪病、吾子不言有致痰致火之根源、反以消痰降火、爲非者何也。答曰、癩病雖小疾、而不能即愈者、正以醫家獨治痰之標病也。

凡論治癩、皆言痰在心經及經絡四肢。人見經絡四支受病、故認定爲痰、徃々用安神、鎮驚、清心、降火、消痰爲主治。余獨治此症所重者、是火。

此火非心經之實火、本、手少陽三焦手厥陰、心胞、絡虛火爲病也。此火正屬龍雷之火、陰火也。蓋龍雷之火、發時必有暴風疾雨、附而併發。少頃風恬雨霽。

一如平時、所以知火爲本而痰爲標也。云々

茲に、痰火之標病、痰爲標といふ語あるは、病に標本といふことあり。標は現今の所謂急證を示すの語、本は本源の病を言ふ。時に臨みては、本源を棄て、急を救ふ。即ち右の一章は、癩病の本源が虛火（心經の實火ならずとすること本文中に見るが如し）に在りて、發して標症、即ち急證と成れる

を云ふなり。

第一の特質は

初め、癲、狂、を證候同じからずとして、これを陰陽の虧損を以て論理的に大別し、而して、歴然と標型を考量案出せんとしたるに在り。此の細叙に關しては諸書に互に出入紛雜を致すといへども、試みに醫燈續焰の一章を抽出して、以て參攷に資すべし。

醫統續焰

癲者顛也。謂發時顛倒、異于平日。

語言錯亂、喜怒無因、或笑或歌、或悲或泣、神迷意惑、穢潔妄知、平日能言、發反沈默、平日沈默、發反多言甚、或行步不休、或復僵仆不起、俗呼爲失心風。

狂者剛暴猖狂、呼號罵詈、則踰垣上屋、蹈火赴湯、不避死生、不知飢飽、倍常勇力若邪所憑、俗呼爲發狂。

二者證既不同。因當各異、古人多以顛狂混稱、亦疎略矣。

蓋人身氣爲陽、血爲陰

府爲陽、藏爲陰。

府之手足六經爲陽、藏之手足六經爲陰。

形質可見者爲陽、神志不可見者爲陰。

身半已上爲陽、身半已下爲陰。

表爲陽。裏爲陰。

凡此陽陰、俱各兩相依倚、互爲交通、而後、氣血和平、府藏安靜、經脈調勻、形神合一、上下無厥逆之虞、表裏無盛虛之變。

如是微尙小疾、亦無自而生。况癲狂乎。

今癲云重陰者、謂偏重于陰也。邪入于陰、而陰實也。五藏爲陰、神志舍于五藏、亦爲陰、

設或抑鬱不伸、謀思不遂、悲哀不置、佗僚無聊、久々藏神凝結、情識昏迷、靈明何有。此癲之成于神志者也。

一種因陽虛不能衛、外反下陷、而附并于陰。附并于陰、則陰氣實、下而不上、則升降紊、而癲疾成矣。

即脈經所謂、陽附陰則癲者是也。

一種因三陽從頭下行、三陰經不得從足上行而逆下、下則陰經實、亦似陽附陰之義。但此直指經脈之逆經、所謂癲疾厥狂久逆之所生者是也。

一種因內有蓄血。令人如狂、或善忘、或如見鬼。如狂者、如狂而非狂、即癲狀也。

血者神明之府、血蓄不行、神機大礙、故見上證。
血爲陰、是亦重陰々實之義、謂之邪入于陰亦可。

狂則反是

乃重陽々實之證也。

素問宣明五氣篇云、邪入於陽則狂。邪入陽則陽實、陽實則熱盛。陽性主動以盛熱、而加以動性、猖狂剛暴、不言可知。又

生氣通天論云、陰不勝其陽、則脈流薄疾並乃狂。竝則陽重陽實之義。故素問病能論云、狂生於陽也。又云、陽明者常動巨陽、少陽不動。不動而動大疾。此其候也。蓋言陽明之經脈常動、以陽明爲水穀之海、其氣充盛、故常動巨陽。少陽之脈不動。下言二經之氣不如陽明之盛、故不動。不動者非不動也。不如陽明之常動也。今無論常動者、即不動者亦常動、而動且大疾、是爲狂病之候。觀此則狂病之爲重陽陽實明矣。云々

又、靈樞本神篇云、肝、悲哀動中則傷魂。魂傷則狂妄不精。

肺、喜樂無極、則傷魂、魂傷則狂、狂者意不存人。

夫肝屬木性、上達而藏魂、故魂主升陽也。悲哀而至于動中、則神情消沮、恍成秋金、而剋木。木受

剋肝氣傷、肝氣傷則魂無所歸、而欲其精明不忘、不可得矣。肺屬金、性收降而藏魄、故魄主降、陰也。喜樂而至于無極、則神情渙散、恍成夏火而剋金、金受剋、則肺氣傷、肺氣傷則魄無所歸、一派浮陽、動成狂妄。又安能內照而意存人事哉。

又、靈樞經脈篇云、陽明病至、則惡人與火、聞木聲則惕然而驚、心欲動、獨閉戶塞牖而處、甚則欲上高而歌、棄衣而走。

夫邪客陽明、則陽盛熱甚、人則增煩火、則助熱、故惡也。聞木聲而驚者、驚其相剋、故惕然心動也。閉戶塞牖、即惡人火之義、甚則

欲上高而歌、棄衣而走者、

以四肢爲諸陽之本、熱實四肢、健于登躍、故能上高而歌。

身表爲諸陽之暑、熱盛于身、意求涼爽、故欲棄衣而走。

又、靈樞大惑論云、衛氣不得入于陰、常留于陽、留于陽則陽氣滿、陽氣滿則驕盛、不得入于陰。則陰氣留、故目不瞑。

又曰、衛氣留于陰、不得行于陽、留于陰、則陰氣盛、陰氣盛則陰驕滿、不得入于陽、則陽氣虛、故目閉也。

其中言及二驕者、以二驕之脈皆上會于目內眥、陽脈交于陰、則陰驕盛、故目閉。

陰脈交于陽、則陽蹻盛、故目閉。

靈樞癲狂篇、首叙目之内外及上下皆者、亦以

癲則目閉。

狂則目開。

而明陰陽之所以不同也。是皆不易之理、然而兼痰兼火兼風者、常十之五。以三種兼證、而較審之。

則

癲必多痰。而

狂必多火多風也。

痰則多滯九竅、九竅從陰從藏、九竅不利、故癲多。

風火多淫四肢、四肢從府從陽、四肢盛實、故多狂。

即ち陰陽の連關、五臟と五行、病症の標型とを、これを以て明確ならしめんとしたるもの、一に屬す。而も、狂病の證候となすもの、中、更に、棄衣、登高、妄行、歌笑、自尊、少臥、不饑等の理由を、痰の所爲ならずとして解註したる文献を補はんとす。

儒醫精要

狂之爲病、經曰、重陽者狂、其病屬熱、夫何、熱者陽也。陽者浮也。其病能棄衣登高、棄衣者、因熱而不欲衣。登高者、因浮而能輕舉也。

又能強辨是非、尊貴倨傲、妄笑好歌、妄行不休、不肯少臥者何也。陽動而陰靜、故陽病欲見人、不欲閉戶獨處也。

又能不餓者何也。陽邪伏藏、胸膈飽滿、所以不饑也。其病也有源、其發也有候。世醫不究其理。舉以爲痰。同聲相應。噫、不知痰是何物而狂是何病也。若以痰爲狂、則凡有痰者皆狂。而予未之見。云々

第二の特質は

精神疾患の複雑なる證候を、數種目に分類して、縦し分類中の證狀が、相互に抵觸するの事實ありとしても、其主要なる形狀を以て、標型を樹立せんと試みたるにあり。即ち、病源論の可否、及び心理的傾向は第二義となして、これを發作並に病症經過の經驗より採り、名義の汎稱を充當して提示せんとしたるものなり。癲は一切の精神病患の總名とする後世の論、恐らく茲に胚胎するものならん。

醫林繩墨

愚按、手足動搖 而語言蹇澁者、謂之癲。

詈罵叫呼、而乘力奔走者、謂之狂。
不知人事、而行動失常者、謂之痴。
語言不出、而坐立默想者、謂之瘖。
不知飢飽、而語言錯亂者、謂之瘋。
又有不避親疎、而忽然出言壯厲者、謂之妄語。
寤寢呢喃、而自言心事者、謂之鄭聲。
閉目偶見鬼神、而心神不定者、謂之狐惑。
凡此數病皆由神志不定、作事恍惚。一時痰迷心竅、更加火熱鬱結、痰延壅盛、神思不安、卒然爲病者
焉。云々

第三の特質は

狂、癲、癩の各病證が、他の疾患と異り、多岐にして多様を極むるは、偏へに所謂五志、七情の纏
轉鬱抑、意の如く成らざるに據るとするを以て、五藏の司官、各々其掌るところの形態を按察し、而
して是の證候に對する藥物療法以外、別途に精神的治療法を發見加味せんと試みたる一點にあり。
東洋の醫學は、其發達の經路に於て、最初屢述せしが如く、固有の諸思想に基き、道途毎に多くの
陰陽血脈論等を展開せしめ、又收載せしめて今に及ぶ。故に單純なる補生の藥物以外、心理的療法の

考究を見しは、理の應に然るべき所にして、病狀を解註して、遂に一種の秘傳口授的偏狹を來せしものなきに非ずとするも、之を要するに、所謂精神療法の添加が、本來傳統の藥物研究上、大なる影響を與へ、而して更に其發達を促したるは殆ど疑ふべからざるものとす。

醫學正傳 引活套

朱震亨曰、五志之火、因七情而起、鬱而成痰。故爲癲癩狂妄之證、宜以人事制之。非藥石所能療也。云々

怒傷於肝者、爲狂爲癲、以憂勝之、以恐解之。
喜傷于心者、爲癲爲癩、以恐勝之、以怒解之。
憂勝于肺者、爲癩爲癲、以喜勝之、以怒解之。
思傷于脾者、爲癩爲癲爲狂、以怒勝之、以喜解之。
恐傷于腎者、爲癲爲癩、以思勝之、以憂解之。
驚傷于膽者、爲癲、以憂勝之、以恐解之。
悲傷于胞者、以癲、以恐勝之、以怒解之。
此法惟賢者能之耳。云々

古今醫統
治心風以五志誘之、然後藥之取效易。五志誘之者、如求利而遂病者、誘之金銀、或詐以惠之、或脆以遺之、而先定其心志、然後濟之以藥。是得治之要也。云々

第一標型

發病標型

顛倒。眼目引牽。口噤。手足相引。四肢搖擗。驚啼而後發作。眼視不明。口鼻乾燥。大小便不利。耳後青色。腰直目眇。青筋生。吐涎沫。渾身煩熱。頭上汗出。恒多驚愕。手足顛掉。夢中叫喚。目瞳子巨大。
一) 癲病忽然僵仆、而常昏。
二) 狂妄經久以漸、而常醒。

經過標型

平日能言、顛則沈默或呻吟。心常不樂。言辭顛動。舉動不經。目閉。目閉。

棄衣欲走。踰垣上屋。放歌高吟。好笑好悲。剛狂多疑。不食不飢。罵言不避親疎。不眠不臥。自高賢。自辨智。多怒。語有頭無尾。穢潔不知。嚼舌吐沫。知人之隱微。言人之禍福。謔語。目瞪不瞬。露裸無耻。噉食糞穢。坐溝渠。晝夜遊走。

治不治標型

強涼起如狂、及遺糞者難治。(肘後備急方)

癲疾、脈實堅者生。(病源候論、緊弦實牢者生)脈沈細小者死。

脈搏大滑者、久々自己。其脈沈小急。實不可治。

小堅急、亦不可療。(脈經)

脈浮大附陰者、癲疾、三部脈緊急者、可治。(病源候論)

至於目瞪如愚者、不可治。內經曰、神不守謂神亂也。(治病百法)

乍作乍醒者甦。不食迷癡者死。(世醫得效方)

循衣法者死。(丹溪心法)

久瀉不食、形脈無神者、不治。(活人心統)

癩乃重陰、狂乃重陽、浮洪吉兆、沈急亡殃。(瀕湖脈學)

病後發癩者不治、神脫目瞪如愚者、亦不治、發時遺尿者死。(證治彙補)

其脈急實及虛散者不治、細緩者雖久劇可治。(醫通)

癩痢、脈堅大而數者生、沈細者死。

譫語、脈洪大者生、厥逆而脈微者死。(仁齋直指方)

熱狂、脈實大生、沈小死。(永類鈴法)

第二標型

汎貫標型

發如死人、遺尿、食頃乃解。(外臺秘要方)

厥不知人、或作牛羊聲。(醫學六要)

省後或又復發、時作時止、而不休息。(醫學統旨)

將醒時、吐涎沫、醒後又復發、有連日發者、有一日三五發者。

仆時無聲。(證治準繩)

少刻即甦、毫不知發病之形狀。唯覺體倦、而神色痿頓。目無神色。(證治百問)

叫吼吐沫、食頃乃甦。(丹溪心法)

癩則醉時復甦、發過如故。(醫學原理)

第三標型

現象統轄標型

奔豚症型

奔豚病は素問其他の醫書に載する語、症狀としては小腹より咽喉に上衝して死せんと欲し、而して還り止まる形態を指し、豕の躍走するが如きを以て名づく。即ち無形の氣、神経系統の病的作用及び感受をなすを稱するもの、淺田栗園其著醫學智環に氣を論じて更に、氣衝、氣撞、撞悸、動悸、奔豚、客氣の六種目に分別したり、以て鑑念すべし。

巢氏が奔豚症に二症ありとし、一は驚恐奔豚、一は憂思奔豚となす。即ち怔忡憂愁以て現象の如此状態に至るを、一に躍動型となし統轄せんとする代表とするもの。

偏枯症型

靈樞刺節眞邪論、偏枯を稱して、虛邪偏へに身半に客たり、其深内に入る者、發して偏枯病となる云々とあり。病源候論、風痺を論じて、身體痛無く、四肢收まらず、神智亂れず、一臂不隨なる者、風痺也。云々。半身の氣に營運なく、不隨なれば痺、痺は即ち偏枯の邪氣深きもの、手足收まざるを痺といへば、風痺偏枯ともに同症なりとす。後世の醫家、風痺、偏枯自ら異らざるとするものあるも、之を要するに、半身の不隨を來して奔豚の如きと正反對たる現象を觀察して、以て、沈鬱の症を擧げしは疑ふべからざるところなり。

精神疾患を、浮沈、剛柔、升降、上下の二方面より觀測せしは、偶ま以て文献殘存の意志を付度するの目標ともなり得べきものたるを以て、茲に極端なる統轄標型を目して、東洋文献に臨まざるべからざるものと信ず。

精神病に關する名目の傳統に就て

一、醫書の翻刻及集成の一斑

本邦に於ける精神疾患、及び論理、病狀に關する日用名目は、古來多くは支那醫書の呼稱に従ひ且つ从似せるものにして、偶ま本邦醫人の適確なる造語を見るものあるも、其據由する處は亦傳統の概念を根底として基礎させるものに過ぎず、而も一般常套語と成りし根源は、悉く徳川期に於ける醫書の傳來が、極めて豐潤なりし一事に歸するも洵に可なりとなすべし。

今、此の概觀を試みんとするに際し、醫書の傳來及び本邦醫書の集成に關する參考資料として、最も一汎的に照見すべきもの、一に、幸嶋宗意の著たる「倭版書籍考」十卷あり。これ題名の示すが如く慶長より元祿年間に至る本邦印行の詳書を集録し、卷數及著者の略傳を明詳にし、各書の梗概を記述したるものにして、分類十一門、七百五十七種を總括したる内、其卷之五に醫書の部を掲げたり。素問次註廿四卷を首とし、醫工入式四卷に終る。九十八種の倭版書目を列載したり。李時珍が本草綱目五十二卷の如きは、もと純理論的醫書にあらずとすも、本草の原據としては以て醫人の寶典に屬し、殊に卷末に寄經八脈考一卷、脈學一卷ありて、脈學の末に、月池翁刪補の四言舉要、脈訣考證を附載す。これ即ち同じく醫書の部門に列擧せる所以にして、他の方劑關係の本草書類も併せてこれに則由

するを得べし。

『倭版書籍考』 卷之五

醫書之部

素問次註 二十四卷、唐の肅宗の時、太僕令王冰錯簡を改め、篇目を正し次註を作れり、宋の高保衡、林億、孫兆、改正改誤す。

内經註證發微 十八本あり、素問の註證發微九卷、靈樞註證發微九卷、合て内經註證發微云、大明萬曆年中儒醫馬玄臺十年の功を経て作れる書なり、馬氏名蒔、字は仲化、玄臺は表德號なり、内經は萬歲醫家の祖宗と云ごも、唐王冰以後馬氏が註に越たる訓釋なし、ここに靈樞に馬氏始て註せり、誠に醫門に功ある人なり、和點に誤あり。

難經本義 上下二卷、元の儒醫滑伯仁作なり、難經諸註の冠たり。慶長十二年延壽院東井玄朔先生の門人道救校刻の本に、東井翁の跋あり、倭版の本これを始ごす。寛永六年東井翁の高弟壽德院玄昌法印の作に捷經四卷あり、慶安年中壽陽軒法眼中江玄節作の摭遺十卷あり、玄節字貞竹洛陽西洞院に居れり、中江玄昌養父なり。

脈經 西晋の太醫令王叔和作なり、素問に基き、扁鵲、仲景、華佗等の説を擧て作れり、宋の林億、高保衡等校正本なり。醫家の一經要ご沙汰したる書なり、序目一本、圖說二本を附す、合部十本あり。

新校正甲乙經 十二卷あり、晋の皇甫謐作なり、針灸經絡を沙汰したる書なり。

中藏經 八卷四本あり、魏の明醫華佗の作と云傳たり、古書なり、論あり、方あり、此書の由來、華佗の外孫鄧處中が序に詳なり、又、古今醫統、續醫說にこの書の沙汰あり、考ふべし、點者洛陽小原正庵なり。

病源候論 五十卷十一本あり、この内總目錄一本あり、隋の大醫博士巢元方、煬帝の命を受けて作れり、廣く諸病の證候を論じたる書なり、仲景の傷寒論につゞきての古書なり、病論の末に針灸湯熨の沙汰詳に記せり。

千金方 九十三卷あり、唐の孫思邈の作なり、孫氏の本傳には千金方三十卷、千金翼方三十卷あり、今の本九十三卷あり、宋の名臣高保衡、孫奇、林億等林正本なり、古名方あり、醫論あり、針灸養生の論あり、日本に醫書の渡るは千金方を初ごすと聞えたり、卷首の醫學諸論、後世醫門の龜鑑なり。

仲景全書 傷寒論十卷、金匱要略上中下三卷、傷寒類證上中下、合て十二本あり、三書合刻し傷寒全書と名くるは、萬曆年中海虞の趙開美なり、傷寒論は諸家の評註を附す、少々發明あり。

和劑局方 十卷あり、總目一卷通計十本なり、宋の徽宗大觀の比、官醫裴宗元、陳師文、惠民局に傳は

る古方を集め成書ごなし、献上したる書なり。其後嘉定年中大醫助教の許洪、藥方を増校し、和劑指南總論三卷を作れり、總論倭本の局方に不附之。

東垣十書 二十本あり、脈訣一卷、宋の崔紫虛作、辨惑論二卷、東垣自序あり、脾胃論四卷、文人元遺山の序文あり、門人羅天益の後序あり、蘭室秘藏六卷、東垣作、羅天益序あり、湯液本草六卷、東垣の弟子王海藏作、此事難知二卷、李東垣の旨を述べて王海藏論あり、傷寒論の末疏なり、格致餘論一卷一本、丹溪の作なり、宋景濂の序あり。局方發揮一卷一本丹溪の作なり、澠泗集一卷、丹溪の弟子王安道の作なり、安道博學の人なり、外科精義四卷、御醫齊徳の作なり、右の十種論者別なれ共、其淵源東垣に出るにより、東垣十書と號す、此書大明洪武皇帝第十四の皇子遼王、自分の領國にて版行し、世にひろつたり、倭本の十書に古版あり、新版あり、新版は王肯堂訂正本なり、洛陽復性庵瀧野元敬倭訓を加へ、壽文書堂武村氏版行す。

醫學正傳 八卷あり、大明正徳年中垣徳老人虞搏、字は天民の作なり、天民代々丹溪流の醫なり、天民の傳金華府志に出たり、詩文も上手ごあり、此書年輪八句に及て作れる書なり、始の和點は延壽院玄朔法印に出たり、古本には蔣侍御の序、莆田史梧の跋あり、元和中京都平樂書堂村上氏新刊、正傳の或間を拔出し、世醫の講習に便するは一溪の所爲ご聞えたり。

醫學入門 七卷あり、大明萬曆年中南豐の健齋李挺、四年の工夫を経て編纂す、醫門最要の書なり、此書の作者醫道の本意を知りたる人にて、一時聞達の世醫ごはかりたる人なり。

類經 三十二卷、十二類に分つ。後に圖翼十一卷、附翼四卷を附す、總計四十本あり、大明天啓年中會稽の張介賓作なり、内經の本文類を聚て注釋す、千古の玄秘を闡けり、三十年の功を経て成就す、附翼の諸説は易學の羽翼、儒門の秘要を辨す、點者洛陽鶴飼石齋。

本草綱目 五十二卷あり、卷末に寄經八脈考一卷、脈學一卷あり、脈學の末に月池翁刪補の四言舉要、脈訣考證を附す、共に大明湖廣道蘄州の李時珍作なり、時珍、字は東璧、瀕湖と號す、父を李言聞と云、子を李建元と云、代々儒者にて醫道に精しき人なり、時珍は醫業を専門ごしたる人にてはなし、文林郎に封ぜられ、蜀の蓬溪縣の知縣になりたる博識廣覽の人なり、此書嘉靖の末より萬曆の初に至りて、三十年計の功を積て成れる書なり、十六部を立て綱ごし、六十類を出して目ごす、朱文公の通鑑綱目に擬して作れり、九流に涉り百家に達したる希世の好書なり、李建元上書して萬曆帝の御覽に入れり、蕭萬興と云人、時珍を神農以後一人と褒めたり、倭點半井家の門人、駒井桂庵に始り、儒醫野間三竹點あり、儒醫江村宗珉點あり、江西本、南京本俱に誤聞多し。

醫學綱目 四十卷、大明婁英字は全善李なり、病門に正門枝門を分ち、大綱衆目をあらはせり、藥方針灸運氣全備の書なり。

赤水玄珠 三十六卷、病門を標し、藥方を著す、外に序目一卷、玄珠醫案九卷、醫案序目一卷、醫案に附く醫旨緒餘四卷、是は醫論なり、都計五十一本あり、萬曆年中孫一奎作なり、古之醫爲人、今之醫爲己と云名言を云る人なり、又格致余論の相火論は、丹溪の作にてはあるまじきと云り凌迪知

以下諸名士二十人計の閲校したる書なり。

古今醫統 百卷あり、大明嘉靖年中新安の儒醫徐春甫作なり、藥方醫論都て醫家に係りたる事、多は採り載せたり、醫家の大成を集めたる書なり。

玉機微義 五十卷あり、大明洪武年中劉純字宗厚作なり、此書本徐夔純が手に出で、劉宗厚類集増益大成す、劉宗原の父榻泉翁、名は叔淵、丹溪の弟子なり、劉宗原代に醫名大に著るこなり、此書醫論方法大に備はれり、考據議論精密詳備なる書なり。

醫林集要 十卷二十本あり、大明正德年中孤竹の王璽の作なり、古方を多く載す、毎門針灸道引の沙汰もあり、王氏は一方の都督になりたるほどの武將にて、醫道に達したる歴々の官人なり、醫を業こしたる人にてはなし。

醫書大全 二十四卷あり、熊宗立の作なり、宗立は宋の名儒熊勿軒の末にて儒醫なり、是書孫充賢の醫方大成に増益したる書なり、日本にて醫書を版行するは、此書を始とすこ聞えたり、古名方を集めたる書なり、大永八年建仁寺月丹の跋あり。

軒岐救正論 六卷あり、十二本に分つ、大明崇禎の時分、福州の肅京字は萬輿と云明醫の作なり、萬輿の師は本草綱目の作者李時珍の甥孫胡慎庵なり、種々發明あり、好書なり、又傷寒醫案の末に、泉州の莊隱風が醫案二本を附す、莊氏名應蕙、字汝元、醫業を薛醫院の末孫に傳へたり、是も明醫なり、萬輿の知音なり、萬輿王肯堂の癆證の治法を難じたる論あり、徐應秋と云もの、萬輿を薛立

齋の功臣張景岳の益友と云り、唐本に萬震序あり、倭版になし、萬震は萬輿の子なり、倭版の卷次に誤あり。

丹谿纂要 六卷あり、盧和廉父の作也、編者の父庸醫の手に死したる事を痛み、丹溪の書を集むこ自序に見えたり、丹溪の藥方備檢に便りある方法を集めたり。

傷寒六書 六卷五册あり、大明杭州の明醫陶節庵の作なり、張景岳の語に傷寒用藥之、善須遜節庵と云り、節庵名は華、字は尙文、大明正純の天子召出ると云ごも、辭して不仕人なり、六書、陶氏家秘、明理續論、傷寒瑣言、殺車槌方、一提金棧、江綱と次第す。

難經俗解 六卷あり、大明正統年中、建州熊宗立の作なり、宗立は子なり、諱を均と云、道軒と號す、宋の熊勿軒の子孫にて、醫卜を窺たる人なり、日本天文五年越前の太守日下宗淳の命を受、一柏老人句續文字を校正し版行す、其版を越前高尾寺に置く、日本にて醫書の版行は醫書大全、次に此書なりと聞えたり。

鍼灸聚英 八卷あり、大明嘉靖年中、四明の明醫高武作なり、針灸を詳に論ぜり、徐春甫も高武針灸に功ある者と云り。

萬病回春 八卷あり、萬曆年中龔廷賢の作なり。

種杏仙方 四卷なり、龔雲林の作なり、病門を分ち單方を擧たり、何出圖序あり、何出光作の雲林像贊卷首に出す。

魯府禁方 四卷あり、龔雲林の作なり、雲林魯王の妃の鼓脹を治し、醫林狀元の號を得られて後、魯府の秘方と雲林の家方を集めたる書なり、萬曆二十二年魯王の序あり。

壽世保元 十卷あり、龔雲林の作なり。

濟世全書 八卷、雲林晩年の作なり、萬曆四十四年の自序あり、雲林醫書七種は倭版に版行す、崔鎮峯が詩、張壽朋が文に、雲林編著の醫書八種あり、雲林一生の行狀此書の末に載る諸名公の詩文に詳なり。

薛氏十六種 第一婦人良方二十四卷、宋の陳自明編集、薛氏補註、第二保嬰撮要二十卷、薛鑑編集、鑑字は良武、薛氏の父なり、薛氏治驗を附す、第三明醫雜著六卷、王節齋編著、薛氏附註、第四外科精要三卷、宋の陳自明編集、薛氏附註、第五外科樞要四卷、薛氏編著、第六小兒直訣四卷、宋錢仲陽弟子閻孝忠編、薛鑑註、第七原機啓微二卷、薛氏編著、眼目の書なり、第八內科摘要二卷、薛氏編著、第九女科撮要二卷同上、第十癘瘍機要三卷同上、癘風の類證等を論じ藥方を附す。第十一正體類要二卷同上、外科の書金瘡の事を細に論ず、第十二小兒痘疹方一卷同上、第十三保嬰粹要一卷同上、第十四口齒類要一卷同上、第十五保嬰金鏡錄二卷同上、小兒の發斑丹毒を論ぜり、第十六傷寒金鏡錄一卷同上、傷寒の證、舌胎三十六の圖を出し詳に論ぜり。

右十六種に難經二卷、十四經發揮二卷、本草發揮四卷、平治會華三卷、傷寒鈴法一卷、外科經驗方一卷、右八部を加て薛氏二十四種と名く、二十四種末倭版に無之、薛氏名は己、字は新甫、立齋と

號す、醫の十二科に達したる無雙の明醫にて、大明嘉靖の初太醫院使に成たる人、太醫院使は日本典藥頭なり。

證治準繩 五十四卷、大明萬曆の末王肯堂撰之、雜病、傷寒、女科、幼科、外科の五科を立たり。

醫說 十卷あり、宋の張果作なり、續醫院十卷四本あり、明の俞辨作なり、共に發明多し、類を分て醫門に係りたる事を論著す。

肯綮大成 十六卷あり、萬曆年中余應奎作なり、正傳に補遺頭書を加へたる書なり。

難經集註 五卷あり、宋の翰林醫官王惟一、吳の呂廣、唐の楊玄操、宋の虞庶丁德用が註を集め、訂正を加へたる書也。

薛氏醫案 附方一卷、加て共に八卷あり、崇禎年中黃閣齋作なり、薛醫院內科諸書の中より、病門を分て醫案を類聚し、各條に評註を加へたり、簡要の書なり。

名醫類按 十二卷、大明嘉靖年中、新安の江瓘作なり、江氏死後其二子江應元、其子江應宿、補遺考訂して全書となす、百家の書に載する古今の醫案を採り、門を分て類聚す、江瓘字民瑩、篁南子と號す、博識なる隱醫なり、應宿も良醫なり、倭點に誤多し。

十四經發揮 三卷あり、元の滑伯仁の作、十二經絡に任督二經を加、奇經八脈を論ぜり、內經以下名家の書を採り、經絡流註交際を詳論せり、圖章あり、訓釋あり韻語あり、醫道の神秘を盡せる書とほめたり、薛鑑字は良武校刊す、良武は薛立齋の父なり、宋景濂呂滄州の序あり。

錢氏小兒直訣 四卷あり、宋の明醫錢仲陽の旨を述て、門人閻孝忠作れり、本書に薛鎧校註ごあれども、薛立齋の序には其沙汰なし、毎條に立齋の治驗を附す。

醫方考 六卷、脈語上下一本を附し、合て七本、萬曆年中新安儒醫吳崑編めり、發明あり、近世の好書也。

萬氏家鈔 全七卷あり、六卷は萬表作、萬表は武官の歴々、醫を好みたる人佛者なり、七卷ご藥性論は、萬表の孫萬邦作なり、萬表の行實、龍溪文集に見えたり、二人共に醫術を好みて、醫業を家職にする人にはあらず。

內經知要 十卷あり、李中梓作內經の拔書なり。

達生錄 二卷あり、萬曆年中堵胤昌が作なり、養生の説食物の沙汰あり、

鷹鶴方 一卷あり、星山李燭作なり、李燭は高麗の人ご見えたり、首に魏彦深が鷹賦二首をのせたり、鷹にかゝりたる事、藥方等を集めたり。

醫家必要 一卷、明の戸部尙書孫應奎の作なり、常用藥方に加減を書加へたり、隨身の用によし。

資生經 七卷あり、宋の王執中作なり、針灸經路を論じて後學に便りある書なり。

黃帝明堂灸經 上中下三卷、下卷は小兒明堂なり、是は元の寶桂芳附之、明堂灸經は宋の太宗の大平聖惠方百卷あり、この百卷の中に附載するを拔出すご云り、編者分明ならず、桂芳は寶傑字漢卿の子なり、父子共に外科灸に精き人なり、此書に倭字諺解あり、寶傑より別に寶漢卿あり、此人も外科を

業ごすご云り。

明醫雜著 一卷、王節齋の作、醫論あり、藥方あり、丹溪痘疹治法あり、少議すべき説もあれごも好書なり、節齋名は綸、字は汝言、其傳寧波府志に詳なり。

醫學原理 十三卷あり、大明石山居士汪機作なり、石山代々明醫家也、丹溪を宗ごす。此書病論あり、脈論あり、治法あり、一方々々の下に藥性の論あり、卷首に經絡の沙汰あり。

耀仙活人心法 三卷あり、仙術修養の説、靈秘の藥方を擧たり、耀仙を涵虛子ご云、皇明太祖の皇子なり、仙術を好みたる人也。

脈訣刊誤 二卷あり、元の儒者戴同父の脈訣の誤を正したる書なり。吳草盧の序あり、朱楓山節鈔す、名人の手に入たる書なり、末に汪石山附録あり、古版になし。

趙氏醫貫 六卷あり、大明の末趙獻可作なり、病門あり、藥方あり、少々發明の説あり、末に窮卿便方一卷、陰九峯が醫貫奇方一卷を附せり。

傷寒明理論 三卷あり、末に方論一卷を附す、金の儒醫成無己の作なり、傷寒論を發明せり、成無己は仲景の忠臣ご稱したる人なり、仲景百二十方の内醫門常用の二十方を論ぜり。

醫方大成論 一卷あり、元の孫允賢、宋の陳氏が三因方、嚴氏が濟生方を採り、醫方集成を作る、熊宗立が先祖彥明公集成に増績して醫方大成ご名く、其後大明の熊宗立名方を増して醫書大全を作る、大全には大成には無之論もあり、今の大成論は大全の論なり、日本にて大全より前に大成の論を抜

て版行し、初學にたよりす、大全渡りて後又大全の論を卷末に書加へ、舊名を用ひ大成論と唱へたるを聞えたり、越前一柏の鈔始め吉田意庵の鈔あり。

神農本草經疏 三十卷、明の天啓年中謬希聖作なり。

小青囊 十卷、天啓年中王良璣が作なり、古名方を出し、種々の加減を書加たる書なり。

救急易方 上下二卷あり、大明弘治年中張約齋が作なり、種々妙薬を集めたり。

婦人産帶論 一卷あり、陳朝塔が作奚囊便方より拔出せり、妊婦に帶をさする論なり。

願生微論 四卷あり、毎卷上下に分つ、大明崇禎の末、松江府の李中梓字は士材と云人の作なり、方

論あり、脈論あり、藥性を辨じ、醫案を載せたり、少々發明もあり、李中梓は時の名臣にして、醫

に精き人なり、專醫を業として身を立る人にてはなし、三教の沙汰をして、畢竟妙處は禪宗にわり

と云たる人なり、黃檗隱元の師費隱に歸依して、費隱の五燈嚴統を版行したる人なり。朱丹谿の滋

陰蜂火の説は、東垣の未備を補ふ、後人丹谿の旨に達せずして、偏に寒涼損眞と心得たるは、丹谿

の誤にてはなし、善く丹谿の旨を學ばざる人の誤なりと云り。

産寶百問 五卷あり、産前後後方論あり、編者分明ならず。

醫略正誤 上下二卷あり、大明嘉靖年中、儒醫李象作なり、上編は雜病方論の誤を訂し、下卷は小兒

方論に係る、李象、石泉子と號す、盧廉夫の弟子なり、盧廉夫は丹谿を慕たる醫なり。

全幼心鑑 十六卷、大明成化年中に、全幼堂主人冠平字は衡美、王肯堂は駁難なる書と議すれども、

實は好書なり、前大醫全道三玄淵の跋あり、江戸の小兒醫吉田氏門人大野壽庵加倭訓。

雷公炮製藥性解 六卷、明の末季中梓作也、東垣の旨を本として作れり、發明あり。

神應經 一卷あり、大明第二主仁宗の洪熙元年の比出來たる書なり、但當時の王子と醫士劉瑾が手を

經たる書と見えたり、劉瑾が師に宏綱先生陳會字は善同と云て、針灸に精しき人あり、其人の作に

廣受書十卷あり、此神應經は其内より要穴を拔出し、病證を加へ、一卷につめたる物なり、針道

灸法に便りある書なり、日本刊本には卷首に、昔日本の兩名醫和氣氏、丹波氏腫物を治する八處の

灸法を載せたり、此書朝鮮の韓繼禧が神應經の序にも出たり。成化九年十月に日本畠山殿より朝鮮

に使者を遣す。其時の副使沙門良心と云者、神應經を持參して朝鮮國王に献上し、且又日本の神醫

和氣氏丹波氏癰疽を治する八穴の法を傳ふ、因て件の灸法を神應經の末に入れて版行すと記したり、

倭本に彼灸法を卷首に置は、作者の本意にあらず、成化九年は日本後土御門院文明五年に當る、此

時の公方は常徳院義尚公なり、東山殿義政公も在世也、畠山殿は首領修理太夫義統なるべし、良心

は信濃の人なり、此僧世にしる人なし。又神醫和丹二氏は良心より二百年以前の人とあり。

嬰童百問 十卷あり、編者分明ならず、正徳年中王雲鳳序のあり、又王肯堂序もあり、論は病源論に

本けり、古方多き書なり。

明醫指掌 前集十卷六本あり、嘉靖年中儒醫皇甫中の中作なり、子五人あり、三人は儒者、二人は醫者なり、此書させる發明もなければども、手近かによき書なり。

醫門法律 六卷あり、倭版十五本に分つ、大清順治年中に喻昌字嘉言云名醫の作なり、法は療治の法なり、律は醫者療治を誤りたる罪を沙汰す云義なり、尤藥方もあり、見所ある書なり。

證治要訣 十二卷あり、丹谿の高弟戴原禮の作なり、原禮永樂年中大醫院使になりたる人なり、點者今の吉田意庵。

外科正宗 四卷あり、萬曆の末に陳實功作なり、外科最要の書なり、廣く病門を出し、醫按を附し、細に病證を論ず、此書の作者家富める徳人と聞えたり。

儒醫精要 一卷あり、大明嘉靖の初、敬齋の趙繼宗作なり、少々發明なる論も有之、然れども執滯穿鑿なる事多きと見えたり。

泰定養生主論 一卷、倭本上中下に分つ。元の王中陽作、中陽名は珪、字は均章、吳郡の虞山に二十年かくれ、醫の術をよくし、仙道を學び、又佛教をも慕ひたる人なり、此書専ら養生の説を述べ、病論運氣等の沙汰あり、後に類方あり、今倭本には藥方を略せり、痰飲の一條を述べて發明あり、元

泰定中に起草す、因て泰定二字を置く云り、全部は十六卷の書なり。

奇效醫述 上下二卷、痘疹活幼心法上下二卷、二部一套にして合刻す、萬曆年中寧化知縣の薛尙恒作なり。種々發明あり。

保赤全書 上下二卷、萬曆中管樞作なり、痘疹の方論詳備なる書なり。

醫讀 七卷あり、汪石山作なり、醫學原理に似たる書なり、原芸庵訓點。

醫學六要 四十一卷あり、萬曆年中張三錫作なり、四診、病機、治法、經絡、運氣、本草の六門を舉

たり、三錫字は叔承、別號嗣泉。

本草約言 四卷あり、大明薛醫院の作なりと見えたり。

本草原始附雷公炮製 十二卷、雍丘李中立纂輯す。

醫術 六卷あり、大清の順治年中、新安の洪正立編めり、萬病回春に本ける書と見えたり。

醫家必讀 十卷あり、李中梓作也、醫論あり、脈論あり、本草あり、病門あり、藥方あり。

徐氏針灸大全 六卷あり、大明萬曆年中徐鳳作なり、徐鳳字を廷瑞と云。

診家樞要 一卷あり、元の儒醫滑伯仁の作なり、諸脈書の内にて簡要の好書なり、卷末に朱伯賢作の伯仁の傳等載せたり。

眼科全書 六卷あり、大明の眼科袁學淵作なり、好書なり。

新編集成馬醫方附牛醫方 俱に一卷なり、倭本の卷次誤れり、大明の初高麗の左政丞趙浚、右政丞金士衡、權仲和、韓尙敬等が作也、倭本の標名馬經大全とあり、訛り。

馬經大全 八冊あり、朝鮮人の作なり、編者の名なし、又參補馬經大全あり、是は倭本になし。

醫宗粹言 十四卷あり、大明萬曆の末羅周彦編輯の書なり。

白文入門 六本あり、元和年中大坂見宜堂主人正温方註を除き、誦讀に便りする爲に作れり、羅山道春の跋あり。

啓迪集 八卷あり、一溪先生の作なり、天龍寺策彦の序あり、正親町院御覽に入れり。

延壽撮要 一卷あり、延壽院玄朔先生の作、養生の要語を集めたり、後陽成院の御覽に入れり。

延壽類要 一卷五篇あり、養性の沙汰、食物の性味を著せり、康正年中東山殿の時代に竹田昭慶法印作なり、此書に鯛は性冷と云り、何の書如何なる説にもごづかれての義か、不審なり。

十四經發揮鈔 十卷あり、攝州昌安齋玄仙作なり、玄仙は高野山の就安齋玄幽弟子也。西村李齋序あり。

食醫要編 一卷あり、深草の僧元政作なり、僧門食物性味を論ぜり。

方書摘要 五卷あり、常州水戸の醫人小川宗本編集す。病門を分ち要方を採れり。

和名集 二冊あり、伊呂波の類字を以藥種の和名製法を記す、元和年中吉田意庵宗達作と聞えたり。

宗達は意庵宗恂法眼の子なり。

切紙 一卷あり、四十門に分てり、吉道三の作にて、初學捷經の書也。

運氣論口義附得助圖 五卷、洛陽の回生庵可敬玄璞作なり、可敬は玄朔の弟子、得助圖は壽命徳岩法

印の作と聞えたり。

宜禁本草 上下二卷あり、古道三一溪先生壯歳の時作れり。

醫工入式 四卷あり、江戸土岐長元編めり。

即ち醫書繙刻と醫書集成の旺盛とは、本邦に於ける傳來醫術の繁衍と考覈との汎濫を指示するもの

にして、前掲の參考資料以外、更に夥しき巨細大小の醫書の流行を見たるは、言を須ひず、かくして病狀に關する傳來語が、上下の常套語となりし第一の趨勢を形成したるものなり。

名目の傳統は、別に名目に關する研究文獻に觀ざるを得ず、經驗を疊み療法を累ねては、古來の名目に對する疑念を表明せんとするは時の常なりとす。茲に展開綜合の機を芽すべき勢運を示す。即ち主として精神病理に關する名目に於て然りとす。精神疾患の病狀は多岐にして復雜、靜穩にして強兇機朕の微妙なる、まことに一を以て律すべからずとし、本邦傳統の名目の範疇に収むべからざるを患ひ、同名目の廣汎なる字義すらも敢て當中せざることあるを憂へて、或は悉く據らずとし、或は過多なる名目を縮歴して、僅に常套の三四に歸納せんと試みたるもあり。茲に於て精神疾患の標型は、屢々口誦傳統の名目を打破して新たなる面目を樹立普及せんとする境界に到達したり。これ實に第二の開展を期すべき勢運たるに屬す。

二、精神疾患の名目

支那に於て造語せられたる精神疾病の名目は、多端悉く集約すべきにあらず、字義の異同と形象の變化に依りて、遂に其呼稱に及ぶ變轉を來したるものなり。語義の強弱、語感の厚薄、古來の文獻に収載せられしものに在ては、單純なる想察を允さざる種類多く、斯くて沿革史的研究が一時醫人の間

に擦頭し、今に延引繼續せるは、これ決して冗漫なる好奇心のみ斷じ得ざる結果といふべし。一端の癩疾、狂病、癩病、其他の精神病を目標せざる字音語義に關しても、實に驚嘆すべき豊潤なる文語を案出したたり。直ちに是れを採りて、以て處理するの要は今に於て焦眉とは謂ふべからざるも、本邦精神病名の傳統を按ずる必要上、亦見逃すべからざる重要事となすべきならん。即ち茲に丹波元簡著すところの「病名沿革考」を挙げ、本邦普汎の名目に關する根底を知り、亞で些しく病名造語に對する考量を試みんこす。

『病名沿革 攷』

丹波 元簡 廉夫

顛疾。素問奇病論。吳注改作癩。○癩說文狂也。

胎病。同上。

厥顛疾。脈要精微論。

顛疾。五藏生成篇、邪氣臟府病形篇。

狂顛。漢書藝文志。狂顛病方十七卷。

風癩。病源候論。

癩。戰國策。癩而殫悶。旄不知人。

發癩。舉痛論。石藥發癩。

風眩悶瞀。資生經。徐嗣伯云、痰熱想惑、而動風、風心相亂、則悶瞀、故謂之風眩悶瞀、大人曰癩、小兒曰癩。按旄瞀通用、而老耄之耄、亦同、周禮秋官司刺再赦曰老旄。孟子旄倪男女。

瞀疾。莊子、余有瞀疾。

顛昫。楊氏方言。

眠眩。同上。

風眩。後漢書。陰興傳、帝風眩疾甚。

眩瞀。韋義傳眩瞀滯疾、不甚久持。

癩眩。千金方。金匱要略、水氣可考。

癩風。丹溪心風附錄。

邪病。辨疑錄。癩癩之病、謂之邪病。

昏厥。五常政大論可考。

羊兒風。萬氏家抄（五下○羊兒風癩癩也。舜水談綺可考。）

眞病。醫方大成云、心經有損、是爲眞病。

五癩。病源候論、陽顛、陰顛、風癩、濕癩、馬癩、外臺秘要方引古今錄驗。雄黃丸、主治牛癩、馬癩、狗癩、羊癩、鷄癩。

五癩。產寶百問、陰癩、陽癩、溫癩、風癩、勞癩。按王肯堂辨癩狂癩、今細察其說。所謂癩者即狂也。所謂狂者、狂中之一證也。所謂癩者即癩也。蓋不深考千古之弊也。

狂疾。癩疾。
五十九難曰、狂癩之病、何以別之、然狂疾之始發、少臥而不飢、自高賢也。自倨貴也。妄笑好歌樂、妄行不休、是也。癩疾如發、意不樂、僵仆直視、是也。

風癩。病源候論云、為風邪為傷、故邪入於陰、則為癩疾。
內經。說文獬犬也。玉篇癩癡也。韓子曰、心不能審得失之地謂之狂。○史記箕子被髮而狂。書經

多方惟聖、罔念作狂、惟狂克念作聖。

發狂。老子馳騁田獵、令人發狂。

狂妄。本神篇。

狂越。至真要大論。

狂且。毛詩不見子都。乃見狂且。

狂易。神農本經、螭蜋條、大人癩疾狂易。

狂易病。漢書外戚傳、中山小王素有狂易病注狂易者、狂而變易常性也。

狂陽。本草綱目、螭蜋主治引本經癩疾狂陽按本經作狂易。

風狂。外臺秘要方、引深師竹瀝湯、病源候論可考。

狂風。千金方。

狂狷。論語。

狂簡。同上。

楚狂。同上。

失心。外臺秘要方引廣濟方。

喪心。左傳。前五行志。肘後方。

失志。千金方又元出素問評熱病論。

失心風。證治準繩云、癩病俗呼為失心風。秘方集驗作失心風。

心風。證治要訣、心風有顛之意、不如顛之甚。宋魏泰東軒筆錄云、王介性輕率語言無倫、時人以爲

心風。

怒狂。病能論。

陽厥。同上。

亡魂。千金方。

氣心風。濟生全書云、治氣心風、即是痰迷心竅、發狂作亂。

心恙。冰類鈴方顛狂門、治心恙一醉散。

心疾。左傳、子反疲奔命、遇心疾而卒。孫光憲北夢瑣言云、唐世崇劉崇、弟兄五人、其元昆崇彝

思春病 石天基傳家寶云、其帝時宮人多得思春病、黃瘦不堪。
懷春病 堅瓠集、同文。

狐惑

春秋、秦穆伐晉、筮之吉。曰、獲其雄狐。釋者曰、夫狐蠱必其君也。狐草行草止潛上伏不越。

度阡陌(多識篇引)

○說文師曠云、狐性淫、善為媚惑人故稱狐媚。

○南都賦、侍者蠱媚。劉良注、蠱媚善容儀也。

應聲病 唐劉餗隋唐嘉話。

應聲蟲 方勺泊宅編、(芳恂益北山醫話詳論及于此。今不贅焉)

健忘

王叔和脈經。太冲云、以其人壯健當不忘、而喜多忘目前之事、故稱健忘、此不然矣。

簡按、健猶多也。喜也。善也。好也。類書纂要健訟注好訟也。可為確證。醫林繩墨云、健者

建也。如建立其事。隨即遺忘也。此不透之解也。

善忘 內經。史記河渠書岸善崩注云、詩云女子善懷。善猶多也。

喜忘 病源候論。

病忘 列子穆王篇、宋陽里子中年病忘。朝取而夕忘。夕與而朝忘云々、謁醫而攻之。弗已。

驚駭 生氣通天論。

善驚 厥論。

驚氣 名醫別錄藥本經。

驚悸 神農本經。

驚怖 金匱要略。

心驚膽寒 三因方云、驚悸名曰心驚膽寒。

驚癇 傷寒論太陽篇、如驚癇。

癇驚 通評虛實論。

驚恚 至真要大論。

風癇 脈經卷二、大人癲、小兒風癇矣。

癇。

靈樞、唐椿云、癇音間、凡驚搖皆曰癇、神巧萬全方云、癲者精神不守、言語錯亂、甚則登高罵
詈、或至狂走、癲者發則仆地、嚼舌吐沫、手足搖擗、或作六畜之聲、頃刻即蘇。按癲之混狂、蓋

始見于此。(醫方類聚)
玉篇癩小兒癩也、病源候論云、癩者小兒病也。十歲已上為癩、十歲為癩。王符潜夫論貴忠篇云、嬰兒常病、傷於飽也。貴臣常禍、傷於寵也。父母常失、在不能已於媚子。人君常過、在不能已於驕贈臣、哺乳太多、則必擊縱而生癩、貴富太盛、則必驕佚而生過。簡云癩狂之辨見于前、而癩一病、斷然係于小兒得數症甚確矣。太冲著行餘醫言、概癩狂于癩之一疾、甚無謂矣。余別詳論之。

肝癩 千金方。

犬癩 千金方。小兒直訣云、其聲如犬、證屬肝也。風癩、俗名犬癩肝症也。

心癩 千金方。

羊癩 千金方。錢云其聲如羊、證屬心也。馮兆張云、驚癩俗名羊癩、心證也。別錄羊齒主治。

羊癩風

羊兒風 六要。

鷄癩 鳳凰臺主治、六畜五癩一羊癩同。錢云其聲如鷄。其證屬肺也。

癩疾

風癩 外臺秘要方、病源候論、大人病門、天風癩。

癩眩 寒熱病篇。

癩厥 大奇論。

癩瘰 同上。

豬圈風 心印紺珠云、俗言豬圈風。

發豬 發鷄風 證治要訣云、五癩俗止名為發豬癩疾、發鷄風。

馬風病 救急易方、諸風癩、俗呼馬風病。

癩 唐椿原病集云、音閔、癩病。

鷄瓜風

馬癩 其病發心經、羊癩其病生脾經、鷄癩其病生胃經、豬癩其病生腎經、牛癩其病生肺經、錢氏

五癩無馬癩、三因方以五獸、癩有馬無犬、藏有胃無肝、劉純玉機微義駁之、是。

脾癩 千金方。

牛癩、千金方。錢云其聲如牛、證屬脾也。食癩俗名牛癩、脾症也。

腎癩 千金方。

豬癩 千金方。錢云其聲如猪、證屬腎也。

尸癩 俗名猪癩、腎症也。

驚癩 見本經傷寒論。

風。癇。見病源候論。
食。癇。千金方。
癇。癇。即其總稱、何概為肺癇歟。可疑。
陰。癇。病源候論。

驚。風。三因方云、小兒發癇、俗云驚風、張果醫說卷中

慢。驚。風。小兒直訣方、活幼心法云、古謂之陰癇。

天。吊。風。丹溪心法云、俗謂之天吊風。

虛。風。續易簡方、慢驚一名虛風。

慢。脾。風。續易簡方云、慢驚一名虛風。一名慢驚風、活幼心法云、有所謂慢脾風者、即慢驚失治者耳。其實難大分別。不必別立治法、或慢脾風。為慢驚損脾之證、可考。小兒發癇、俗云驚風、

有陰陽證

慢。風。保金全集云、世所謂慢風難療者、慢脾風是也。

陽。癇。病源候論急驚風。小兒直訣。活幼心法云、古謂之陽癇。

資生經云、古人驚風非風也。古人謂之陰陽癇、猶傷寒之有陰陽證也。本事方云、陽癇者、俗所謂急驚也。陰癇者、俗所謂慢驚也。

食。癇。王執中云、慢脾風即食癇、食癇見三因方。

鬱。胃。

(可考)氣交變大、朦昧、至真要大論、及金匱要論(婦人)、名醫類案、十一、鬱胃即暈。醫燈續焰鬱胃即今所謂血暈也。醫林集要鬱胃鬱結為氣不舒、胃為昏胃而神不清也。世俗謂之昏迷是也。

血。厥。本草綱目白薇附方、詳引之本事方。

血。迷。儒門事親。

仇遠俾史云、奉化陸嚴以醫術行干時。新昌徐氏婦病、產後暴(後暴李時珍本草綱目作運已)死。但胸膈微熱陸診之曰、此血悶也。用紅花數十斤、以大鍋煮之。候湯沸以木桶盛湯、將藉病者寢其上薰之。湯氣微、復進之、有頃婦人指動、半日遂甦。按亦見養荷漫筆、此即血厥、但治術奇耳。

血。暈。

三因方引郭稽中產科保慶集云、產後血暈者何。答曰、產後氣血暴虛、未得安寧、血隨氣上迷、亂心神、故眼前生花、極甚者令人悶絕不知人、口噤、神昏、氣冷。

昏。迷。醫林集要。

悸。永類鈴方。怔忡者即悸也。又云怔忡即忪悸。素問氣交變大論。
悸。說文氣不定也。

心。悸。傷寒論。素問遺篇本病論。

怔。怔。張揖博雅怔怔屏營怔忡也。國語注屏營猶傍徨也。與心悸不相涉、而醫書多用之可疑。玉篇怔

忡。忡。唐椿釋音云、怔音征。懼也。忡音充、憂也。怔忡心下逼々然。

心。蕩。左傳莊公四年。

怔。怔。鷄峯方法、古經方以怔忡為悸。

心。淘。百一選方、芎藭香蘇散主治。

心。忪。明理論云、忪者心忪是也。築々惕々然動。怔々忪々不能自安者。

燈。忡。證治要訣。字典忪又作憺。音根、失志貌。

忪。忪。又云燈忡、即忪忪也。忪忪與驚悸、若相類、而實不同。驚悸者因事有所驚而悸。忪忪者本

驚。悸。無所驚。常心忪而自悸、焉得無辨。

心。中。脈。亂。同俗謂心忡脈亂、字典忪又作憺、音根、失志貌。

眩。暈。丹溪心法云、眩者言其黑、運言其轉萬病隨痊云、眩者眼黑也。運者頭旋也。

氣。疝。病源候論云、復中乍滿乍減、而痛。曰氣疝。(按倉公傳所謂氣疝者、疝之總稱、與此互別)儒門

事親云、氣疝者其狀上連腎臙、下及陰囊、多得於號哭忿怒氣鬱而脹。號哭怒罷即氣散者是也。

(按張子和所指與病源候論所謂、自是別證)

偏。墜。心印紺珠云、氣疝之病、俗云偏墜、是難治也。(按子和以疝混癩、以立氣疝之目、紺珠遂為偏

墜、皆不可從)正傳亦云。

抽。風。音係。癱瘓手足索引、入門音字。

癱。瘓。王符潜夫論前出。

聖。濟。總。錄。玉機真藏云、筋脈相引而急、病名曰癱。王云、筋脈受熱而自跳掣、故名曰癱。

癱。癱。邪氣藏府病形篇、甚為癱瘓。

癱。癱。全上云。脾脈急、甚為癱瘓。

癱。癱。金匱要略、說文小兒癱瘓病也。急就章。癱疽癱瘓痿疲痕。

癱。癱。千金方陽癩論。

癱。癱。外臺秘要方風引湯(太冲云、風引者謂如風中之索引而掣急也。簡按即癱瘓也)。

癱。癱。漢書藝文志。金創癱瘓方三十卷(服虔云、音掣、引之。掣顏師古云小兒之病也。掣音充制

反、癱音子用反)。

跌。蓋。漢書賈誼崎傳師古注云、跌脚率也。蓋反也。通雅云、痲尺世切、痲音縱、賈長沙用跌蓋。亦謂擊縱反戾也。○正字通云、六書故製縱亦作痲痲、合痲爲一泥。痲古器切音記。狂也。左傳痲尤入干華臣民。又國狗之痲、又作痲。按漢書賈誼傳、病非從痲也。苦跌蓋、因此考之、不必痲痲之謂、恐轉筋、蓋是。○按賈誼新書注古躄字。躄蓋不可行也。○史記中包胥足腫、跌蓋。裂裳裹足。鵠然秦庭。
痲。邪氣藏府形篇云、微滿爲痲、變筋痺。

發。抽。錢氏小兒方訣、驚痲發抽。

抽。發。又云李寺巫子、三歲病抽發、而目右視、大叫哭。

抽。掣。又云小兒初生、壯熱吐衄、身體強直、手足抽掣、目反視、是胎驚風也。

抽。搦。三因方云、小兒發痲、俗云驚風、有陰陽二證。身熱面赤而發抽搦、上視、牙關緊硬者、陽證也。

抽。搦。薛氏醫按、發熱抽搦、韻會搦昵格切、說文按也。廣韻提搦也。又昵角切持也。典籍便覽卷六曰、產婦痲痲、手足抽搦也。(簡按、千金、外臺、驚痲論多言痲痲者、而宋人方書、無此文。但言抽搦、乃知抽搦即痲痲、便覽說是) 事林廣記卷八云、以抽搦不甚搦者、乃痲痲也。

玉機微義引閻孝忠亦同。(簡按此以痲痲抽搦爲二證不可從也) 濟陰綱目引薛氏曰、痲者筋脈急而縮也。痲者筋脈緩而伸也。一縮一伸、手足相抽搦不已、與嬰兒發抽搦相似、謂之抽搦也。赤水玄珠亦與此同。(按據潛史論及此說作痲痲者) 是痲即掣引也。痲即縱緩也。邪氣藏府病形篇類註痲痲寄係三意。玉機真藏論註證音異、後世作痲。○按說文引縱曰、掣音尺制切、六書諺从手、掣省聲別作痲非。此亦可用痲痲之痲。○抽字彙索引也。
雞瓜風。宣明方、產後抽搦、俗名雞瓜風、見本草井泉石附方。○保元慈航所論、與此太別、當並考。(永類鈴方引經驗方、雞瓜風手口搖動、不能舉物。)

擊。仆。(靈樞) 卒中風(千金方)

樓英云、其卒然仆倒者、經稱爲擊仆、世又稱卒中是也。魏太祖陽敗面喝口、叔父怪而問其故、太祖曰、卒中、惡風、叔父以告嵩。嵩驚愕呼太祖。太祖口貌如故。嵩問曰、叔父言汝中風已差乎。太祖曰、初不中風。宋斐松之魏志武帝紀注引曹瞞傳○口喝、中風其來尙矣。

風。瘧。病源云、其狀奄然忽不知人、喉裏噫々然有聲、舌強不能言(瘧伊昔切) 多千金凡例云、古經方以不語爲瘧。鷄峯作病(按ズルニ此間脫文アランカ、解ス可ラズ。栗原) 字彙伊昔切、音亦。心意病也。太中(香川修庵ナリ。栗原) 疑之。簡按、風瘧据本當作風噫。病源云、喉裏有聲噫々、而从瘧耳。意蓋同意、則瘧亦當音意。字彙蓋見瘧从意从病。漫言心瘧病、但音亦、真可疑。
風。謔。千金方。即風瘧作喉中塞々々然。外臺引古今錄驗同千金。醫說劉子儀云、夫急風與率中、理

固無二。指風而言、則謂之急風、指病而言、則謂之率中、其風癘蓋出于急風之候也。

急風。醫說。見上。

急中風。經驗方。急中風、目暝牙噤、無門下藥（肘後附方引）

率中急風。肘後方。

率中風癘。肘後方。卒中全癱、身體不自收不能語。迷昧不知人。

靈樞熱病篇云、痺之爲病、身無痛者、四肢不收、知亂不甚、其言微知、可治。甚則不能言、

不可治也。

俳。素問脈解篇、內奪而厥、則爲瘖俳、此腎虛。王冰云俳廢也。簡按、俳即痺。蓋借用。

風。病源論云、身體無痛、四肢不收、神智不亂、一臂不隨者風痺也。（按一臂不隨、据靈樞、當是

衍文、況云四肢不收、而又云一臂不隨、前後相乖。金匱云、但臂不舉、此爲痺）千金方云、風

俳者卒不能語、口噤、手足不遂、而殭直者是也。（按此與前風俳同、即卒中）。外臺風俳條、無一

臂不隨四字是。說文云、非風病也。賈誼傳云、臂者一面病、非者一方痛（新書作病）師古注、

臂足病非風病也。樓英云、非廢也。（此解元見王冰注、脈解篇俳字下。脈解篇張注、俳當非。高

世拭云、俳非同音肥）。非即偏枯之邪氣深者、以其半身無氣營運、故名偏枯、以其手足廢而不收

或名非。或偏廢。或全廢。皆曰非也。（太冲据樓英之言、以非爲中風之總稱、然而靈樞論非者、

僅一處、與偏枯並舉。則自是別證。且其文不太明、又考賈誼言、一方病則即爲偏枯、與靈樞四

肢不收云者相乖。余未能判此疑、姑錄待後考。）非芳未切音費、我邦俗醫、多讀爲牌。愚按、內經作俳、外臺瘖瘖作非者、不可斷爲牌音矣。

集韻。

腓。韻會腓通作非。○鷄峯方云、古經方以緩縱爲非。

中風惡症。千金方、卷十。治小兒中風。石膏湯主療。

偏枯。靈樞刺節真邪論云、虛邪偏客於身半其入深內、居營衛。營衛稍衰、則真氣去、邪氣獨留。發

爲偏枯。又云、其有三虛而偏中於風、則爲擊仆偏枯矣。素問擊仆偏枯可考。

偏風。素問。病源可考。

風偏枯。見病源候論。

痲枯。說文、痲半枯也。集韻引呂覽公孫綽有偏枯之藥。以起死者、作痲枯。

痲。太冲護後世謂赤脈起如繩者爲痲病。簡按、痲病見于巢氏病源論、字彙作痲者是也。

字典作痲誤、太冲未考耳。

枯。樓英云、枯痿緩不收、則筋骨氣肉無氣以生、脈道不利、手足不稟水穀之氣、故曰枯、非細

之謂也。

癱瘓風。外臺引張文仲聖劑總錄注云、攤則懈惰而不收攝、緩弛從而不能制物、以左爲攤、以右爲

緩、則非也。鷄峯方（醫說引）云、世傳左爲攤右爲瘓、此說尤非。何者經既有偏中、半身

不遂之候、即癱瘓之候、當以左右但中者名之。

攤。緩。風。 王叔和脈經。

攤。緩。 和劑局方。

難。風。 資生經。

癱。風。 張果醫說。

瘋。癱。 高濂遵生八牋。解百藥毒方。

論。半。肢。風。 品字箋云、偏枯謂之癱、俗謂之半肢風。王夢蘭秘方集驗云、半肢風半邊身冷。又見錦囊

秘錄。

瘋。風。 資生經。按字彙、瘋他典切、音黍。換病貌、癩癩音相近、換換即癱瘓風即癱風。

癩。風。 醫說、癩風。手足拳攣。

癱。疾。 徐頌卿異林。

病。癱。 宋江休復隣幾雜志、水丘婦病癱。

風。癱。 玉篇。

半。肢。 諸證辨疑云、偏枯者枯朽、不能自濡故謂半肢。

緩。風。 醫方類聚載、王氏集驗方石碑浮評去風丹詩、癱風與換風。注云衛生易簡方作緩風。

風。緩。 仁齋直指可考。

瘋。 韻會、頭風也。

夾。腦。風。 醫方類聚、引衛生十全方、男子婦人夾腦風暗風頭旋、俱是風疾。

暗。風。 湯効方、暗風率倒、不省人事、細辛末吹入鼻中、局方龍虎丹主治、頭旋眼黑、曰暗風。

闇。風。 外臺十三卷、按氣骨蒸。

羸。 靈樞口問篇云、諸脈虛、則筋脈懈惰、筋脈懈惰則行陰用力、氣不能。故爲羸字彙丁可切、多

垂下貌。

風。羸。曳。 見病源候論。

疹。曳。 千金方續命煮發方後。簡按、即羸曳羸或作羸、又作疹、疹字彙丁可切、音羸、說文引詩經小

雅、羸々駱馬、作疹々駱馬。可證。

垂。曳。 千金諸風第二。

疲。曳。 後漢馮衍傳、年雖疲曳、猶庶幾名賢之風。太子賢、注曳猶頓也。

耽。曳。 見余時雨校本證治要訣、王肯堂校本作羸。

羸。瘦。 千金小兒、卷十。羸瘦不能行步。

猥。退。病。 千金翼論云、人不能用心謹慎、遂得風疾。半身不隨、言語不正。庶事皆廢、此猥退病。得者不出十年。

萎。痿。 後漢馬援傳、咋舌叉手、從族乎。章懷注、萎痿與弱也。萎音於僞反、痿音及罪反。

風痿退。病源候論云、四肢不收、身體疼痛肌肉虛滿、骨節懈怠、腰脚緩弱、不自覺知是也。重腿之疾。左傳（集韻腿與痿同。字彙吐回切、音頽。與痿同、陰病也。）簡按痿非陰病、以音頽與

混、爲陰病、不可從。腿與痿同、重腿。蓋腿退之疾、因舉于此。腿退風。猥退風。太冲云、義不可解也。並見千金方。

腿風。鄧景儀醫經會解云、四肢不收、身體疼痛、肌肉虛滿、曰腿風、

痕癢。集韻癢或作痿。

猥。類篇病非也。猥字彙作痿。猥。玉篇肥貌。按腿退當腿腿爲正字、風病身虛滿、故以肥狀命之也。身病字多从冗。如疰腫可見。故又作猥腿、以肥病。又作痕癢、如其猥腿則借用。正字通云、痕痿俗字、殊不然、通雅二十七

刑法猥逮律條也。猥鳥賄切、盛多也、逮傳捕也。猥逮者、矯爲官府多有逮捕也。以其譌語音近、姑錄備考。

痿癱風。小補韻會、痿字注本癱。

氣中。許學士本事方。

氣厥。丹溪纂要云、氣中俗謂之氣厥也。按中彼中干此也。如中風、中寒、及中天中及類。七氣者人體所有。焉得謂之中命名大可怪也。又按戴元禮要訣中門似以中爲卒倒之稱、蓋胚胎于許學士。

瘧風。資生經瘧、廣韻音頭、痺也。

頭風。鷄峯方云、不認痛痒、字彙瘧五還切、青頭、手麻痺也。簡按瘧頭同音、當是一證。

頭痺。手足頭痺、見病源論中。

瘧痺。五藏生成篇、臥出而風吹之。血凝於膚者、爲瘧。王水注謂瘧痺也。○又玉版論、博脈瘧瘧、

注病瘧瘧及瘧瘧。

頭脊。張氏醫通。太冲云、脊目不明也。與之無涉。尤無稽之言也。太冲云麻木非古稱、自宋以來俗

呼耳。蓋深思之、古稱不仁者、宋俗謂之麻木也。

麻痺。頭麻。太冲按、醫學綱目、證治準繩並云。靈樞云、衛氣不行則爲麻木。此不詳考之誤也。

皮瘧。五常政大論、皮瘧肉苛。

痺。五常生成篇、出而風吹之、血凝於膚者爲痺。

瘧痺。上王冰注痺謂瘧痺也。字典云、俗字六書故瘧痺也。渠云切。按瘧無意義、當即用痺、不必別

作瘧、舊注手足麻木泥改音頭非。○簡按古無麻木之稱。痺之義博。故以瘧痺爲麻木之稱、今云

不必別作瘧、不考所致而已。

柔風。千金四產後中柔風、○身體疼痛自汗出者。

癱風。字典俗字、舊注分爲二非。

癱風。瘕風。

元李栖碧水類鈴方曰、半身不遂、氣須血澀、爲癱風。則筋脈拘攣、血須氣虛、爲瘕風。則彈軟不舉。簡按李子所謂癱風醫說之瘕風也。而其瘕風病源之風彈曳也。

麻木。

醫學統旨云、麻木不仁之疾也。但麻爲木之微、木爲麻之甚耳。按此說非是可考。

不仁。

謂不知善惡。(診要經王注)正傳云、夫所謂不仁者、或周身、或四肢、唧々然、麻木不知痛

痒、如繩札縛初解之狀古方名爲麻痺者、是也。按此說似二證相反者。後漢書班超傳、血氣形志兩手不仁、耳目不聰明。王注不仁謂不應。則瘳痺矣。

死肌。

神農本草經○肌鋼目作賤、賤肌通同。

肉苛。

素問。

瘳。

素問。肺移熱於腎。傳爲柔瘳。靈樞熱病篇、熱而瘳者死。腰折瘳癢、齒禁齟也。說文、瘳強急也。

瘳。

傷寒論成無己云、瘳當作瘳。傳寫之誤也。瘳惡也、非強也。太冲云、莖脛頸勁經徑涇輕、並皆

省書至或至或巫。與至字甚相近似、全是傳寫之誤、彰々可見矣。簡按、說文無瘳、瘳惡也。見千張揖博雅。又按山海經大荒之中有山、名曰去瘳、郭璞云、瘳音如、風瘳之瘳未詳。風瘳見靈樞。由而考之、瘳之訛瘳、晉時既然、今人混用、宜哉。赤水玄珠曰、劉寅云、以時發者謂之瘳、不以時謂之瘳。佗馮兆程雲來輩、雷同立說、皆不足據矣。戴侗六書故云、醫書云、

瘳風。

婦人良方。

風瘳。

靈樞熱病篇。

剛瘳。

傷寒論。太陽病發熱惡寒者、名曰剛瘳。

陽瘳。

活人書、剛瘳又云陽瘳。

勞風。

醫學綱目云、即瘳病。

柔瘳。

傷寒論。太陽病發熱汗出而不惡寒者名曰柔瘳。素問氣厥論。肺移熱於腎、傳爲柔瘳。王注柔

謂筋柔而無力。瘳謂骨瘳而不隨。氣骨皆熱、髓不內充、故骨瘳強而不舉、筋柔緩無力也。瘳音

陰瘳。

活人書、柔瘳又云陰瘳。

打噤寒。

方有執傷寒條辨云、瘳廣韻風強病、俗謂打噤寒、是也。

瘳病。

子痲病。子胃。

外臺引小品方云、妊娠忽悶、眼不識人、須臾醒、醒復發、亦仍不醒者、名爲瘳病、亦號子痲、

亦號子胃。病源候論同。

子痲風。

吳球諸證辨疑錄。

金瘡瘰 病源候論。

破傷風

内瘰

產後瘰

產後中風

瘰風

風瘰

角弓反張

乳瘰

別錄防風主治。按此對風瘰而言。即破傷風症。

千金方。產後若所犯、必身反強直。猶如角反張、名曰瘰風。

瘰風。千金方。在瘰中風。背強不得轉動。名曰風瘰。按瘰風、風瘰所因異、而其症即一爾。

角弓反張。本艸經疏防風條曰、南方中風、產後血虛、發瘰。俗名角弓反張。

乳瘰。本經鈎吻主治。

此書を通覽するに、精神疾患形状の初期的觀察が、病名標型の根本となり、更に活法を経験したる經驗したる者が症状の變化を大別せんこと試み、類似擬模を辨じて互に其名目の當れるや否やを検討せしことは毫も疑念を挿むの余地なきものなり。

瘰疾の名目に、既に顛疾と狂疾とを併合して、狂瘰の名を措置したるは、縦し初期的觀察にしても、大に注目すべき一事ならん。「五十九難曰、狂瘰之病、何以別之。然狂疾之始發、少臥而不飢、自高賢也、自辨知也、自倨貴也、妄笑好歌樂、妄行不休、是也、瘰疾如發、意不樂、僂仆直視、是也。」とい

へるが如き、狂と瘰との字義が、即ち發病及び經過を知識したるの後、始めて意義あるものこそせられ、狂疾は陽氣旺盛にして重陽の病たり、瘰疾は陰氣虛寒にして重陰の病たりといふ本源論に終始したるに過ぎざるも、是亦狂、瘰、ともに名目を廣汎ならしめ、狂に種類あり、而して後に瘰、瘰の一證たるに過ぎずと稱へしむる導機となりしもの、如し。

狂の字義たるや、玉篇これを癡癡也とす。精神が其思量に於て、得失の地を審かにせざるを狂と謂ふこと、已に此字義を按ぜし者の齊しく唱言せしところなり。只、狂疾の經過が、眠臥を愛せず、飲食を肯んぜず、自ら高貴倨傲を誇り、妄言妄走を表現するを以て、本來の陰陽盛虛の論理を引接せしに止まるのみ。狂癡發作の史的醫論は、些か陳述せる處を茲に回顧して可ならんか。

狂疾の經過が爾く歌笑奔走するに反し、瘰病は即ち地に僂仆して良久く人事を省みず。故に瘰蹶の言を生じたりとなす。これ陰氣の太盛するを以て、直立行立するを得ずとなし、明かに發病證候の異同を謂はんこと試みたるは、初め多く顛狂を混同したるの弊を更めんことしたるもの、如く、靈樞癡狂篇、漢書藝文志、客疾五藏狂癡病方の如き顛狂一列に觀察せる結果を剖判して、主として經過を以て名目の劃一を破るべき機運を作れるもの、更に瘰の名義を以て、驚、癡、狂の總名となせる後世の論と比較して、此初期觀察の進歩を検究すべき要ありとなすものなり。

瘰の名目に至ては、音聞なりとし、即ち發病、經過に於て間を措置するものとなせり。瘰の發するや一直地に仆倒し、嚼舌味涎、手足搐搦、時に所謂六畜の聲をなす。頃刻にして蘇生し、己れが寸前

發病仆地の形態を知らざるもの如く、是れ驚恐に因源し、藏氣の不平發して疾を作すといふものに屬す。即ち病勢が沈痾の字義を以てせられ、而して一日數發、一月數發、或は數年の間隔を以て發作を重複す、痾の字義を案出せし所以にして、癩疾の發作と軌を同じくするを以て、爰に狂癩、狂癩に對し、癩痾の名稱を造語したるものなり。痾、玉篇に小兒癩也とするは、即ち大人を癩、小兒を痾と分別せし醫論の套襲に過ぎず、病源候論の如きこれを説述せるの事、予既に少しく語る處あり。同じく參考して可なり。

狂、癩、痾の發作に據る字義及び名目の大略以外、精神病の形象に關する顯著なる經驗は、實に夥しき現象を伴ふを以て、これが病名の案出も亦從て夥多なるは、理の當然とするところにして、本書を概覽するも、以上三大名目中に附屬せる古病名の多きは更なり、更に精神疾患の形態中、重要なる分類上の語彙としては、

驚風、鬱胃、悸、氣痛、眩暈、發搐、卒中風、癱瘓、瘓、

等の名目を案出し、亞でこれが包括する一切の異名目を表現して、遺漏なからんことを期したるもの如し。

眩暈、卒中の都き名目は、傳統今に常套語として使用せられ、其因據の久しき事を示す。眩暈は、眩者言其黑、運言其轉。(丹溪心法)といひ、眩者眼黑也。運者頭旋也。(萬病隨症)といふ、即ち旋運して眼界の圈黒なる状を形容す。卒中風は、既に千金方に見えたり。卒然として仆倒する者、醫書

稱して撃扑と名けしもの、俗世是を卒中と爲す。而も猶これに、急中風、卒中急風、率中風癱、及び急風等の名目を陳ねて、此疾患の急激に發作する感念を、語感の上より強からしめたり。卒中症は、頃刻にして治すと雖も、後に身に痛苦無くして而も四肢収まらず、又、言語不能に陥る、甚しければ精神久持せずして迷朦人事を知らず、これを瘵(靈樞熱病篇)と名けたり。風瘵(病源候論)の字義の如き、能く這般の形象を示せるもの、中風惡瘵(千金方)といへる名目は、寔にこの症狀を明詳にしたる文字と謂ふべし。癱瘓に至りては、又、癱風、瘓風(永類鈐方)ともいひ、筋脈拘攣、血順氣虛即ち半身不遂の形容を語れるものれども、癱は左半身の不隨を指し、瘓は右半身の不隨を示す。然しなから書中、癱瘓風の條下、古へ既に、偏中、半身不遂之候をいふものあるを以て、左右を分別するの字義、非違なりといふが如き、別途の參考をなすべきもの、靈樞刺節眞邪論に、偏枯の名目あり、これ虛邪内に潛入すること深く、營衛衰弱して眞氣去り、邪氣のみ獨り留まりて偏枯を發すとせり、風偏枯、偏風、是等の字義を併せて同じく所謂卒中症後の状態を觀察したる態度を想見するに足らん。これを要するに、名目を造語して精神疾患を辨別指示せんことを試みたる古人の用意は、單に文字の冗繁一切を除去しても、其周到なりしを考ふべく、然れども必ずしも的確のみは斷ずべからず、傳來の名目が苦慮焦煩の結果に成りしを知りて、更に新造術語を以て多岐複雑なる形象を表現せざるべからず。實にこれ本邦に於ける古來よりの精神病に關する標型を樹立し且其特質を詳論するに際して第一の緊急必須事に屬すればなり。

三、精神病理論の集成

精神病に關する名目の夥多なる、既に「病名沿革攷」一文を以てしても、是を想察するに足るべし。漢醫書が渡來して翻譯せられて、疾患關係の論辨が甲乙錯雜するに至り、究明するに従ひて手自ら探赜に迷はざるを得ず、試みに漢醫書古來列載する處の病理論、經過論、治方論等を網羅して考量するを必須とすべきは洵に當然なる推勢にして、これあるが爲に更に自己の論辨を中正ならしむるに足ることなせり。即ち本邦に於ける名目考究の學が、一段の展開を示して、而も各條目の論理を一切蒐集せんとしたるは、日本精神病論樹立の先驅として、推稱に價すべきものなり。今本邦集成の書を探て按ずるも、其孰れのものといへども、古醫書の條目及び理論を引かざるはなく、經驗と治法と亦悉く必ずこれを引き、先哲遺傳の趣旨を露白せり。茲にこれら集成書の裡より、多紀元簡輯著するところの「名醫雜病彙論」癡狂の條を掲げ、以て集成の形態を知らしめんとす。

「名醫雜病彙論」

(癡狂)

癡狂 凡癡疾、發則仆地、吐涎沫無知。強惊起如狂及遺糞者難治。若或悲泣呻吟者、此爲邪魅非狂。自依邪方治之(肘後備急方)

風癡 風癡者、由血氣虛邪入於陰經故也。人有血氣少則心虛。而精神離散、魂魄妄行、因爲風邪所傷。(聖惠方)

邪入於陰、則爲癡疾、又人在胎、其母卒大驚、精神並居、令子發癡。(聖濟云其證與風癡大率相似)其發則仆地吐涎沫、無所覺是也。原其癡病皆山風邪故也。養生方云、夫人見十步直墻、勿順墻而臥、風利吹入、必發癡癎及體重人臥、春夏向東、秋冬向西、此是當然。(病源候論)

五癡病 五癡者一曰陽癡、發如死人。遺尿。食頃乃解。二曰陰癡、初生小時、臍瘡未癒數洗浴因此得之。三曰風癡。發時眼目相引牽縱。反強羊鳴、食頃方解、山熱作汗出當風。因房室過度。醉飲(外臺飽滿行事)令心意逼迫短氣、脈悸得之。四曰濕癡。眉頭痛、身重、坐熱。沐頭濕結腦沸未止、得之。五曰馬癡。發作時々、反目口噤、手足相引(外臺身熱、坐小時、膏氣腦熱、不知得之)身體皆然。診其脈、心脈微澁、並脾脈緊而疾者、爲癡脈也。(外臺腎脈)急甚。爲骨癡疾。脈洪大而長者癡疾。脈浮大附陰者癡疾。(病源候論 外臺秘要方)

風狂病 狂病者山風邪入並於陽所爲也。風邪入血（聖惠方入血室）使入陰陽二氣虛實不調，若一實一虛。則令血氣相辨，氣辨於陽則爲狂。發或欲走。或自高賢、稱神聖、是也。又肝藏魂、悲哀動中則傷魂。魂傷則狂忘。（靈樞作妄）不精明不敢正、當入而變筋兩脇骨不舉毛、瘁色夭死於秋、皆由血氣虛受風邪、致令陰陽氣相辨所致、故名風狂。（病源候論）

癲狂 又有五癲。一曰陽癲。二曰陰癲。三曰風癲。四曰濕癲。五曰勞癲。此蓋隨其感處之由立名。又有牛·馬·猪·鷄·狗之癲。皆以其癲發之時聲形狀似於牛馬者。故以爲名也。俗云病癲人忌食六畜之肉。食者癲發之狀。皆悉象之。（病源候論）

風眩 徐嗣伯曰、余少承家業、頗習經方。名醫要治備聞之矣。自謂風眩多途。諸家未能必驗、至於此術鄙意備所究也。少來用之、百無遺策、今年將衰暮、恐奄忽不追、故顯明證論、以貽於後云爾。夫風眩之病、起於心氣不足、胸上蓄實。故有高風而熱之所爲也。疹熱相感、而動風。風心相亂、則悶瘖故謂之風眩。大人曰癲。小兒則爲癇。其實則一。此方療治萬無不癒、但恐證候不審、或致差違、大都忌食十二屬肉而黃豚爲患、發多氣急、氣急則死不可救。故此一湯、是輕重之宜、勿因此使謂非患所治。風眩湯散丸煎、凡有十方、凡人初發、宜急與續命湯也。因急時但度灸穴、便火針針之。無不瘥者。初得針意便灸最良。余業之以來三十年、所救治者數十百人。無不瘥矣。後人能曉此方、幸

勿參以餘術焉。（千金方）

風癲 古今錄驗云、五癲、牛癲則牛鳴病、馬癲則馬鳴、狗癲則狗吠、羊癲則羊鳴、鷄癲則鷄鳴、五癲者府藏相引、盈氣起寒厥、不識人、氣爭痰涎吐沫、久而得蘇。（千金方、外臺引錄驗有五癲者以下二十五字）

風癇 夫風癇病者、皆由藏府壅熱風邪干於心也。心主於血、故血壅而不行、則榮衛氣滯、血脈既亂、神氣不定、故發癇也。凡少小有斯病者亦由五脈不流、云氣逆行、乳食不調、風邪所中、或先身熱、癇瘕、驚啼而後發作、其脈浮洪者、病在於六府及肌膚中、則易治之、若身冷不啼掣不驚叫。病發時脈沈者、病在於五藏。若入於骨髓則難療也。其候口鼻乾燥、大小便利、眼視不明、耳後青色、眠臥不安、腰直目眊、青筋生、頭髮豎、時々作聲、口不噤吐白沫、渾身煩熱、頭上汗出、恒多驚愕、手足顫掉、夢中叫喚、目瞳子大、是發癇之狀也。（太平聖惠方）

風邪 論曰、風邪中人以府藏虛而心氣不足也。人以氣血榮衛爲正、以風氣外至爲邪。府藏虛而心氣不足、則風邪乘虛而干之。經言病有五邪。而中風居其一。此之謂也。又曰、風者善行而數變。故其發不自覺知、狂惑妄言、悲喜無度、乃其證也。（聖濟總錄）

風狂 論曰風狂之狀、始發則少臥不餓、自高自賢、自辨自貴。蓋人之榮衛、周身循環、晝夜不窮、一失其平、則有血辨於陰。而氣並於陽者、有血並於陽而氣並於陰者。陰陽二氣、虛實不調、風邪乘氣而入並於陽、則謂之重陽。故其病妄笑好樂、妄行不休、甚則棄衣而走、登高而歌。或至數日不食。故曰狂也。又肝藏魂。魂、則隨神往來、悲哀動中、有傷於魂、則為狂妄、是亦血氣俱虛、風邪乘之。

陰陽相茲也。(聖濟總錄)

風癇 論曰風癇病者、由心氣不足胸中蓄熱、而又風邪乘之病間作也。其候多驚、目瞳子大、手足顛掉、夢中叫呼、身熱瘰癧、搖頭口噤、多吐涎沫、無所覺知是也。然病發於陽者易差、發於陰者難治。故經曰、藏病難治、府病易治。又云大入曰癲、小兒曰癇。(聖濟總錄)

癲癇 夫癲癇病、皆由驚動、使魂氣不平、鬱而生涎、閉塞諸經厥而乃成。或在母胎中受驚、或至少感風寒暑濕、或飲食不節、逆於藏氣、詳而推之、三因備具。風寒暑濕、得之外。驚恐震懾、得之內。

飲食饑飽、屬不內外、三因不同、忤氣則一傳變五藏、散及六府、溢諸絡脈、但一藏不平、諸經皆閉、隨其藏氣、症候殊分、所謂象六畜、分五聲、氣色脈證、各隨本藏所感所成而生諸證。古方有三癇五藏癇六畜癇乃至一百二十種癇。以其稟賦不同藏府強弱、性理躁靜。故諸證蜂起推其所因、無越三條、病由都盡矣。(三因方) 夫五癇合屬五藏。而無腎有胃者、以腎屬鼠非畜養物、神無主治、故不作癇。胃屬鷄、係六畜物故有象。胃為五藏海、非餘府比。又犬屬戌、手太陽小腸經主之。雖屬六畜、初無

犬癇者、以辰戌為魁罡、四殺沒處不與癇象。古方類例未之究也。學者宜知之。(三因方)

狂 夫三陽並三陰。則陽虛而陰實。故癲。三陰並三陽。則陰虛而陽實。故狂。論曰陽入陰。其病靜、陰入陽、其病怒。怒則狂矣。病者發狂、不食。棄衣奔走、或自稱神聖。登高笑歌。踰牆上屋。所至之處非人所能、罵詈妄言、不避親疎。病名狂。多因陽氣暴折、蓄怒不決之所致。故經曰陽明常動、太陽少陽不動、不動而動、為大疾。此其候也。(三因方)

癲狂 難經疏云、狂病之候、不愛眠臥、不旨飲食、自言賢智、歌樂行走。此是陽氣盛之所為。故經言、重陽者狂、今母以此為癲病。謬矣。癲病發即僵仆倒地。故有癲蹶之言。陰氣大盛、故不得行立而倒也。今世以為癲病者誤也。其剖析癲狂之病、曉然如此。而人終不信。豈亦傳寫之誤、難以改歟。

(重陰針灸資生經)

狂癡 人病狂癡。手足厥作狂病。治不効。名醫錄曰、此驚恐憂思所得。大驚傷心、大驚傷腎、大憂思傷神志、神不足則狂癡。志不足則恐怖。恐怖則腎氣留積。足不收。亦因積驚恐氣傷腎也。(資生經)

顛狂 夫婦人顛狂病者、猶血氣虛、受風邪所為也。人稟陰陽之氣而生、而風邪入並於陰則為顛。入並於陽則為狂。陰之與陽、有虛有實、隨其虛時、為邪所並、則發也。顛者卒發、意不樂、直視、仆地

吐涎沫口喝目急、手足撩戾、無所覺知。良久乃甦。狂者不臥不餓、自高賢也。自辨智也。自貴倨也。妄笑好歌樂、妄行不休、故曰顛狂也。(娘人良方)

狂越 狂者、狂亂而無正定也。越者乖越禮法而失常也。夫外清而內濁、動亂參差、火之體也。靜順清明、準則信平。水之體也。由是腎水主志、而水火相反、故心火旺則腎水衰。乃失志而狂越也。或云重陽者狂、重陰者癲、則素問之說不同也。經注曰多喜為癲、多怒為狂、然喜為心志故心熱甚。則多喜而為癲也。怒為肝志、火實制金、不能平水。故肝實則多怒、而為狂也。況五志所發皆為熱。故狂者五志間、發但多怒爾。凡熱于中則多干陽明胃經也。經曰陽明之厥、則癲疾、欲走。腹滿、不得臥而赤而熱矣。妄言。又曰陽明病、洒洒振寒、善伸數欠。或惡人與火聞水音、則惕然而驚、心欲動。獨閉戶牖而處。欲上高而歌。棄衣而走。責響腹脹。罵詈不避親疎。又經曰熱中消中、皆富貴人也。今禁膏粱、是不合其心。禁芳草石藥、是病不癒。願聞其說。岐伯曰、芳草之氣善、石藥之氣悍、二者其氣急疾堅勁、故非緩心和人、不可服此二者。夫熱氣慄悍、藥氣亦然。二者相遇、恐內傷脾。注曰、膏謂油膩肥脂也。梁糧米也。芳草謂芳美之味也。芳香美也。悍利也。堅固也。勁硬也。慄疾也。蓋服膏粱芳草石藥、則熱氣堅勁疾利、而為熱中消中、發為癲狂之疾、夫豈癲為重陰者歟。(傷寒原病式)

風癲 謹按、內經言癲而不言癲、古方以癲癲或併言、或言風癲或言風癲、或言癲狂所指不一。蓋癲病

歸于五藏、癲病歸之于心。故今以風癲別立一門、而癲狂合為一門也。又癲與瘖略相似、而實不同、其病發身軟、時醒者、謂之癲也。身強直反張如弓不時醒者謂之瘖也。癲病隨其痰之潮作、故有時而醒、瘖病比癲為病甚、而有挾虛者、故因其昏冒而致亡者多矣(玉機微義)
孫赤水玄珠曰、按此以風癲別立一門、明其不與癲狂相類。則是之矣。而云癲狂合為一門、今終集考之、並無癲狂門目、豈未之補歟。

顛狂 嘗見東陽樓氏一少年、病狂一日、天風大作、忽飛上干邑東之塔巔、且歌且哭。其塔實無容步之階。衆皆以為怪。予思龍乃純陽之物、伏蟄于海內、其身止有鱗甲、且無羽翼、遇陽氣風騰之日、則借風雲之勢、而能飛騰、即此義也。奚足為怪哉。(醫學正傳)

狂 狂之為病、經曰、重陽者狂、其病屬熱夫何、熱者陽也。陽者浮也。其病能棄衣登高。棄衣者、因熱而不欲衣、登高者因浮而能輕舉也。又能強辨是非、尊貴倨傲、妄笑好歌、妄行不休、不肯少臥者何也、陽動而陰靜、故陽病欲見人、不欲閉戶獨處也。又能不餓者何也、陽邪伏藏、胸膈飽滿、所以不餓也。其病也有源。其發也有候。世醫不究其理、與以為痰、同聲相應、噫不知痰是何者而狂是何病也。若以痰能為狂、則凡有痰者皆狂、而予未之見、蓋不觀諸傷寒之發狂乎。傷寒大熱則狂發也。又不觀諸飲酒之發狂乎、夫酒者大辛之者、飲多則熱甚、々々則發狂也。歷々試之、則凡狂之病

爲未曾有不屬之於熱也。但有輕重深淺之不同耳。(儒醫精要)

癩狂 癩狂爲事顛倒、言語錯亂、一云失心風、多因抑鬱不遂佗僚無聊而成。有狂之意、不如狂之甚、狂爲暴病、癩爲久疾、狂則登高而歌、棄衣而走、踰垣上屋、罵詈不避親疎、俗謂之風子是也。癩者忽然僵仆直視、厥不知人、或作牛羊聲、如小兒驚癩之狀、俗謂之羊兒風是也。(醫學六要)

癩癩 癩癩之病、謂之邪病、顛即風邪、全歸於心。癩則邪流五藏、然其人身氣血足中。何邪之有云々。古方治法、風火顛狂、皆謂有餘、每以祛風、瀉火、金石之劑從而治之。効者有之、因而綿延者亦有之、豫考其疾、未有不因藏神先虛。然後風邪得入、實者邪氣實、虛者正氣虛、不可偏執、一見但當審人虛實冷熱、然後清痰降火安神養血、護効者多矣。(諸證辨疑)

狂癩 愚謂、狂爲痰火實盛、癩爲心血不足、多爲求望高遠、不得志者有之。癩病獨主平痰、因火動而作。治法、癩宜吐、狂宜下、癩宜安神養血兼降痰火、若三證神脫而目瞪、如愚痴者、雖聖醫不能治也。(醫學統旨)

愚謂疾在隔間、則眩微不仆、痰溢干上、則眩甚、仆于地、而不知人。名之曰癩癩。徐嗣伯曰、大人曰癩、小人曰癩、其實一疾也。然與中氣、中暑、尸厥等仆倒不同。凡癩癩仆時口中作聲、省時口吐涎

省後不復再發、間有發者亦非如癩癩常發之狀也。沫。省後或又復發、時作時止、而不休息。中風尸厥等證、則仆時無聲、省時無涎沫。(醫學統旨)

癩癩 癩癩頭眩也。痰在隔間、即眩微不仆、痰溢隔上、則眩甚。仆倒於地不知人。名之曰癩癩。徐嗣伯云、大人曰癩、小兒曰癩。其實一疾也。然中風中寒中暑尸厥等、仆倒不同、凡癩癩仆時口中作聲、將省時吐涎沫、省後又復發、時作時止、而不休息。中風中寒中暑尸厥之類、則仆時無聲、省時無涎沫者、後不復再發、間有發者、亦不如癩癩之常也。(醫學綱目)

凡癩癩及中風中寒中暑中濕氣厥尸厥者、而昏眩倒仆不省人事者、皆由邪氣逆上、陽分而亂於頭中也。癩癩者痰邪逆上也。中風寒暑濕及氣厥尸厥者、亦風寒暑濕等邪氣逆上也。邪氣逆上、則頭中氣亂、則脈道閉塞、孔竅不通、故耳不聞聲、目不識人、而昏眩無知、仆倒於地也。以其病在頭癩、故曰癩疾治之者或吐痰而就高越之、或鎮墜疾而從高抑之、或內消痰邪、使氣不逆、或隨風寒暑濕之法、用輕劑發散上焦、或針灸頭中脈絡、而導其氣、皆可使頭腦脈道流通、孔竅開發、而不致昏眩也。是知癩癩之癩與厥成癩疾、眩冒癩病之類一疾也。王太僕誤分癩爲二疾、獨孫真人始能一之、今特冠此氣亂頭顛等經文於癩癩篇首、使人知疾有所歸而治有所據也。(醫學綱目)

癩 癩狂病、俗名曰心風、蓋謂心神壞亂而有風邪故也。丹溪謂、顛屬陰、狂屬陽。癩多喜、狂多怒。又云重陰者癩、重陽者狂。由此觀之、則是陰陽寒熱冰炭不牟、安得槩以一藥治之、而可以同日而語。

也。又曰大槩是熱癩者神不守舍、狂者如有所見、斯得病之情狀、而理之不容易也。(古今醫統)

徐春甫曰、癩狂之病、總為心火所乘、神不守舍、一言盡矣。癩者至高也。火性炎上正如經云、陽氣太上。則狂癩。狂則孔子所謂狂狷者之狂也。靈樞經曰、狂病始發、少臥不饑、自高賢也。自辨智也。自尊貴也。故曰、狂者進取志大而大言者也。前謂狂言如有所見、斯得之矣。蓋心火暴熾、言語善惡不避親疎、此神明之亂也。此之所謂癩狂也。蓋謂心熾之甚、陽氣太上、則病人亦乘陽火之上炎、故棄衣而登高。由狂而又癩、此則聖人命名之義、而有同中之異耳。(古今醫統)

古方每以癩癩並治出方、乃大誤也。蓋癩為心病、而屬實者多。癩為五藏兼病、而屬虛者多。蓋因靈樞云癩癩瘕癩不知所苦。後人不察、遂認為一證。殊不知靈樞癩癩自以兩證而言、不知所苦、皆言不能自知其病之所苦也。玉機微義始分別之、而亦未嘗白靈樞之旨也。(古今醫統)

登高棄衣、引重致遠者、為癩。乃痰火亢熾之甚、而然治宜降下之劑、滾痰丸之屬是也。自高辨智、妄語狂言、神明失守、為狂。治宜鎮心安神清上之劑。牛黃真砂丸之屬是也。(古今醫統)

癩症 癩症從來有五般、不須五畜、只因痰。或兼風、火為之鬱行動、驟然倒路傍、口中涎沫如湯沸、手搖如弓角反張。解水疎風痰飲去。早行吐法自安康。(古今捷要醫學六書)

癩狂 癩者神不守舍、狂言如有所見、經年不癒、心經有損、是為真病、如心經畜熱、如痰迷心竅。當

下痰寧志、若癩哭呻吟、為邪所憑、非狂也。(醫方摘要)

癩 癩者俗謂之猪羊癩風是也。(醫方摘要)

癩病 夫癩癩之病、皆由驚駭、使藏氣不平、鬱而生涎、閉塞諸經、厥而乃成癩、病屬之於心。癩病歸於五藏、今以風癩別立一門、又以癩狂合為一門、癩與癩、其病狀相類、而實不相同、癩病發、身軟之時醒、其症隨痰而作、故有時而醒。癩病自強直、反張如弓、不醒時癩病挾虛、故昏胃、遂致亡者多矣。(識病捷法)

不治症、神亂、目瞪如愚、病後甚者、尋衣五癩重者(識病捷法)

癩 沈痼也。一月數發者易治。週年一發者難治。此虛實之判也。實者即攻之、虛者先補可也。(醫方考)

癩疾者風痰之故也。風陽氣也。內經曰、陽之氣以天地之疾風名之。故其發也暴然所以令仆地者、厥氣併干上、上實下虛、清濁倒置故令人仆、悶亂無知者、濁邪干乎天君。而神明壅閉也。舌者心之苗、而脾之經絡連于舌本、陽明之經絡入上下齒縫中、故風邪實于心脾、則舌自挺、風邪實于陽明、則口自噤、一挺一噤故、令嚼舌吐沫者、風熱盛于內也。此風來湖洶之象、背反張目上視者、風在太陽經

也。足太陽之經、起于晴明、挾背而下、風邪干之。則實而勁急、故目上視而背反張也。手足搐搦者、風屬于肝木、肝木主筋、風熱盛于肝、則一身之筋牽掣、故令手足搐搦也。搐搦四肢屈曲之名、搐者十指開握之義也。或作六畜聲者、風疾鼓其氣竅而聲自變也。譬之弄笛焉。六孔塞不同、而宮商別異、是也。(醫方考)

癩狂 多怒爲癩、多喜爲狂。云々 (醫方考)

夫癩者、或狂或愚、或歌或笑、或悲或泣、如醉如痴、言語有頭無尾、穢潔不知、積年累月不愈、俗名曰心風、此志願廣大、而不遂所欲、多有之。(醫旨緒餘)

癩癩 趙以德曰、巢氏方不達王叔和之指、撰爲病源、不復收採、於是後失傳焉。不獨此也。至於聖人之旨、亦不肯及、輒立五癩之說、由是後代錢氏方論遂增五獸所屬、爲五藏之癩、各有其狀、及三因方論、則復有馬癩者、作嘶鳴搐搦騰踴、多因挾熱者、驚心動膽、攝鬱滲入心之所致也。諸方皆以初因涎鬱閉塞藏氣不動。因之倒仆口吐涎沫也。安知口吐涎沫、豈止素積於胸中者哉。大抵癩癩之發、厥乃成、厥由腎中陰火上逆而肝從之。故作搐搦、搐搦則編身之脂液促迫而上。隨逆氣吐出口也。蓋諸方不察其病源、故論如此。其源何如、大抵雖曰癩由邪入於陰、然如前所云、相乘相附、交錯之變、於所病經脈一々當較量而治、更分其有從標而得者有從本而得者。標者止在經脈氣不通、運倒仆本者深入兩腎間動氣中、當時腎受傷而虛、腎藏志、志不足則神躁擾、所以靈樞云其先不樂也。所謂

腎間者、以腎居兩傍、各有腎膈一穴、離背中三寸。又有志室二穴、揭上善謂七節之傍、中有小心者指此也。越人分之、左屬腎右爲命門者、精神之所舍、原氣之所擊、及論右腎之氣與左腎相通、則謂之兩腎間動氣、是入生命也。係於生氣之原、五藏六腑十二經脈之根本、呼吸之門也。夫如是者、即內經所謂腎治於裏者是也。所謂生氣者、陽從陰極而生、即着天之氣、所自起之分也。故經曰、蒼天之氣、清淨則志意治、順之則陽氣固、雖有賊邪、弗能害也。或經脈引入、外感內傷、深入於根本、傷其生氣之原、邪正混亂、天樞不發、衛氣固留於陰而不行、不行則陰氣蓄滿、鬱極乃發、發則命門之相火、自下焦逆上、掉塞其言聲、惟迫出其羊鳴者、一二聲而已。編身之脂液、脾之涎沫、皆迫而上胸臆、流出於口、五藏六腑十二經、脈筋骨肉、皆不勝其衝逆、故卒倒而不知也。食頃火氣退散、乃醒。醒後若邪氣從病發而散、生氣得散則頭不再作、或邪不散、仍與生氣混亂、或邪雖退、而生氣之原尙虛、當時不治。則邪易入而復作也。如此者多成常證。故內經曰、癩疾者初病歲一發、不治月四五發也。或曰、子以癩癩之疾、有由邪入兩腎間而後作者。此言古今未嘗聞、將有所自乎。曰、方論未考之爾。內經既有二陰之癩、靈樞又有足少陰筋病之癩、二陰非腎之經乎。腎間動氣非腎之氣乎。更以胎癩言之、便可推之。腎間動氣本受父母精氣、既爲立命之門、安得各經引邪深入、不止於此乎。若夫以胎始論之、則七節之傍命門穴在其後、臍在其前、腎與兩傍、胎在其中、是故子臍係以胞帶、隨母呼吸、母呼亦呼。母吸亦吸、通母之生氣、食母之穀氣、以化育內外百骸之形者、皆是腎間動氣所致也。當母受驚之邪、子在母腹、隨呼吸得之、與腎間動氣混在其中、雖生出腸後、一二歲始發、

或八九歲後發。蓋小兒初升之陽，如日方升，邪不易入，故痼未發，必待復感之邪入深，與所感母腹之邪相搏而後作。夫如是大人與小兒病此癩疾者，縱得稟質強壯，終因邪害，其生命之原難得中壽。若發頻而志愚者，僅至四十，陰氣衰半而已。小兒質弱目瞠者，則不過歲月，遠亦難出成人之年，蓋腎間生命之氣虛而不復，故不得壽也。諸方中所治皆不及此何哉。李東垣晝發灸陽蹻，夜發灸陰蹻，為能二蹻能行下焦之陰陽，陰陽行則動氣中之邪，因而可散故也。（證治準繩）

癩癩 癩病俗謂之失心風，多因抑鬱不遂，他際無聊而成，精神恍惚，言語錯亂，喜怒不常，有狂之意，不如狂之甚，狂者暴病也。癩者久病也。（證治準繩）

癩病與卒中、瘧病相同。但癩病仆時口中作聲。將醒時吐涎沫，醒後又復發，有連日發者，有一日三五發。中風、中寒、中暑之類，則仆時無聲，醒時無涎沫，醒後不復再發。瘧病雖亦時發時止，然身強直，反張如弓，不如癩之身軟。或猪犬牛羊之鳴也。原病式以，由熱甚而風燥為其兼化，涎溢胸膈，燥燥而癩癩、昏冒、僵仆也。三因以，驚動藏氣不平，鬱而生涎，閉塞諸經，厥而乃成，或在母腹中受驚。或感六氣，或飲食不節，逆於藏氣而成，蓋忤氣得之外，驚恐得之內，飲食屬不內外，所因不同，治法亦異。（證治準繩）

癩 顛者異于常也。平日能言，顛則沈默，平日不言，顛則呻吟。甚則僵仆直視，心常不樂，此陰血

虛少，心火不寧也。（醫家粹言）

癩狂 補又謂之大顛（參補明醫指掌）

癩狂 癩狂之病，病本不同，而狂病之來，狂妄以漸，而經久難已。癩病之至，忽然僵仆，而時作時止，狂病常醒，多怒，而暴。癩病常昏，多倦而靜，由此觀之，則其陰陽寒熱，自有冰炭之異，故難經曰，重陽者狂，重陰者癩，義可知也。後世諸家有謂癩狂之病大槩是熱。此則未必然也。此其氣脈氣自亦有据，不可不辨察陰陽分而治之。（景岳全書）

癩即癩也。觀內經所言，癩證甚詳，而癩則無辨，即此可知後世有癩癩、風癩、風癩等名，所指不一，則徒滋惑亂，不必然也。又如別錄所載五癩，曰馬癩牛癩猪癩羊癩鷄癩者，即今人之謂羊癩猪癩也。此不遇因其聲之相似遂立此名。可見癩癩無二，而諸家於癩證之外又有癩症，誠屬牽強，無足据也。又千金方有風癩驚癩食癩及陰癩陽癩之說，皆所當辨，並列後條。（景岳全書）

癩病 癩病多由痰氣、風氣有所逆，痰有所滯皆能壅閉經絡，格塞心竅故發則旋暈僵仆、口眼相引、日睛上視、手足搐搦、腰脊強直、食頃乃甦，此其候病候已者正山氣之候逆順也。故治此者當察痰察

氣、因其甚者而先之。至若火之有無、又當審其脈證而兼為之治也。(景岳全書)

痴狀 證、凡平素無痰。而或以鬱結、或以不遂、或以思慮、或以驚恐、而漸致痴狀。言辭顛倒、舉動不經。或多汗、或善愁、其證則千奇萬怪、無所不至、脈必或弦或數、或大或小、變易不常、此其逆氣在心、或肝膽二經、氣有不清而然、但察其形體強壯、飲食不減、別無虛脫等證。則悉宜服蠻煎治之、最穩最妙。然此證有可愈者、有不可愈者、亦在乎胃氣元氣之強弱待時而復、非可急也。

(景岳全書)

謂、思逸無擇之說、雖若切當、然風寒外感自有表證、飲食內傷、是有裏證、但未必亂神若此、而癩癩為病則、忽爾昏厥、此其病則專在心經、以及肝膽二臟、又非風寒飲食所能煩、病若此者、且風癩之義、本以木邪所屬為言、亦非外感之謂、即有外感有飲食、亦無非因驚因恐相兼為病耳。若以三因並列之、則有未必然也。(景岳全書)

癩症 癩發如狂不治者、由心之陽不勝其陰。氣之逆、神明散亂、陽氣暴泄。故發如狂。猶燈將滅而復明也。(病機沙篆)

癩狂 癩者顛也。謂發時顛動、異于平日、語言錯亂、喜怒無因、或笑或歌、或悲或泣、神迷意惑、穢

潔妄知、平日能言、發反沈默、平日沈默、發反多言甚、或行步不休、或復僵仆不起、俗呼為失心風。狂者剛暴猖狂、叫號罵詈、則踰垣上屋、踏火赴湯、不避死生、不知飢飽、倍常勇力、若邪所憑、俗呼為發狂、二者證既不同、因當各異、古人多以顛狂混稱、亦疎略矣。蓋人身氣為陽、血為陰、藏為陰、府之手足六經為陽、藏之手足六經為陰、形質可見者為陽。神志不可見者為陰、身半已上為陽、身半已下為陰、表為陽、裏為陰、凡此陰陽、但各兩相依倚、互為交通、而後氣血和平、府藏安靜、經脈調勻、形神合一、上下無厥逆之虞、表裏無盛虛之變、如是則微疴小疾、亦無自而生、況癩狂乎。今癩云重陰者、謂偏重干陰也。邪入干陰而陰實也。五藏為陰、神志舍于五藏亦為陰、設或柳鬱不伸、謀思不遂、悲哀不置、佗僚無聊、久久藏神凝結、情識昏迷、靈明何有、此癩之成于神志者也。一種因陽虛不能衛、外反下陷、而附並干陰。附並干陰、則陰氣實、下而不上、則升降素、而癩疾作矣。即脈經所謂、陽附陰則癩者是也。一種因三陽從頭下行。三陰經不得從兌上行而逆下、下則陰經實、亦似陽附陰之義、但此直指經脈云逆經、所謂癩疾厥狂久逆之所生者是也。一種因內有蓄血、令人如狂。或善忘、或如見鬼、如狂者、如狂而非狂。即癩狀也。血者神明之府、血蓄不行、神機大礙故見上證、血為陰、是亦重陰之實之義、謂之邪入干陰亦可。狂則反是。乃重陽之實之證也。素問宣明五氣篇云、邪入於陽則狂、邪入於陰則實、陽實則熱盛、陽性主動以盛熱、而加以動性、猖狂剛暴、不言可知。又生氣通天論云、陰不勝其陽、則脈流薄疾並乃狂。並則陽重陽實之義。故素問病能論云、狂生干陽也。又云。陽明者常動巨陽、少陽不動、不動而動大疾、此其候也。蓋言陽明之經脈常動、以陽明

爲水穀之海、其氣充盛、故常動巨陽、少陽之脈不動、下言一經之氣不如陽明之盛、故不動。不動者非不動也。不如陽明之常動也。今無論常動者、即不動者亦常動、而動且大疾、是爲狂病之候、觀此則狂病之爲重陽々實明矣。與上文脈流薄疾並乃狂、若出一義。又、靈樞通天篇亦云、陽重脫易狂、脫非陽脫、言重並干陽分、而若與陰脫離也。

又靈樞本神篇云、肝。悲哀動中則傷魂、魂傷則狂妄不精。肺。喜樂無極。則傷魄、魄傷則狂。狂者意不存人、夫肝屬木性、上達而藏魂、故魂主升陽也、悲哀而至十動中。則神情消沮、恍成秋金、而剋木、木受剋則肝氣傷、肝氣傷則魂無所歸。而欲其精明不忘、不可得矣。肺屬金、性收降而藏魂、故魂主降、陰也。喜樂而至干無極、則神情渙散、恍成夏火。而剋金、金受剋、則肺氣傷、肺氣傷則魂無所歸、一脈浮動、動成狂妄。又安能內照而意存人事哉

又靈樞經脈篇云、陽明病至、則惡人與火、聞木聲則惕然而驚、心欲動、獨閉戶塞牖而處。甚則欲上高而歌、棄衣而走。夫邪客陽明。則陽盛熱甚、人則增煩火、則助熱、故惡也。聞木聲而驚者、驚其相剋、故惕然心動也。閉戶塞牖、即惡人與火之義、甚則欲上高而歌、棄衣而走者、以四肢爲諸陽之本、熱實四肢健于登躍、故能上高而歌、身表爲諸陽之署。熱盛干身、意求涼爽、故欲棄衣而走。又靈樞大惑論云、衛氣不得入于陰、常留于陽、留于陽則陽氣滿、陽氣滿則陽踴盛。不得入于陰、則陰氣留、則陰踴滿、不得入于陽、則陽氣虛、故目閉也。其中言及二踴者以二踴之脈皆上會于目內眥、陽脈交于陰、則陽踴盛、故目閉。

靈樞癲狂篇、首敘目之内外及上下皆者、亦以癲則目閉、狂則目開、而明陰陽之所以不同也。是皆不易之理、然而兼痰兼火兼風者常十之五、以三種兼證而較審之、則癲必多痰、而狂必多火多風也。痰則多滯九竅、九竅從陰從藏、九竅不利、故多癲、風火多淫四肢、四肢從府從陽、四肢盛實、故多狂。陰陽分屬、二說覺更了然、其脈浮洪者、是爲陽脈、陽狂得之、與證相宜、即陰癲得之亦從陰轉陽、目裏通表之象、故勻爲吉兆、若沈而急、沈則入陰迫裏、急則強急不柔、是無胃氣之脈也。不論狂癲、凶殃立至。又不獨脈爲然、而證亦不可忽者。故癲狂篇言嘔多治沫氣下泄者、不治。又言癲發如狂者、不治、蓋嘔多沫沫脾敗、氣下泄腎敗、脾胃二藏爲人之先後二天、二藏已敗、自無生理發如狂者、陰竭于內、陽散于外、脫根外越、燈滅忽明之象、亦主死、如是則脈與證、又不可不參看也。(醫燈續焰)

癲病 癲有陰陽二種、正如小兒之急驚慢驚、陽癲先身熱、痰癲驚啼而後發、其脈浮洪、病屬六府、外在肌層、輕淺易治。陰癲身冷、不驚掣、不啼叫、卒然而發、略無先非、其脈沈搏、病屬五藏、內在骨髓、深重難治。昔腎皆謂、有痰有熱、客于心胃之間、因聞大驚而作。若熱盛雖不聞驚、亦作、是謂先有痰熱而後發癲也。恐未必然、總不如三因之論爲的云々。(醫燈續焰)

癲狂 愚按、手足動搖、而語言蹇澁者、謂之癲。冒罵叫呼、而乘力奔走者、謂之狂。不知人事、而行動失常者謂之痴。語言不出、而坐立默想者、謂之瘖。不知飢飽、而語言錯亂者、謂之瘋。又有不避親疎而忽然出言壯厲者、謂之妄語。寤寢呢喃、而自言心事者、謂之鄭聲。閉目偶見鬼神而心神不定者

謂之狐惑。凡此數病皆由神志不守、作事恍惚、一時痰迷心竅、更加火熱鬱結、痰涎壅盛、神思不安、卒然為病者焉。治宜清痰降火為要、次兼安泰心神益血榮脾之劑與之。(醫林繩墨)

癩

或曰、癩之一字何所取義。古論癩有五畜之別、今吾子俱不言及何也。答曰、癩字從間以病間斷而發、不若別症相連而發病也。此病一如癰狀、初有間一年而發者、或有間半年而發者、有間一二時而即發者、發後神清氣爽、與無病之人一般、故取義為癩也。但有陰癩陽癩之分、日發者為陽、夜發者為陰、未嘗有五畜之正名也。以發時形狀聲音宛如五畜以合五藏之相應則可、而治法並不拘此即屬痰屬火、方言其發病之末、猶未得致病之本也。(證治百問)

或曰、癩之發也。徒然而發、發時四肢搐搦、聲音變亂、頭搖目竄、角弓反張、口吐涎沫、而加五色、肢溫多汗、少刻即甦、毫不知發病之形狀、唯覺體倦而神色萎頓。目無神色若非痰火、如何有此怪病、吾子不言有致痰致火之根源反以消痰降火為非者何也。答曰、癩病雖小疾、而不能即愈者、正以醫家獨治痰火之標病也。凡論治癩、皆言痰在心經及經絡四肢、人見經絡四肢受病、故認定為痰、往々用安神鎮驚清心降火消痰為主治、余獨治此症所重者、是火。此火非心經之實火、本手少陽三焦手厥陰心胞絡虛火為病也。此火正屬龍雷之火、陰火也。蓋龍雷之火、發時必有暴風疾雨、附而併發。少頃風恬雨齊、一如平時、所以知火為本而痰為標也。(證治百問)

或曰、前說近理、固無所疑矣。但發病之情形、何故致此邪、答曰、此症必因平日正氣虛弱、精神不斂。偶有驚恐神氣散亂、魂魄不寧、龍雷之火、乘虛竊發、致厥陰之火暴乘心經、心君昏憤、迭傳于肺肝脾腎。便聲音卒然變換、繼則遊行左右十二經絡之中、編身振掉、彼此伸縮搐搦如此、循環一轉、漸々而退、還歸腎經、人事甦醒、口吐涎沫痰水、而愈。此實非痰也。因龍火徒發、混擾一番、使周身津液聚而為痰沫、隨氣上溢、溢而盤旋也。如是一番、正氣必虛、不覺相習而成癩病矣。久發則愈虛、虛則發之漸近也。火乘陽經為陽癩、火乘陰經為陰癩、如真元耗散者、必加兼症、今將平日應驗初中末三法、治之。再同指掌兼參、以多服藥為妙、外用針刺見効尤捷也。(證治百問)

癩狂 或曰本來無病、如何卒然而癩、徒然而狂。何因而感、亦有愈者、亦有愈而後發者、亦有終身不愈者、何也、答曰、此情志之所感、亦有陰陽之分也。病屬五藏為癩、癩為陰症難愈、病屬六府為狂、狂屬陽症、陽症易愈、凡有所觸、故易發也。(證治百問)

或曰、癩狂固有陰陽之分、論致病之因、不過痰迷心竅而神明變亂、既為心病、如何有藏府之分、幸明悉之。答曰、癩呆不語、語則惑亂、前後無敘、或清或亂、或正或邪、或立或坐、或睡如醉如醒、宛若無病、唯嘆息愁悶、怏々失志、恐怖畏懼、隨五藏受病而見症不一、雖曰痰迷心竅、心中自明白、忽然惑亂不清、初起只宜靜養靜攝、若泥干攻痰瀉火安神鎮心、及以冰石珠珀之藥、早服則終身不愈何也、癩病本志意不惕、狐疑自怯、思慮妄想、作為差誤、而自悔、心虛膽怯、而多疑、腎虛失志而自

愧、脾虛失意而不樂、肺虛多憂而喜悲、若肝虛抑鬱而善怒、此皆五藏之神志先虛、神明受病、雖有痰有火實不足之虛病、宜補不宜瀉（證治百問）

癲狂 有視聽言動俱妄、甚則能言平生未見聞事、及五色神鬼、此乃氣血虛極、神光不足、或挾痰火、

壅閉神名、非真有祟也、宜隨症治之。右癲狂似祟（證治彙補）

死症 顛發如狂者不治。氣下泄者不治、如狂者不治、山心之陽不勝其陰氣之逆、神明散亂、陽氣暴絕、故發如狂、猶燈將絕而復明也。下泄不治者、顛本邪入于陰、陰氣填塞于上、則氣亦逆奔而上、今氣下泄、將見腎氣虛脫故也。又神脫目瞪如愚者不治。（證治彙補）

癇病 先身熱掣癢、驚啼叫喊、而後發、脈瀉洪者、為陽癇、病屬六府、易治。先身冷、無驚掣啼叫、而病

發、脈沈者、為陰癇、病在五藏、難治。陽癇痰熱客于心胃、聞驚而作、若痰熱甚者、雖不開驚亦作也。宜用寒涼。陰癇亦本于痰熱、因用寒涼太過、損傷脾胃、變而為陰、法當燥濕溫補祛痰、右癇分

陰陽。（證治彙補）

死候 病後發癇者、不治。神脫目瞪如愚者亦不治。發時遺尿者死。（證治彙補）

癲狂 人生而有癲疾者、經曰、病名為胎病、此得之在母腹中時、其母有所大驚、氣上而不下、精氣並

居、故令子發為癲疾、以其病在頭顛、故曰顛、治之者、或吐痰而就高越之、或鎮墜痰、而從高仰之、或內消其痰邪使氣不逆、或隨風寒暑濕之法、輕劑發散、上焦部位針灸脈絡而導其氣、皆可使頭顛脈道流通、孔竅開發而不致昏眩也。（錦囊秘錄）癇病為五藏兼病、屬虛者多、非若癲為心病而多因於實也。蓋得之先天內外之傷、而邪氣深入於根本、以害其生氣之源、邪心混亂天樞不發、衛氣固留於陰而不行、不行則陰氣蓄滿、鬱極乃發、發則命門之相火、自下焦逆上、填塞其音聲、惟迫出其如畜鳴而已、遍身之脂液與脾之涎沫、迫而上炎、流出於口、百脈筋骨、不勝衝逆、故卒倒不知也。火氣退乃醒、此時若邪氣從病發而散、則不復作、若邪不發、仍與生氣相亂、或邪雖退而生氣之原尚虛、當時不治、則邪易入而復作也。蓋胎元之始、七節之傍、命門穴在其後、臍在其前、胎在其中、故子臍繫於胞蒂隨母呼吸母呼亦呼、母吸亦吸、通母生氣、食母之穀氣、以化育內外之形者、皆此腎間動氣所致也。當母受驚之邪、子在母腹、隨呼吸得之、與腎間動氣混合其中、當小兒初生之陽、如日方升、邪不易入、故癇未發、必待復感之邪入深而與所感母腹之邪、相搏、而後作、故母論大人小兒、有此疾者、縱得稟賦強壯、若發類而智愚者、終因邪害其生命之原、難得中壽、僅至四十、陰氣衰半而已、小兒質弱目瞪者、則不過歲月、遠亦難出成人之年。蓋腎間生命之氣、虛而不復、故不得壽也。其脈沈小急疾者、及虛而弦急者、死。（錦囊秘錄）

癇病 夫癇痰火所致、前人有稱為風癇者。劉河間山熱甚而風燥為其兼化、涎溢胸膈、而癯癡昏冒僵仆也。然病癇者、涎沫出於口、冷汗出於身、清涕出於鼻、皆陽蹻、陰蹻、督衝四脈之邪上行、蓋

腎不任煎熬沸騰、上行爲之也。晝發屬陽蹠、夜發屬陰蹠、此奇邪爲病、不係五行、陰陽十二經所拘、當從督、衝、二蹠、四穴、奇邪之法治之。(錦囊秘錄)

按癩病、古方或云風、或云驚癩、或云癩癩、由此疾與中風、顛狂、急慢驚相類、故命名不同也。源其所由。或在母腹中、受驚、或因聞大驚、而得、蓋小兒神氣尚弱、驚則神不守舍、舍空則痰涎歸之、或飲食失節、脾胃有傷、積爲痰飲、以致痰迷心竅、而作者、治法必當尋火尋痰而論、前人多用鎮墜清心之藥、固可以治熱、可以清痰、若有頑痰膠固者、此藥未易驅逐、在上者必用吐、吐後方用平肝之劑、如青黛、柴胡、龍會丸之類、更有痰實在裡者、亦須下之。故丹溪曰、癩屬驚與痰、不必分五等、大率行痰爲主、黃芩、黃連、瓜蒌、半夏、南星隨痰火多少治之。(錦囊秘錄)

癩 癩證往往生於鬱悶之人、多緣病後本虛、或復感六淫、氣虛痰積之故、蓋以腎水本虛不能制火、火氣上乘、痰壅藏府、經脈閉遏、故卒然倒仆、手足搐捻、口目牽掣、乃是熱盛生風之候、斯時陰陽相薄、氣不得越、故逆作諸聲、證狀非一、古人雖分五癩、治法要以補腎爲本、豁痰爲標、隨經用藥、但其脈急實及虛散者不治、細緩者雖久劇可治。(醫通)

癩癩狂 癩癩狂三證、各別皆屬於熱、而難經以癩爲癩、有重陽者狂、重陰者癩之說、於是後人以癩爲陰寒之證、亦有分癩爲陰陽二證、以陰癩爲寒者。夫癩症、或因誤治、而轉爲虛寒者有之、未有初起即屬陰寒者、劉宗厚謂、陰陽癩如小兒急慢驚、陽癩不因吐下、由痰熱客心胃間、因驚而作(舊有胎癩之說、謂兒在母胎、母受驚恐、驚氣傳子、生後猶未即發、因遇大驚、與所受子母之驚氣相搏而作、作則神越舍空、痰得入心而成此疾、劉氏說本此)若熱盛、雖不驚亦作、治宜寒藥、陰癩亦本痰熱、因寒涼攻下太過變而成陰、宜溫平補胃燥痰之藥、若謂不因壞證而有陰陽之分、則是指痰熱所客藏府表裡淺深而言、癩病豈本有陰寒者哉。(醫編)

癩狂 癩之患、雖本於心、大約肝病居多、狂之患、固根於心、而亦因乎胃與腎、此癩狂兼致之、故經曰、癩疾始生、先不樂、頭重痛、視舉目赤、啼呼喘悸、反僵、而及骨與筋皆滿、若脈大滑、久自己、脈小堅、急死不治、蓋不樂者、肝乘心也。頭重痛、肝氣上顛也。視舉肝之目系急也。目赤肝火上炎干竅也。啼呼喘悸肝滿乘心而惑志失神也。反僵急在筋也。及骨與筋脈皆滿、則其癩癩同、但無止時也。脈大滑久自己、陽搏於陰而脈滑、陰猶盛而也。小堅急死不治肝之真藏見也。惟及骨與筋脈皆滿、故骨筋脈皆能患癩、而症狀各異。(沈氏尊生書)

癩因謀望失志、抑鬱無聊而成、因陽氣遏抑不能疏越而得、要必因心神耗散、氣虛不能勝敵、故痰與火得猖狂犯上、而爲是二疾。此癩狂之原、本相同、癩爲久病、狂爲暴病癩病多喜、狂病多怒、癩有時人不之覺、是癩之輕者、狂有時人不及防、是狂之驟者、癩病痰火一時忽動、陰陽相爭、亦若狂之狀、狂病痰火經久煎熬、神魂迷昏、亦無癩之狀此癩狂之形勢、宜辨治癩先以吐劑、湧去痰涎、次進安神之劑、治

狂先奪其食、次下其痰瀉其火、此治癲狂之大要、而癲之病、有因驚得者、有因怒得者、有因心臟虛損、氣血不足者、有因痰迷心竅者、有因思慮過度者、有因心經蓄熱、或時煩躁、眼鼻覺熱者、有因陰虧不時暈倒、痰壅搐搦者、有因心氣不足、神不守舍者、有因大病後心虛神散、元氣羸弱者、有因痰火驟壅、發為怪異狀者、有因久年癲疾氣血但耗者、有癲疾愈而復發作無常者若婦人而患癲、皆山氣血不調、或心風血迷之故、狂之病有因上焦實者、有因陽明實者、有因熱入血室狂不知人者、有因火盛而為陽狂奔走者、有因心經邪熱狂亂、而精神不爽者、有因驚憂得之痰涎久留于心竅者、有因風涎暴作、氣塞倒仆者、有因失魂狀若神靈所憑者、有因失心失志、或思慮過多、積成痰涎、留在心包者、有因勞神太過、致傷心血、驚悸不寧、若有人捕漸成癲狂心疾者、有因悲哀動中而傷魂、魂傷即狂妄不精、不精即不正、當以喜勝之以溫藥補魂之陽者、有因喜樂無極而傷魄、魄傷即狂、狂者意不存人、當以恐勝之、以涼藥補魂之陰者、有癲狂初起者、有癲狂久不愈者、此治癲狂之詳法、或緣痰火鬱結而癲狂、或緣風痰迷心竅而癲狂、或緣癲狂而不得睡眠、其或癲或狂、均可審其原、而以方治之、此治癲狂之通略。(沈子尊生書)

癲 如癲因驚而得。驚則神不守舍、舍空而痰聚也。(丹溪心法)
戴云、癲者俗曰猪癲風者、是也。(丹溪心法)

(附錄) 癲症有五、馬牛鷄猪羊。且如馬癲張口搖頭、馬鳴、牛癲目正直視、腹脹。鷄癲搖頭反折喜驚。羊癲喜揚目吐舌。猪癲喜吐沫、以其病狀偶類之耳、非無痰涎壅塞迷悶孔竅、發則頭旋、顛倒、手足搐搦、口眼相引、胸背強直、叫吼吐沫、食頃乃甦。(丹溪心法)
顛狂 顛屬陰、狂屬陽。顛多喜而狂多怒、脈虛者可治、實則死。大率多因痰結於心胸間、治當鎮心神開痰結、亦有中邪而成此疾者、則以治邪法治之。原病或所論尤精。蓋為世所謂重陰者癲、重陽者狂、是也。大概是熱。(丹溪心法)

癲者神不守舍、狂言如有所見、經年不愈、心經有損、是為真病、如心經蓄熱、當清心除熱、如痰迷心竅當下痰寧志、若癲哭呻吟為邪所憑、非狂也。(丹溪心法)
虛妄 劉河間曰、虛妄者、以心火熱甚則腎水衰、而志不精一云々。据此一說、則凡以神魂失守而妄見妄言者、但是火證、亦不然也。夫邪火盛、而陽狂見鬼者、固然見之、又豈無陽氣大虛陰邪為鬼者乎。難經曰、脫陰者目盲、脫陽者見鬼、華元化曰、得其陽者生、得其陰者死。豈皆妄意之言乎。何自信之如此也。(景岳全書)

癲癇 癲癇之治、補瀉懸殊、北方風氣剛勁、見證多實、非金石悍烈、無以速克敵之威、南方水土柔弱、見證多虛、非攻中寓補、奚以保又安之策、分途異治、大都與中風不異。(千金方衍義)
初虞世曰、風眩癲癇、忌十二屬肉。(萬安方引保生信效方)

黎民壽曰、男子婦人顛癩者、未必皆山心經蓄熱、亦有因脾氣不舒、致痰飲上迷心竅而成此疾者。若服涼劑過多、愈見昏亂。(簡易方)

楊子瀛曰、癩癩、脈堅大而數者生、沈細者死、譫語、脈洪大者生。厥逆而脈微者死。(仁齋直指方)

癩癩、若氣下泄不止者、必死。此胃氣過絕、腸胃腠理閉塞、穀氣不能宣通於腸胃之外、故從腸胃中泄出也。(醫學綱目)

癩疾發、如狂走者、面皮厚敦々、不治(甲乙經、案、癩疾發如狂走、千金方作病發而狂、如讀如而)葛洪曰、凡狂發則欲走、或自高貴稱神聖、皆應備諸火灸、乃得永差耳。(肘後方)

王叔和曰、浮洪大長者、風眩癩疾、大堅疾者癩病。(脈經)

又曰、癩疾脈實堅者生、脈沈細小者死。(脈經○脈實堅病源候論作緊弦實牢。)

又曰、癩疾其脈沈小急實、不可治、堅急亦不可療(脈經○案、實病源候論作疾、堅急甲乙經注作小牢)

又曰、三部脈虛而絃急、癩病亦死、三部脈實緊急、癩癩可治(脈經)

又曰、尺寸俱浮、直上直下、此為督脈、腰背強痛、不得俛仰 大人癩病、小兒風癩疾脈來中央浮、直上下痛者、督脈也。動若腰背膝寒、大人癩、小兒癩也。灸頂上三圓、正當頂上。(脈經)

又曰、陰附陽則狂、陽附陰則癩、得陰屬腑、得陽屬臟(脈經○案上文曰、凡脈大為陽、浮為陽、

數為陽、動為陽、長為陽、滑為陽、沈為陰、澹為陰、弱為陰、絃為陰、短為陰、微為陰、是為三陰三陽也、陽病見陰脈者、死也。主死。陰病見陽脈者、順也、主生。關前為陽、關後為陰云々)

除嗣伯曰、食禁虎、兔、龍、蛇、牛、馬、猪、羊、雞、犬、猴、鼠、右十二相屬肉物、皆不得食、及以爲藥。牛黃、龍骨齒、用不可廢。(千金方)

孫子邈曰、論曰、凡諸百邪之病、源起多塗、其有種々形相、示表癩邪之端、而見其病、或有默々而不聲、或復多言而漫說、或歌或哭、或吟或笑、或眠坐溝梁、噉食糞穢、或裸形露體、或晝夜遊走、或噴罵無度、或是蜚蠱精靈、手亂目急、如斯種類癩狂之人、今針灸與方藥、並主治之、凡占風之家、亦以風爲鬼斷。(備急千金要方)

巢之方曰、風邪者、謂風氣傷於人也。人身內血氣爲正、外風氣爲邪、若其居處失宜、飲食不節、致腑臟內損、血氣外急、則爲風邪所傷、故病者五邪、一曰中風、二曰傷暑、三曰飲食勞倦、四曰中寒、五曰中濕、其爲病不同、風邪者、發則不自覺知、狂惑妄言悲喜無度、是也。(病源候論)

又曰、五藏處於內、而氣行於外、臟氣實者邪不能傷、虛則外不足、風邪乘之、然五臟、心爲神、肝爲魂、肺爲魄、脾爲意、腎爲志、若風氣經之、是邪干於正、故令恍惚。(聖濟總錄)

劉元實曰、癩者精神不守、言語錯亂、甚則登高罵詈、或至狂走。癩者發則仆地、嚼舌吐沫、手足搐搦、或作六畜之聲、頃刻即蘇癩者邪入於陰經、一曰、陽並則狂、癩者邪干於心、其處方用藥、亦皆

相類。(神巧萬全方)

許叔微曰、鐵粉非但化涎鎮心、至如摧抑肝邪特異、若多恚怒、肝邪太盛、鐵粉能制伏之、素問言、陽厥狂怒、治以鐵落飲、金制木之意也、此亦前人未嘗論及。(普濟本事方)

狂疾不可補。治得稍愈、切不可服暖藥、以峻補之、後平々補藥、亦須於本病上、有益乃可。(醫說引醫餘)

王執中曰、有人患癩疾、發則僵仆在地、久之方蘇、予意其用心所致、爲灸百會、又疑是痰厥、致僵仆爲中管、其疾稍減、未除根也。後閱脈訣「後」通真子有愛養小兒謹護風池之說、人來灸灸、癩疾必爲之。按風池穴皆應手痿疼。使灸之而愈、小兒癩恐亦可灸此。

嚴用和曰、夫癩癩者、考之、諸方所說、名證不同、難於備載、觀別錄有五癩之證云々、此五癩應乎五畜、五畜癩應乎五藏者也。發則旋暈顛倒、口眼相引、目睛上搖、手足搐搦、背脊強直、食頃便甦。

(嚴氏濟生方)

劉完素曰、罵詈、言爲心之聲也。罵詈言之惡也云々。今病、陽盛陰虛、則水弱火強、制金不能平木、而善去惡發、罵詈不避親疎、喜笑恚怒、而狂本火熱之所生也。平人怒罵亦同、或本心喜而無怒、以爲戲弄之、罵亦心火之用也、故怒罵者、亦兼心喜罵干人也、怒而惡發可噴者、內心喜欲怒干人也。(素問玄機原病式)

又曰、風癩之發作者、由熱甚而風燥爲其兼化、涎溢胸膈、燥燥而癩症、昏冒僵仆也。或驚風者、

亦由心火暴甚、而制金不能平木、故風火相搏、而昏冒驚悸潮搐也。(素問玄機原病式)

張從正曰、夫癩病不至於目眩如愚者、用三聖散投之、更用火盆一箇於暖室中、令汗下吐三法俱行、次服通聖散、百餘日、則愈矣。至於目眩如愚者、不可治、內經曰、神不得守謂神亂也。(治法雜論)

又曰、大凡風癩病發、項強直視、不省人事此及肝經有熱也、或有咬牙者、先用葶藶苦酒湯吐之、吐後可服瀉青丸下之。次服加減防風通聖散、顯咬牙證用導赤散治之、則愈如病發者、可用輕粉、白礬礬石、代赭石、發過米飲調之。經云、重劑以鎮之。(治法雜論)

又曰、風癩病至干呆證者、用三聖散吐之、於暖室中、勿令透風、可以汗吐下三法俱行、次服通聖散、百餘日則愈矣。(治法雜論)

汪茫曰、邪入於陽、轉則爲癩。(御覽引汪茫秘方)

凡人患癩狂、叫喚打入者、皆心經有熱、當用鎮心藥兼大黃、與之瀉數日、然後服安神及風藥、但得寧靜、即是安樂不可見、其瘦弱減食、便以溫藥補之、病必再作、戒之戒之、緩々調飯食可也。(張果醫說)一本及潛察集驗方、治病活法秘方並引御覽)

繼洪曰、心乃神明之舍、心既病。則神不守舍、言不擇理之常也。甚則神飄於外知人隱微。言人之禍福、多疑其附於鬼邪、固未必皆然、縱有之、亦固於心先病而神先亂、鬼邪乘隙而入、豈可信承而不信醫耶。(孫氏治病活法秘方同)況黃帝與岐伯、問答之際、已曰人生而癩者、在母腹中有所大驚、氣上而不下、精氣並居、故子發爲癩。又方書、謂陽虛陰實則癩、陰虛陽實則狂、癩狂乃陰陽虛實、

而爲之、可不以藥石均調之、乎。

（澹寮集驗方）

第病既有陰陽、藥亦當有補瀉、謹不可實實虛虛、故治各有方也。或因大驚使心氣不足、則神不守舍、言語善惡、不避親疎、此神明之亂也。心神既亂、有爲癲爲狂者、有爲驚癇者、或其在母腹中時、因有大驚、氣上而不下、驚氣並居其胎、故子發爲癲爲狂、又有所謂陽虛陰實則癲、陰虛陽實則狂云々。（治病活法秘方）

方）

又曰、患風癲者、只在二三年間、即可治。久則即頑痰入心、則難治矣。治之之法、先以吐痰爲急。

次灸四際、左右手大指去爪甲角如韭葉、兩足大指、亦如之。各七壯、或五壯、漸腹化痰鎮心藥、如尋常十日一發、腹藥復漸退、至中夕一發、則是已效、半年可愈、記一婦人心恙、一年一發、爲灸勞宮二穴間、使二穴陽谷二穴百會一穴、自此竟不發。（治病活法秘方）○本事方、張果醫說可參。

孫允賢曰、癲癇之疾、諸書所載、並作一證治之。愚謂、癲與癇、難以一概而論、故癲者全歸於心、癇者歸於五藏、所謂癲者神不守舍、狂言妄語、如有所見、動經年歲不得即愈、若心經有損、是爲眞病、如心經蓄熱、當清心除熱、如痰迷心竅使然、又當下痰而寧心志、婦人因血氣迷心、或因產後惡露上衝、而語言錯亂、神志不安者、當隨其證治。（南北經驗醫方大成）

李仲南曰、熱狂、脈實大生、沈小死。（永類鈴方）

朱震亨曰、因痰火驚、血氣者、身之神也。神既衰乏、邪因而入、夫血氣俱虛、痰客中焦、妨礙不得

運用、以致十二官各失其職、神聽言動、皆有虛妄、宜吐之而安、肺入火爲譫語、肺主諸氣、爲氣所鼓舞、火傳於肝、爲之尋之撮空、胃中大實熱、重干心肺、亦能譫語、宜降火之藥。驚、其神血不得寧也。積痰鬱熱、隨動而迷亂、心神無主、有似邪鬼、可先吐之後以安神丸主之。佐以平肝之藥、膽主驚故也。（脈因證治）

又曰狂言譫語鄭聲辨。狂者開目、與人語所未嘗見之事、爲狂也。譫語者、合目自言日用常用之事、爲譫也。鄭聲者、（醫鑑作聲顫）身動無力、不相接續、造出出千喉中、爲鄭聲也。又蓄血證則重復語之。（同上）

又曰驚痰宜吐、大率行痰爲主、用黃連、南星、瓜薑、半夏、尋火尋痰、分多分少、治之無不愈者、分痰與熱、有熱者以涼藥清其心、有痰者必用吐藥、吐後用東垣安神丸、吐後亦用平肝之劑、青黛、柴胡、川芎之類、（丹溪心法類集）○丹溪心法之龍會丸、正宜服之、且如癲因驚而得、驚則神不守舍舍空而痰聚也）

又曰癲不必分五等、專主在痰、多用吐法。（丹溪治法必要）

又曰人壯氣實火盛、顛狂者、不用正治、或朴硝、水水飲之、虛火盛狂者、以恙湯無之、若投冰水立死。火急甚者、生甘草緩之、能瀉火、參求亦可、凡氣有餘是火不足、是氣虛。（同上）

戴思恭曰、癲者、俗曰猪癲風是也（金匱鈎元）

又曰癲有五、馬牛鷄羊猪、五者以其病狀偶類之耳、無非痰涎壅塞、迷悶孔竅、發則頭旋顛倒、手足

搐搦、口眼相引、胸背強直、叫吼、吐沫、食頃乃蘇、俗止呼曰發豬癇疾發鷄風、宜星香散加全蝎三箇下酥角圓。(證治要訣)

又曰、癲狂由七情所鬱遂生、痰涎迷塞心竅、不省人事、目瞪不瞬、妄言叫罵、甚則踰垣上屋、裸體打人、當治痰寧心、宜辰砂妙香散、加金箔真珠末、雜青州白圓子末、濃薑湯調下、吞十四友圓、滑石六一湯加真珠末、白湯調下、有病癲人、專服四七湯而愈。蓋痰迷爲癲、氣結爲痰故也、他如健忘、如驚悸、如怔忡、五癲亦宜用此、如癲狂不定、非輕劑所能愈者、宜太乙膏及抱膽圓。有婦人、狂言叫罵、歌笑不常、似崇憑依、一邊眼與口角弔起、或作癲治、或作心風治、皆不效乃是舊有頭風之疾、風痰作之使然、用芎辛湯加防風、十分、數服頓愈。(同上)

又曰、失志者、由所求不遂、或過誤自咎、懊恨嗟嘆不已、獨語、書空、若有所失、宜溫膽湯、去竹茹、加入參、拍子仁、各一錢下定志圓、仍佐以酒調辰砂妙香散。(同上)

劉純曰、按癲病、多由風痰膠固胸膈上下、故大法先宜吐之、吐後可用清熱之藥、如東垣安神丸、守真龍會丸之類、皆可服。不獨通聖散也。痰實在裏不解、宜導痰清熱、亦不獨鴻青丸也。(玉機微義)吳球曰、癲癇之病、謂之邪病、顛則風邪全歸於心、癇則邪流五臟然、其人身氣血足中氣和、何邪之有、人之六欲無窮、損傷中氣、鬱結傷於心脾、使中氣不運、故多痰、心無血生、故多火、痰火既盛、或因情欲失志、而風火怪症、隨之入其五臟、則類羊鷄牛馬猪之吠嘶、以應乎心肝脾肺腎也。古方治法、風火顛狂、皆謂有餘、每以祛風瀉火金石之劑、從而治之、效者有之、因而綿延者、亦有之、予

考其疾、未有不因臟神先虛、然後風邪得入、實者邪氣實、虛者正氣虛、不可偏執一見、但當審人虛實冷熱、然後清痰降火安神養血、獲效者多矣。(諸證辨疑)

又曰、癲癇者、顛則亂心、癇則抽搐、患由風火鬱、痰迷於心竅、神不守舍、故爲三顛、風痰邪熱、鬱結脾肺腎心經、而應五癲、發爲牛馬鷄猪羊等聲狀、治癲則疎風利痰、順氣、防風、天麻爲君、膽星、全蝎、姜蠶爲臣、茯苓、甘草、羌活、枳殼爲佐。皂角爲使。顛則安神定志養血鎮心。宜遠志、茯苓爲君、栝子仁、酸棗仁爲臣、人參、川、歸、麝香爲佐、辰砂爲使。唯久瀉不食、形脈無神者、不治。(活人心統)

婁英曰、狂謂妄言妄走也。癲謂僂仆不省也。又自一症、今以狂入脾部、癲入肝部、然經有言狂癲疾者、有言狂互引顛者。又言顛疾爲狂者、此間又皆狂癲兼病、今病有妄言妄走頃時前後僂仆之類、有僂仆後妄見鬼神半日方己之類、是以顛病兼病者也。(醫學綱目)

方隅曰、舉要曰、癲狂陽盛。難經曰、重陰者癲、重陽者狂。經曰、多喜爲癲、多怒爲狂。二說不同。大率察病之因、爲求望高遠不遂者有之、或因氣鬱生痰而痰迷心竅者有之、或有氣鬱生熱而極生風者有之。又曰、狂爲痰人、實熱盛也。癲爲心虛血不足也。

癲者行動如常、人事亦知、但手足戰掉、語言蹇澁、頭重身輕、其脈浮滑而疾。狂者棄衣登高、踰牆上屋、罵詈叫喊、妄見妄聞、其脈沈緊而實。癲由心氣之不足、宜以養血清痰之劑、如二陳湯、加全蝎、白附子、防風、黃芪、當歸、秦艽之類、狂則痰著中焦胃中實熱、以二陳加大黃、枳實、黃連、

瓜婁子之類。(醫林繩墨)

又曰、愚按手足動搖、而語言蹇澁者、謂之癩。罵詈叫呼、而乘力奔走者、謂之狂。不知人事而、行動失常者、謂之痴。語言不出而坐立默想者、謂之癡。不知飢飽、而語言錯亂者、謂之瘋。又有不避親疎而忽然出言壯厲者、謂之妄語。宿寢呢喃、而自言心事者、謂之鄭聲。開目偶見鬼神、而心神不定者、謂之狐惑。凡此數病、皆因神志不守、作事恍惚、一時痰迷心竅、更加火熱鬱結、痰涎壅盛、神思不定、卒然為病者、焉。治宜清痰降火、次兼安養心神益血榮脾之劑、與之。如初用蘇合香丸散理痰氣、次用牛黃清心丸、安養心神、治無不效者也。若用煎劑如二陳湯加苓、連、膽、星、歸、求犀角亦可。(同上)

又曰、治法主義、狂由熱至、當清其熱、而利大便。癩因痰至、當開其痰而養血氣。(同上)
又曰、夫癩有五。合五臟之氣而為病也。內經曰、巨陽之脈、則首腫頭重、而不能行、發為胸仆、是皆陽氣逆亂、痰涎壅滯腑臟、卒然眩仆、卒然暴仆、不知人事、氣復返則甦、時作時止、而手足動搖者此癩之症也。雖有牛馬豬羊雞癩之異名、其法宜理氣清痰降火為要、遂使氣清、則痰亦可降。而癩亦可止也。用二陳湯加苓連天麻南星枳椇山查全蝎之類。脈經曰、癩癩之脈、浮洪大長滑大堅疾、痰蓄心狂。(同上)

又曰、愚按癩症有五、應乎五臟、合乎五畜之所發也。五嘗見之、心癩因驚而發、心煩悶亂、躁擾不寧、舌多吐出、涎沫滿口、來時速而去亦速也。肝癩因怒而起、怒不得越痰涎壅盛、口多喊叫、面青

目瞪、左脇作疼、而中氣作悶者也。脾癩者、飲食失節、飢飽無時、逆於臟氣、痰蓄生癩、發則手足搐搦、唇掀動、痰沫外出、卒然而仆也。肺癩者、因而憂悲太重、痰涎入肺、發則聲啞啼泣、旋運顛倒、目睛上瞪、惡寒拘急、氣下則甦也。腎癩者、因而淫慾太過、內氣空虛、臟腑不平、相火妄動、鬱而生涎、閉塞諸經、而作癩也。其症腰背強直、頭眩旋運、因恐而發、此腎癩也。大抵五臟之癩、各隨五臟所治、皆以清痰降火為要也。或加以五臟補養之藥、有風者驅其風、有痰者豁其痰、因氣者清其氣、因驚者鎮其驚、各隨所得之由、而加減用治可也。設或陽癩者、發之於晝、當以壯陽為光。陰癩者、發之於夜、亦以益陰為要、俱不出乎二陳為主。雖然因驚用乎安神定志等丸、因風用乎續命三化等湯不若二陳為主加以引經清痰養血自無不治之理也。(同上)

又曰、恍者、疑而未定之象。惚者、似物所有之謂。蓋恍由心之所感也。惚由心之所懼也。多思則見恍、多慮則生惚。恍則如有所似、在前在後、似物非物、疑而未定之象、皆因神氣不足神志之不寧也。治宜寧神定志之劑如朱砂安神丸之屬、若惚者、心無所主事無所周、決而決定、疑而未通、為物所有或見于前、或恍于後、若鬼若神、恐懼不寧之象、此因心氣空虛、精神之不守也。治宜養心壯志之劑如養心湯、定志丸之類。(同上)
又曰、愚按、志由心出、事由心定、心氣不足、則神志不寧、而果決之無力矣。其人昏々惛々、精力頹敗、遇事而有恍、遇事而有惚、何況恍惚之症、有不至者乎。曉如顏子體聖人之道、則曰、瞻之在前、忽然在後、非聖人之道、而在前後之不定也。實顏子之心、而好道之誠、如前如後之所在也。朱

子又曰、在前在後、恍惚不可為象、此理之可明、而恍惚之症、治之無難矣。(同上)
又曰、治法主意、悅因心不定、惚因心不安此皆心血之虛也。宜以寧神養血為要(同上)
朱震亨曰、五志之火、因七情而起、鬱而成痰、故為癩癧狂妄之證、宜以人事制之、非藥石所能廉也。須診察其由以平之。怒傷於肝者、為狂為癩、以憂勝之、以恐解之、喜傷於心者、為癩為癧、以恐勝之、以怒解之、憂勝於肺者、為癩為癧、以喜勝之、以怒解之、思傷於脾者、為癩為癧、為狂、以怒勝之、以怒解之、恐傷於腎者、為癩為癧、以思勝之、以憂解之、驚傷於膽者、為癩、以憂勝之、以恐解之、悲傷於心胞者、以顛以恐勝之、以怒解之、此法惟賢者能之耳。(醫學正傳引活套)
虞搏曰、內經曰、巨陽之厥、則腫首頭重、足不能行、發為胸仆(搖其目而暴仆也)是蓋陽氣逆亂、故令人卒然暴仆、而不知。人氣復則甦、此則癩之類也。又曰、陽明之厥、則、顛疾、欲走呼、腹滿、不得臥、面赤而熱、妄言。又曰、甚則棄衣而走、登高而歌、踰垣上屋、罵詈不避親疎、是蓋將之於陽氣太盛、胃與大腸、實熱燥火、鬱結于中而為之耳。此則顛狂之候也。曰顛、曰狂、分而言之、亦有異乎。難經謂重陰者顛、重陽者狂。素問註云、多喜為顛、多怒為狂。然則喜屬於心、而怒屬於肝、乃二臟相火有餘之證。難經陰陽之說、恐非理也。大抵狂為痰火實盛、顛為心血不足、多為求望高遠、不得志者有之、癩癧獨主乎痰、因火動所作也。治痰去癩、宜乎吐、狂宜乎下、顛則宜乎安神養血兼降痰火。雖然此三證者、若神脫而目瞪、如愚痴者、縱有千金我酬、吾未如之何也已矣。(醫學正傳)
又曰、顛症屬不足、狂癩屬有余、悉由痰迷心竅、胃熱結燥、心胃二經主病、其症大便秘結者、由胃

與大腸相近故也。然顛多喜笑乃心血不足、尙知畏懼、狂多忿怒、由痰火實盛、人莫能制經。所謂陽明病、甚則棄衣而走、登高而歌、踰牆上屋、罵詈不避親疎是也。癩癧不必分、專主於痰、痰涎擁盛火熱沖動而作。治法、顛宜歸身生地棗仁石菖蒲連芍為君加清熱消痰藥、仍服殊砂安神丸、狂宜三黃石膏黃連解毒、日服玄明粉三錢、甚則牛黃丸三承氣湯加減、急下之。癩癧未發時、即行吐法、湧盡痰涎、隨服二陳加黃連南星萸仁、尋火尋痰、分多少而治、有熱者用涼藥以清心、有痰者、必用吐、吐復用東垣安神丸、及平肝之藥、青黛柴胡川芎之類。又有因驚而成癩者、蓋心藏神、驚則神不守舍、舍空而痰聚也。治法如心經著熱、當清心除熱、如痰迷心竅、當去痰寧心宜大吐大下而愈。(蒼生司命)
汪機曰、癩之為病、大抵與癩相似、但癩久而不甦、癩者則醉時復甦、發過如故、原其所由、有因中風不治、鬱液成痰、痰因火動、上泛閉於心竅而致者、有因驚恐、以致神不守舍、神舍空虛、邪乘虛入襲而致者、其狀卒倒無知、或口吐涎沫、隨邪所入五臟、而作五畜之聲、丹谿謂、此症大率宜乎尋痰尋火而治、其論固是、但痰火不能自生、必由中氣不充、以致津液凝結、成痰鬱而為火、且驚亦是氣奪、邪乘虛入、皆中氣虧敗所致、治法必須調補中氣為主、導火尋痰為標、不然徒知知標而不知本、古法雖謂大法宜吐、但此法施於形氣壯盛之人、多得獲效、若用於神氣怯弱之輩、必反為禍、況吐又是劫法、只可治標、不可理本、學者必須調補中氣、為主、苟能中氣充實、其痰自除、其火自息、不然中氣愈虧、痰火愈熾、必在臨症規形、或標本兼治、不可執一。(醫學原理)

朱震亨曰、癩症多因痰結心胸之間、宜開痰鎮心、如中邪者、以中邪法治之。如神不守舍、狂言妄作、經年不愈者、乃心經著熱、治法當清心除熱、如痰迷心竅、宜豁痰清心或吐或下、或以人事勝之。如因怒傷肝而致者、宜以憂勝之、餘倣之。(同上引活套)

方廣曰、癩症病本痰熱、宜用辛寒之劑治之、追風丹、引神歸舍丹、驚氣丸、三方皆用附子何也。蓋癩痰結於心胸之間、每運火動則發、非附子熱性走而不守、而能流通結滯、開散頑痰可也。此從治之法、乃劫劑也。不得已而用之。亦猶中風之證、本風火陽邪、而用烏附類也。丹溪云、癩症尋火尋痰、分多分少、則此三方、只宜施之於肥白多痰之人用諸藥而不致者、若夫黑瘦多火之人、不宜用也。(丹溪心法附錄)

王永輔曰、癩時作時止、與顛狂之失心妄作、經年不愈者、非一類也。

徐春甫曰、大凡癩病多是肝經、風火之勝、痰鬱隔間、故先吐之汗之、次服瀉青丸下之、再次服東垣安神丸、守真龍會丸之類、不獨防風通聖散瀉青丸而已。(古今醫統)

又曰、癩證多本風熱、而謂有陰陽寒熱之殊、蓋由病之遠近、故有虛實寒熱之分、病之近者、可以涼劑吐利之治也。病之久者、先見涼藥之過不、免有虛實、寒者當審之、而可以施溫平補胃之劑、而去病之根端、不外吐痰之大法耳。(同上)

論曰、風恍惚者、以風邪經於五藏、其神恍惚而不寧也。蓋五藏處於內、神之舍也。藏氣充足、神王而昌、則邪不得干藏、氣虧損邪能乘之、則神魂魄、意無所持守、故恍惚不寧也。(聖濟總錄)

虛和曰、內經言顛而不及癩、諸書言癩癩、或言癩、狂、風癩、風癩、命名不一、夫癩病時作時止、其與癩狂之失心妄作、經久而不愈者、本非一類、故今以癩名篇而癩狂附也。(丹溪醫書纂要)

又曰、諸書有以病因風驚食爲三癩者、有以病象馬羊鷄猪牛犬爲五癩者、夫三癩專主小兒言、故有未該盡者、五癩雖有分配五藏之說、於經既無所據、而治法又未見有五者之分、此所以不必分五也。(同上)

又曰、重陰重陽之分、難經之言也。原病式本素問之論、以明癩狂是熱病、而重陰之說非也。(同上) 朱震亨曰、原病式所論、甚精。蓋爲世以重陰爲癩、重陽爲狂也。大槩是熱耳。

龔信曰、夫癩者喜笑不常、而顛倒錯亂之謂也。狂者狂亂而無正定也。故心熱盛、則多喜而爲癩也、肝熱盛、則多怒而爲狂也。甚則棄衣而走、登高而歌、踰垣上屋、罵詈不避親疎、是蓋得之陽氣太盛、胃與大腸實熱、燥火鬱結於中而爲之耳、此則顛狂之候也。大抵狂爲痰火實盛、治當大吐大下。顛爲心血不足、多爲求望高遠不遂其志者有之。(古今醫鑑)

繆存濟曰、總脈、洪長伏三脈、服妙香丸、絃細緩三脈、服五生丸、○不治脈、絃、虛、長。(識病捷法、癩病門)

又曰、凡治癩、前人用清心鎮墜之藥、雖治熱清痰、若有頑痰膠固、此藥難除、病在上必先用嘔吐、後方宜服此劑、如痰實在裡亦須下之。(同上)

又曰、可治脈、脈來虛細、難治脈、脈來實大。(同上、癩狂門)

吳寬曰、癩沈痼也、一月數發者易治。週年一發者、難治。此虛實之判也。實者即攻之、虛者先補、可也。(醫方考)

又曰、癩狂皆失心也。經曰、主不明、則、十二官危、故視听言聽、皆失其職、神病者宜瀉其實、久病者宜安其神。(同上)

又曰、癩病者、青邪之併于肝。狂病者、責邪之併于心也。此皆實證、宜瀉而不宜補、故用大黃以瀉之、取其苦寒、無物不降、可以瀉實、又必數日、後方可與食、但得寧靜便為吉兆、不可見其瘦弱減食、便以溫藥補之。及以飲食飽之病必再作、戒之戒之。緩與之食、方為得體、故曰、損其穀氣、干病易愈、所以然者、食入于陰、長氣干陽故也。(同上)

孫一奎曰、諸書有言癩狂者、有言癩癇者、有言風癇者、有言驚癇者、有言驚癇者、有分癩狂為二門者、略無定論、究其獨言癩者、祖內經也。言癩癇言癇狂者、祖靈樞也。要之癩癇狂大相逕庭、非名殊而實一之謂也。靈樞雖編癩狂為一門、而形症兩具、取治異途、較之干癩、又不相伴矣、諸書無云、大人為癩、小兒為癇、此又大不然也。素問謂癩為胎病、自母腹中受驚所致、今乃曰小兒無癩乎。癩病大人歷々有之、婦人尤多。予故據經文、分為三目、庶治者有所辨別云。(赤水玄珠緒論)

又曰、夫狂者猖狂之謂也。言其病之發猖獗剛暴、有如傷寒論陽明大實發狂、罵詈不避親疎、甚則登高而歌、棄衣而走、踰牆上屋、持及執棍、日夜不止、押之則笑、忤之則怒、如有邪佞附者、是也。(同上)

又曰、夫癩癇時發時止者、是也。有連日發者、有一日三五發者、或因驚寃因怒而動其痰火、發則昏昧不知人事、耳無所聞、目無所見、眩仆倒地、不省高下、甚而癱瘓抽搐、目作上視、或口眼歪斜。或口作六畜之聲、將醒時。必吐涎沫、彼癩狂皆無以上證也。用此辨之、亦易詳明、大抵皆痰火所致。(同上)

又曰、靈樞云、癩癇瘧癯、不知所苦、兩躄之下、男陽女陰、(後人以癩癇為二門者、邇此也)又曰、暴擊癩眩、足不任身、取天柱(赤水玄珠)○後人言風癇者、邇此也

又曰、靈樞曰、癩疾者、疾發如狂者、狂不治。(赤水玄珠)○據此言、疾發如狂者死、不治。可見癩狂非一病也

又曰、林憶公曰、狂為痰火盛實。癩為心血不足、狂病宜大吐下、據此言、心血不足者乃醫治攻剋太過、以致中氣餒弱、而神志不定、非癩病一起、初便有此不足症也。(同上)又曰、治癩、始以多用攻痰法、繼以養心壯神補劑、收功。(同上)

葉雲龍曰、黑瘦人多火盛痰痰、脈沈數、不比肥人脈浮大無力、此最宜辨、痰火盛者、宜清心降火化痰為主、但痰火亦分多少治。古法用二陳加瓜蒌南星黃連探吐。吐後服硃砂安神丸、以鎮固之、但化痰必先須氣、順氣必先調中、頑痰膠固、非辛溫熱藥為佐、何以開導。故錢仲陽治癩患、曾用東垣益黃散、次服腎氣丸取效。可為師法。(士林餘業醫學全書癩門)

又曰、洪數脈狂、微瀋脈顛。皆帶滑痰沈伏難治。(同上)
又曰、有陽明厚味燥火鬱結於中而發狂者、此則宜涼膈加大黃下之、有因服食燥熱而發狂者、三黃石膏湯、有因醉飽發狂者、止用鹽湯吐、次服少調中湯、黃連瓜薑半夏甘草各等分服。(同上)
又曰、治顛狂、須知有同異之辨、顛乃陰虛血少、心火不寧、故滋陰寧神之劑、不可少狂則心火獨盛、陽氣有餘、痰火壅盛而然、故小調中並三黃丸為要藥、古謂治狂專於下痰降火、治顛兼乎養血安神是也。如經年心經有損者不治。(同上)
論曰、溫病熱入腎中、亦為瘧、小兒病痲熱盛、亦為瘧、凡風痞暴尸厥及鬼魔不寤。皆相似。宜精察之。故經言久厥則成癩、是以知似也。(千金方)

心臟風邪 夫心為帝王、神之所舍、諸藏之主、不受外邪、若人動止非宜、寒暄失節、臟腑內損、氣血外傷、風邪乘虛入於心經、則令人心神不定、性識失常、乍喜乍驚、或歌或笑、精神離散、悲樂不怡、故名風邪也。(太平聖惠方)

心風狂言 夫風熱博於陽經、入於血脈、血實則主熱、榮氣溢塞、不能通流、遂使心神煩亂也。心主於神、候於舌、神是心主、舌是心官、語言機關、皆由心出、今既壅熱、又風邪相攻、故令真性錯亂、精神不守、遂則狂言也。(同上)

心風恍惚 夫心臟者神之所止也、安靜則神爽、煩亂則病生、是以虛損之人、血氣不足、風邪所乘、入於手少陰之經、則神思不安、志意錯亂、故令恍惚也。(同上)

心風 心風者、精神恍惚、喜怒不常、言語時或錯亂、有癩之意、不知癩之甚、亦痰氣所為也、宜星香散加石菖蒲人參各半錢下毒星回。(證治要決)

徐春甫考、心風病、諸書鮮有載之、而多附癩癰門候、混同論治、心風難出於世俗之稱、深中病情、誠為切當、古人謂風善行而數變、風痺為不仁、此曰心風者、非若外風入中甚、言其變常無定、恍惚不仁、而心之病、誠若風之魔也、此皆七情五志、久逆所生、而與癩癰、則又不同矣、癩狂癰證、主於火熾、風痰之盛而寢涎及於心、屬實者多心風、則七情五志、久逆不遂。戴人所謂肝屬謀、膽屢不決、屈無所伸、怒無所洩、心之官則思、甚則心血日涸、脾液不行、痰迷心竅、則成心風、屬虛者多治法、須以七情相勝五志遂、心養血豁痰、引神歸舍、標本兼治、此疾可愈矣。致若混同癩癰攻治、是謂虛虛、而速其死也。噫。(古今醫統)

心風初作、多屬虛候、何則思慮傷脾、則穀氣寢少、血液日虧、則心神慢散、神不守舍、卒成心風、故知其始皆屬虛也。歸脾養心湯、定志丸之類、至於病久、則心志變、而美惡不知、無思無慮、飲食如故、殺氣頗增、病根已固、鬱痰不解者、可用子和法治之、隨證調理、無不愈也。(同上、治心風病要分新久)

心風病、貴者爲難、膏梁素積、耗散良多、一經病作、則正氣虛、而邪氣盛、所以難、賤者爲易、素

甘淡蒲、票受頗厚、雖是病比、則正氣實而邪氣輕、所以易(同上)

治心風以五志誘之。然後藥之取效易、五志誘之者如求利途病者、誘之金銀、或詐以惠之、或詭以遺

之、而先定其心志、然後濟之以藥、是得治之要也。(同上、心風病有貴賤之難易)

心風者何。蓋君父在心、因怒發之、相火助盛、痰動于中、脇氣上攻、迷其心竅、則爲癩爲狂、所怒之

事、膠固於心、輒自談失其條序、謂言之心風與風相干也。若痰不盛者、則有感亦輕。(壽世保元)

戴思恭曰、有心經蘊熱、發作不常、或時煩躁、鼻眼自有熱氣、不能自由、有類心風、稍定、復作。

參蘇飲加石菖蒲一錢。

徐春甫曰、脈寸關微、間而歇至者死。微而滑者生。浮而濇者難治。(乃血氣不足、而神蕩於外)絃大

者可攻之、虛而無力者宜補、滑疾者痰甚在寸、宜吐之、關滑可下。(古今醫統)

心疾 韋綬李蟠俱以心疾廢。綬常疑遇毒、鎖井而飲、李益少而疑病心(一本作韋嘗疑、過智井而飲、李益少而多疑病心)亦心疾也。心靈府也。爲外文所中、終身不痊、多思慮多疑惑、病之本也。(張果醫說引國史補、又卷七有疑病條、可攷)

精神病實證論としての文獻の價值

一、特質集約の經驗論

精神病理の發生學的研究が、本邦に渡來普汎となりてより、本邦醫人の間に病患に對する雜多の經驗を重ねて、自ら各種の證候を集約して、一種の特質集約の歸納論を齎らせしは、當に然るべき結果なりと謂ふべし。之を例せば、香川修德の一本堂行餘醫言卷五の如きは、良く此形態の提唱を試みんとしたる好箇の例證となすに足るべし。香川修德は、其概念論に於て、癩の名義を以て、驚、狂、癩病の總名をなし、後、徐ろに各病發作、及び經過、治不治と觀察を累ね、古名目の集約が終に此處に集約して、而して其標型を表はさんとする論理を強調したり。既に病名沿革考に於て、修德が抱持を破らんとし、風疾の條下に附説して

太冲、癩者驚癩狂之總名。亦不博考所致也。と駁したるも、太冲の意志は、單に自己の經驗を基として、雜多なる病名を集約したるものに過ぎず、此集約の果して正當なるや否は、事素より時代的語義感の厚薄にも依るべきものならんも、要するに一般驚、癩、狂病の發作するもの、悉く所謂、癩の氣味を帯びざるものなしといふに過ぎず。然しながら癩證を歸納して解釋せる條を見れば、亦、悉く狂、癩、驚各症に通じて、即ち癩氣なるものが、併せて一切の精神疾患の根本たり、又發作の特質た

り、其差異として採る所、一に急激なりや沈痼なりやの經驗觀察に過ぎざるが如き論理を持せるを以て、換言すれば、集約標型の特殊なる觀測以外、更に翻つて本邦醫人の間に於ける精神疾患に對する古名目解註の智識をも窺ふ便を有する文獻の一に屬す。

癲を、驚、癲、狂の總名となし、之に加ふるに、驚、癲、狂、及び癡、體、不食、不大便、不寢、悸、等の表現證候を詳論したり。是等の名目は、既に疾患形象を表顯する傳統の名義なること、再び茲に言ふを要せず、この間多數の名義を傳來の醫書より採録して、自らの論理が斯の經驗に據出したる後、これを集約せるの事實を強陳せんこと。字義に關する解註は姑く放置すとも、列舉せる名目は皆何れも精神病發現の一形象たり、即ち以て特質約括の規範に容るべきのみを爲せしは、本邦疾患處理史上、又重要な一文獻とするに足るべし。

此書を見るに、癲證の兼る所最衆廣なりとして、癲證發作の形態を

迫壓反搖證狀(新造術語)

の下に一括して詳記したり。迫壓反搖とは、即ち狂病發作の現象が、多く衝動の抑壓せられ、迫害、壓痛の迷戀感念次第に濃厚となり、豫覺が必ず事實的錯覺となりて周囲を繞ること知るや、之に反して言動悉く逃脫隱匿せんことするの蠢動をなすの形態を指す。反動は何れも逆衝するの義を有すれども、反搖は語義に於て反動よりも尪弱なり。反搖するといふこともこれ迫壓の下に於てのみ、反動の行爲が常に迫害、被襲を破壊すること多きものなるに、反搖は遂に單なる病的動搖に過ぎず。即ち

迫壓反搖證狀の重なる形狀としては

自我自執に偏轉する病的現象より

- 一、獨譫妄語
- 二、倫常超越
- 三、拮据反覆
- 四、怯尪惡人
- 五、夢現交錯
- 六、膠潔奔行
- 七、悒悶無放
- 八、自棄敢行

等の諸候を見ることなすべし。而して修徳は如上の現象を具さに記して曰く

似是證候千道百出、不可擧數。無慮皆係屬一癲證中矣。

と斷じ、更に語を亞ぎ

又有諸病證中、帶癲氣者。又有諸證未治、漸爲内虛、忽發大癲者、此多不救。又妊中發癲者、名妊癲、輕者可治、重者必死。産後亦同。及其病之漸進也、癲倒昏塞、不省人事、故謂之癲。又有自始得病、既即運倒者。蓋癲其總名、而癲亦通新故輕重而稱之但癲以病閑簡慢爲呼。癲以癲倒顛越成稱。

云々

即ち諸病證中、痾氣を帶ぶるものを經驗して、あらゆる機會に精神疾患の發作を見るべき萌芽ありとなし。諸證完治せずして遂に大痾を惹起するものをも注意したり。要するに、輕微なる痾氣が、毎に時間的過程を伴携しつつ發作する刹那に、名目としての痾病、癲病が呼稱の意義を確定するといふに止まる。激越顛倒するを以て癲となすも、素と痾の一變狀に過ぎずとなす。然しながら其間自ら證候に幾多の差異を來すは當然なり。これ、更に各病詳論の眼目となり、延いては後世之を受くる醫人の好箇の研究題目と成りし所以となすべし。

驚も狂もこれより觀測する時は、畢竟其發病狀態の異同に過ぎざらんのみ、即ち驚與狂亦就驚恐狂躁發狀命名耳。其本皆一也。

と斷じたり。茲に癲癇發作の狀態を詳論するを見るに

激倒後變證狀(新)

の中に、其經驗を集約したり、これを一括せんに

激倒後變證狀の中に包含せらるべき發作及び經過としては

- 一、發前無異
- 二、發前有異
- 三、連屈昏迷

- 三、舉措酒朦
- 四、顔貌轉變
- 五、心氣擁滯
- 六、省後無識
- 七、省後有識

等を舉げて以て夥多の症狀を節するを得べし。

更に狂疾の發作せんとするや、其初期に於て證候最も多種なりとし、即ち

奔騰躁驚證狀(新)の中に、諸多の發病及び經過を列掲したり。

奔騰躁驚證狀中、主たる包括形態としては

- 一、舉動不精
- 二、聲音徒發
- 三、奔行不定
- 四、飲食異常
- 五、狐疑沈瀟
- 六、無識暴兇
- 七、突然變慮

等を有するとなし、世俗稱する處の狐憑依を目して一種の狂證となせり。これ素より卓見たるも

非野狐所崇、眞狐憑者百千中之一二、或亦有之。終是帶癩氣之人耳

と云へるは、同じく動物憑依を信ぜし時代思想の片鱗を窺知すべきものならん。

驚、即ち驚癩を小兒の重病危殆するものとし、大人の驚悸と軌を同一になすものといへり。駕怖、駕驚、皆然り、大人の驚恐する、其狀癩症と差異を認めず、世の怔忡なる一門を立て、或は心忪の文字を以て之に充つる者あるも、畢竟癩中の兼證となし、外に表はる、形貌を以て驚とし、内に動く形容を指して悸、又恐といふ、悸は即ち怔忡たり心忪たり、癩の外表面異狀を目して狂、驚、癩と稱し、癩

狂兼發する者、又は驚狂兼發する者あるは悉く一癩疾の動搖に過ぎざるものと斷せり。

故に、古今の醫書に據りて雜多の名目を収録し、是に附言して曰く

己上名稱論說、皆是泛濫博識、不得要約、無益於診候、有害于治事。古今華人、槩誇名稱、却多因名迷實、遂至謂馬癩用某方、猪癩用某方、支離煩猥、絕不知一本之旨趣、雖不足深責、而以其害干療術、故詳辨正焉。

い。

即ち要約の根本的用意あるを知るに足るべきなり。

附載する處の癩騃、體軟、不食、不大便、不寢、悸の證候論の如きは、本文を看て以て其旨趣を洞察すべし。表裡の證狀一ならずとするも、恐らく狂を發する前後に在て、悉く最も顯著なる一事象

となすは、不動の觀察となすべく、但字義に於て異論を挿むべきもの無しとせざるのみ。之を要するに古今の名義を集約して、經驗經緯の主題を掲げたるは、今にして逸興禁すべからざるに俱に、本邦に發展したる精神病關係の集約をして、一種の價値を貽したるは、即ち是れ看過すべからざる文獻の一言ふを得べし。

『一本堂行餘醫言』 卷之五

平安 香川修德太冲父著

癩(何間切音閉) 驚。癩。狂。

附 癩騃。體軟。不食。不大便。不寢。悸。

癩者、驚癩狂之總名、而所兼尤衆廣也。夫癩之爲證也、或憂、或怒、或悲、或笑、嫌忌對人見人、或好愛間居獨處。或喜蟄暗地幽室、或憂愁無聊、絕無歡娛之意、或疑人議己短、或每事猜忌、思慮無窮、或過憂無活計、或怒氣屢發、或怒過續以啼泣、或獨語自墮淚、或氣沈心淪、如將陷、或恐世議、或慮衆評或危心如履薄冰臨深淵、或怯弱恐聞死喪刑殺傷損危厄之事、直即冷汗出。或腋下與背汗出。或上氣衝逆、時又眩暈、或恐登高山過缺岸、渡板橋仰石門。或恐獨自出行、從人纒出行、或寢

食如常、唯恐他出、終年不出戶外或聞金石之受聲、瓦陶之破響、川流風樹之鳴音、人語畜鳴之稍大、直輒驚怖、惕然欲跳、或四肢冷、冷汗出。或心無樂意、欲就死。或妄惡如人將來捕之、欲走亡而竄匿、唯恐及之不遑逃避。或夜間耿耿、曾不交睫、偶睡、則雜夢驚驚、難成熟寢。或夢夢然自高賢、或好潔惡穢。盥洗掃除、如何修之水淫、如兒元鎖潔癖。或遠慮多想、狐疑猶豫僕僕爾。每事再三思慮拮据、似是丁寧反覆、實是模糊不決。或平常深憂不足憂之事。或既成之事、復重改作、至再至三、猶且數回不定。或過誤自咎、懊恨嗟嘆不已。或獨語書空、若有所失。或獨坐孤枕、想往料來、沈沈默々、他悶無所放遺、甚、則嚙舌欲死、投井自溺、把刃就害、似是證候千道百出、不可舉數、無慮皆係屬一癩證中矣。

又有諸病證中、帶癩氣者。又有諸證未治、漸為內虛、忽發大癩者、此多不救。又妊中發癩者、名妊癩、輕者可治、重者必死。產後亦同。及其病之漸進也、癩倒昏塞、不省人事、故亦謂之癩、又有自始得病、既即運倒者。蓋癩其總名、而癩亦通新故輕重而稱之。但癩以病間簡慢為呼、癩以癩倒頓越成稱、驚與狂亦就驚恐狂躁發狀命名耳。基本皆一也。

今舉各證之異狀、以資精察詳視之診候。夫癩之將發、或滯食寒氣。或留飲滯氣。或風寒閉外、內氣鬱窒。或房勞虛內、行氣留滯。或過用思慮、心情大鬱。或疾步遠行。滾動內癢。或視怪聽異。或驚恐畏怖。或心惡意忌。或卒然遇變。或忽然忤意。或悲哀憂愁。或怒慍怨恨。或大聲暴響。或屈撓摧折。遂乃卒然運倒昏迷、不省人事、直視吐沫、發聲叫號、手足躁擾。口目瞶引。或手足屈強、咬

牙瞪目。或口眼偏引、搖頭振身。或呼吸不聞、口開軀軟、殆如死人、少時之間、癢退氣復、如夢忽覺、如殆無事者。或有已醒之後、煩悶苦心者。或有醒後二三日、及四五日、懊悶不了了者、或有甚則直視不誤、不飲食、數日、至十餘日、括然如死人者。或有輕而止、閉氣如睡夢、少時而不顛倒者。又有將發必先苦心懊懣、無所消遣者。又有發前無何小異者。又有發前呻吟叫號、喝喝不止、非欬似欬者。

俗又云、見水而發、見火而發、見稠人躁衆而發者、間亦有之。非必皆然、蓋水之流動、火之熾烈、衆人之熱鬧、人一見其躁擾之狀、怯心攝氣、驚駭畏怖、跳動內氣、癩為之衝逆而發耳。又有遇生人見怪物、聞世變而發者。或觀人失血、及觀自出血而發者、亦同。夫癩癩之成也、全是腹裏之癢、為之根基、其癢上衝犯心、心氣為之隘狹屈迫、鬱窒蔽塞、而後見種種癩狀、證候多端、怪奇不一。然而決癩之為癩者、以其脈近平故也。若無脈則死。或有脈至伏似無者、此非絕脈、乃伏之至甚似無者也。病勢稍緩、則脈微微出、珍是候者、勿誤為絕脈、後世有痰迷心竅之說、甚可疑也。殊不知心固居膈膜上、而膜之膈限一層、猶樓上與樓下、所謂上焦如霧者、故唯氣可通貫、而有形者、則不可至也。獨有食道胃脘、自上咽下至胃、一道為水穀流下之路徑耳。此外更無別路、何他物之可能到乎。且癩癩之上犯、亦唯其氣衝逆也。痰既有形物、況且稠粘、非可滲流、則又何得到心之左右地位哉。是故痰塞心之說、決不足取也、設謂本部如霧之氣成痰、則益妄矣。假令本部如霧之氣成痰也、即成痰、則稠粘不可滲透肌理。食道胃脘、固為吞吐之途、一路通貫、無復歧距、吐痰、既胃脘之痰耳、